官能のプリマ

ヴァージョンⅥ

強　奪

アカマル

目次

１．葬儀社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
２．神ながらの道・・・・・・・・・・・・・　7
３．爆破・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26
４．虜囚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　40
５．友の肌合い・・・・・・・・・・・・・・・　52
６．山岳アジト・・・・・・・・・・・・・・・　67
７．山の生活・・・・・・・・・・・・・・・・・　83
８．新しい提案・・・・・・・・・・・・・・・　96
９．強盗団・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　107
10．現金強奪・・・・・・・・・・・・・・・・・　122
11．集結地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　134
12．ひとすじの道・・・・・・・・・・・・・　143

１　葬儀社

仮眠室の電話が大きな音で鳴った。オレンジ色の常夜灯の光に包まれた狭い部屋で、Ｍは素早くベッド脇の受話器に手を伸ばす。当直の専務の声が耳に響いた。心なしか遠慮がちな声に聞こえる。

「仕事よ。Ｍ、」

呼び掛けた声がいつもの歯切れ良い言葉に繋がらず、少しの間が空いた。きっと煩わしい仕事に違いないとＭは直感する。

「Ｍは、市に詳しかったはずよね」

深夜の専務は遠回しな物言いで話を続けた。Ｍは三十五歳の女性経営者の遠慮を感じた。同性の年長者への配慮だろうが疎ましくなる。

「ええ、詳しいわ」

都会から百キロメートル先にある、山と川に囲まれた地方都市の景観を思い出しながら正直に答えた。

「市で仕事をして欲しいの。市出身のＨ・Ｉ・Ｖの患者が亡くなったので移送して欲しいと、提携先の大学病院から連絡があったの。葬儀も併せて依頼すると言っているわ。故人の帰省先の希望なんですって。悪いけどＭにお願いしたいの」

Ｍの勤める葬儀社では、遺体の移送は男性社員の仕事だった。それも深夜の移送だ。しかし今夜、五人いる男性社員はすべて出払っていた。社に詰めているのは専務の他はＭしかいない。葬儀社の看板を掲げている以上、手に余る仕事でも断るわけにいかない。一度病院の信頼が損なわれれば、それまでの仕事だった。競争相手はいくらでもいる。

「いいわ、私が行きます」

「助かったわ。Ｍに断られたら私が行こうと思っていたの。正月早々、エイズ患者の遺体と地方出張だものね。男性社員だっていい顔はしないわ。すぐ事務所に来てちょうだい。病院が急いでいるのよ」

Ｍは受話器を置いてベッドから起き上がった。剥き出しの上半身を一月の冷気が襲う。両の乳首がキュッと締まった。全身に力を入れて思い切って立ち上がる。豊かな乳房が大きく揺れ、尻の筋肉が引き締まった。長い足が不安定なベッドの上でバランスを取り損ね、裸身が右に傾く。左足を横に踏み広げてかろうじて身体を支えた。大きく開いた股間で黒

々とした陰毛が常夜灯の光を浴びて輝いている。Mは慎重にベッドを下りた。情けないほど肉体の重さを感じてしまう。特に胸と尻が心に重い。ダイエットなどをする気は毛頭ないが、これまで生きてきた年輪の重みが身体にこびり付いているような気がする。今年はもう四十歳になるのだ。素っ裸で眠る習慣にいつまで自意識が耐えられるだろうかと思い、頭を左右に振る。長い髪が大きく揺れて、足元から冷気が這い上がってきた。

二階の仮眠室から階下の事務室へ続く狭い階段の途中で、Mは左手に巻いたタイメックスのリスト・ウオッチを見た。ほの暗い空間で、燐光に浮かぶ文字盤が午前二時に近いことを知らせている。人の死に伴う儀式の影で働くMにとって、地味でさり気ないこの時計は必需品だった。服は黒いタートルネックのセーターの上にダークグレーのスーツ。長めのスカートから黒のストッキングに覆われた足が伸び、艶消しの黒いローヒールに続いている。右手に提げた出張用のスーツケースが重い。事務室のドアを開けると、スチール製の事務机を前にした専務が顔を上げた。デスクライトの光を浴びた疲れ切った目で、Mの全身を点検するように見た。

「ご苦労様。相変わらず支度が早いわね。セーターよりブラウスの方がいいけど寒いからね。きっと百キロメートル先の市も寒いでしょう。これが故人の資料。悪いけれど古い方の寝台車を使ってちょうだい。大きいから荷物が積めるわ。Mが来る前に帰省先と連絡が取れたの。無宗教だと言っていたわ。簡単な祭壇だけ積んでいって。それからお棺も一緒にね」

必要なことだけ口早に言った専務は、フォルダーに留めた書類をデスク越しに差し出してからランプシェードを上げた。Mはスーツケースを床に下ろし、受け取った書類に目を通す。癖のある文字で必要事項が記入されている。Mの視線が書類の一点で止まった。フォルダーを持つ右手が微かに震え、両肩がしばし緊張した後、静かに肩が落ちた。大きく見開いた目から涙がこぼれ、頬を伝って紙片に落ちた。白い紙面に書かれた光男の名を涙が濡らす。

Mは懸命に四年前に別れたきりの光男の姿を思い描こうとした。だが、頭も心も真っ白なままで何の像も浮かび上がろうとしない。雑然として暗い都会の雑踏だけが、頻りに頭の隅をよぎっていった。Mの暮らすこの都会のどこかに光男は移り住み、どれほどかの喜びと悲しみを残してエイズで死んだのだ。真っ白な悲しみがMの全身を覆いつくした。

「どうしたのM、涙なんて流して。ひょっとして故人と知り合いなの。私が代わりに行っ

てもいいのよ」

涙に霞む目に当惑した専務の顔が映った。事情を話し、専務に代わってもらった方がいいと、冷たく覚めた理性の声がMに告げる。だが声に抗うように、はっきりした言葉が口を突く。

「いいえ、これは私の仕事です」

答えを聞いた専務の顔が更に当惑する。Mの言う仕事の意味がよく捕らえられないのだ。

「確かに故人は私の知人です。でも、私情で仕事はしません。立派な仕事をすることが故人への義務ですものね」

込み上げてくる嗚咽を抑えてMが答えた。

「そう、それほど言うなら予定通りお願いするわ。知り合いがエイズで死ぬなんてショックでしょうね。伝染の怖れもあるし」

「専務、私は闇雲にエイズを恐れてはいない。エイズは感染力の弱い病気です。血液をとおしてしか感染しない」

苛立った声に専務がまた当惑した。

「Mの言う通りね。でも、長い間記者をしていたMと違って、普通の人はエイズに恐怖感があるわ。治療法がないんだものね。確実に死ぬことが分かっている病気はやはり怖い。どうしてMは、記者を辞めてうちに来たの」

とんだところでMは職歴を問われた。人手不足の葬儀社で初めて発せられた問いだった。

「私は転々と職を変えただけで記者をしていたわけではないわ。二年前にここに勤めたのは、給料が良かったから。早速仕事にかかります」

涙で濡れた書類をショルダーバッグに入れてからMが答えた。今さら死者が身近に感じられてきたから転職したと言って、数度目の当惑を専務に感じさせる必要はなかった。

「気を付けて行って来て。これは宿泊費。領収書を忘れないでね」

経営者の顔に戻った専務が金の入った封筒と寝台車の鍵を差し出す。

「行って来ます」

Mの声が深夜の事務室に響いた。

寒そうに星が瞬く夜道を、Mは駐車場へ急いだ。胸を張って大股に歩くが、怒らせた肩が啜り泣きに震える。古ぼけたプレハブ造りの駐車場の前まで来て、大きく息をついた。くずおれてしまいそうになる腰に力を込め、重い鉄扉を小さく開いた。底冷えのする闇が

全身を覆う。手探りで壁のスイッチを押すと、高い天井に蛍光灯が灯った。ぼんやりした青い光が巨大な霊柩車と寝台車を照らしだす。Mはマイクロバスほどの大きさがある黒塗りの寝台車の後ろに回った。古ぼけた観音開きの後部ドアを開けて、積んであった折り畳み式の担送車を降ろす。死者を乗せる広々としたスペースに、葬儀に必要な機材を積み込まねばならない。まずガレージの隅に置いてある簡易型の祭壇のコンテナを奥に積み、続いて棺を積み込む。止まっていた涙がこぼれ落ち、白木の棺を濡らした。最後に、降ろしておいた担送車を苦労して棺の横に入れた。死者を包み込む白布が付いたマットをロッカーから出し、そっと担送車の上に載せた。この白いマットに死んだ光男が横たわるのだ。狭苦しい車内の光景が再び涙を誘った。正面のシャッターを大きく開き、寝台車のエンジンをかける。Mはようやく落ち着きを取り戻した。

静まり返った深夜の都会を、漆黒の棺車が光男の遺体を迎えに急ぐ。黒々とそびえる大学病院の古い建物の影を縫うようにして、Mは地階の駐車場入口へ回り込んだ。死者が退院する場所は地下の裏口と決まっているのだ。不可解な病院の定めだった。物に変わってしまった患者に人は冷たいとMは思う。警備員に事情を話し、病棟に向かう許可をもらう。担送車を降ろし白いマスクをする。胸ポケットの上に身分を証明するカードを付けてから、担送車を押して院内へと進んでいった。打ちっ放しのコンクリートの壁に挟まれた迷路のような通路を何度か曲がって、エレベーターの前に出た。コールボタンを押すと、静まり返った通路にエレベーターの下りてくる音が低く響いた。担送車専用の広々としたエレベーターに乗り込み、書類に書かれてあった四階のボタンを押す。再び扉が開くと、病棟を照らす常夜灯のほのかな光がMを迎えた。並んだ病室の間に担送車の車輪の音が響き渡る。

「イタイ、クルシイ、ハヤクコロセ、」

静まり返った病室の奥から苦痛に啜り泣く患者の声が聞こえてきた。押し殺した喘ぎ声が、耐え難い痛みをMに伝える。廊下の中程まで進むと、明るく照らしだされた医局の窓が見えた。年配の看護婦が急ぎ足で出て来る。

「遅いじゃない。それに一人なの」

「済みません」

小さな声で言って頭を下げた。看護婦が眉を寄せ、Mをにらんだ。気まずい雰囲気が満ちる前に、若い医師と幼さの残る看護婦が医局から出て来た。

「これが死亡診断書、確実に家族に渡すこと、いいね。葬儀社の人だけだと困るんだが、遺体の引き取り手が医師なので了承します。さあ急ごう」

医師が差し出す封筒をポケットに入れ、Mは黙って三人に従う。病棟の一番奥まったところにある六人部屋の前で一行は止まった。

「満室だから、できるだけ静かに」

声を落としてMに言った医師が両手にゴム手袋をはめる。二人の看護婦が医師に倣って手袋を出した。

「君は手袋を持ってきたかい。H・I・Vの患者だって言ってあったろう」

責めるように医師が言った。

「私は手に傷がないから要りません」

即座にMが答えた。小さくうなずいた医師が先に立って病室に入った。懐中電灯を肩から背負った二人の看護婦が後に続く。Mは廊下で担送車の向きを変え、後ろ向きに曳きながら病室に入っていった。部屋の両側に三つずつベッドが並び、入口から延びた通路はやっと担送車の幅しかない。狭い室内は暗い。白いカーテンで仕切られた五つのベッドで、患者たちが息を殺して長い夜を耐えていた。右側の奥のベッドで懐中電灯の光が揺れている。この病室で一人だけ永い眠りについた光男がMを待っているのだ。

Mは担送車を窓際につけ、載せてきたマットの頭の部分を持った。慣れた手つきで年配の看護婦が足の部分を持つ。ベッドの端に寄せられた光男の床に二人でそっとマットを下ろす。医師が光男の頭を抱え、二人の看護婦が胴を支えた。Mは細い腿を支え、四人で共同してマットの上に遺体を乗せる。軽々とした光男の重さが、まだ温もりの残る肌の感触とともに両手に伝わってきた。遺体を移動させたことで、一応の任務を終えた医師と看護婦が前後して身体を引いた。マットに備え付けた白布で遺体を覆うのはMの仕事だ。目の下に光男が横たわっている。ほっそりとした顔はきれいに整えられ、閉じられた目がMに会うことを拒否している。赤く染めた髪は乱れ、右の耳で金のピアスが光っていた。骨と皮だけになった細い両手が祈りを上げるように胸の上で合わせられ、白い包帯で手首を結わえてあった。今さら何を祈ろうと言うのか。Mの目に涙が浮かび、止めどなく流れ落ちた。涙は白いマスクに次々と吸い取られていく。声も出さずにMは忍び泣いた。

Mの様子を怪しんだ医師が素早く身を乗り出し、ファスナーの付いた白布で遺体を覆う。Mの気持ちなど構わず、光男の顔を白布で包み終わると非情にファスナーを上げた。涙に霞む目で見下ろす光男は、まるで粗大ごみのように白い袋に入れられてしまった。医師が看護婦たちに目配せし、三人でマットの取っ手をつかんだ。目の前で光男の身体が斜めに浮き上がる。慌ててMも足元の取っ手をつかんだ。マットに横たわり白布で覆われた遺体

が何回か宙で揺れ、軽々と担送車に収まった。それでいっさいが終わった。Mは黙ったまま担送車を押し、暗い廊下を再びエレベータへ向かう。送ってきた医師と看護婦が遺体に頭を下げた。エレベーターの扉が締まると、明るい方形の箱の中にMと光男だけが残った。Mは光男を覆った白布を開きたくなる衝動を抑え、声を上げて泣きじゃくった。ひたすら力を込めて担送車を押し、元来た道を戻って、駐車場に帰り着いたときは、全身がぼろ布になったように疲れ切ってしまった。このまま逃げ出してしまいたいという思いが何度となく込み上げてきたが、見たばかりの安らかな死に顔がかろうじてMを引き留めた。人気のない病院の地下駐車場の冷気がMと遺体を包み込む。

「怖いよ、寒いよ、M、助けて」

甘ったれた声の記憶がMの耳に甦る。鉱山の町の真っ暗な坑道で十二歳の光男が泣く。そして十八歳の光男が、鋸屋根工場の北向きの光を浴びて啜り泣く。痛々しいくらい貧弱な裸身が救いを求めて震えている。

「ワッー」

駐車する車両も疎らな暗い地下駐車場にMの叫びが響き渡った。もう悲しみの奔流を押し止めることはできなかった。ダークグレーのスーツを脱ぎ、黒のセーターをむしり取った。スカートを脱ぎ、ストッキングを剥ぎ取る。素っ裸の胸で乳房が震え、広げた股間で固く突き立った性器がおののいた。担送車の上のマットに両手を伸ばし、遺体を覆った白布のファスナーを下ろした。今にも目を開きそうな邪気のない死に顔が目を閉じたままMをうかがっている。胸の上で両手を組んだ痩せ細った光男の身体を、そっと素肌で覆った。温かな裸身に触れる、冷えていく肉体の感触が悲しい。Mは光男の体温を甦らそうとするかのように、冷え切った頬に頬を擦り寄せ続けた。突然、白い裸身を懐中電灯の光が照らしだした。

「汚れない仏に何てことをするんだ」

紺色の制服に身を包んだ初老の警備員が、全身を怒りで震わしながら鋭い声で叱責した。端正な顔を苦悩に歪めたMが遺体から身体を離し、豊かな裸身を大きく上に伸ばした。静かな声が冷気を揺るがす。

「かわいそうな弟の弔いを邪魔しないで欲しい」

懐中電灯の光が一瞬揺れてから消え、足音が去っていった。薄暗い駐車場に白々とした裸身だけが立ちつくす。

２　神ながらの道

水瀬川に架かる大橋のたもとの信号が赤に変わった。Ｍは寝台車を停止させて左手首のタイメックスを見た。青く光る文字盤で黒い針が午前五時三十分を指している。明るくなるまでにまだ三十分以上あった。思いの外早く市に着いてしまったのだ。寝台車の周りは闇が覆っている。対向車もなく後続車もない。信号の赤い光を浴びてＭと光男だけが市街地の手前に取り残されていた。大きいだけが取り柄の古い寝台車はヒーターの効きが悪く、川面を渡る冷気が車体の隙間から忍び寄ってくる。Ｍは運転席の窓を少し開いた。飛び込んできた一月の風は、さすがに頬を刺すほど寒い。風の中に微かな川の匂いを嗅いだ。大きく窓を開けて川面を見ようとしたが、橋の下は深い闇が覆いつくしていた。川は光男が育った鉱山の町から流れてくる。この川の下流の都会で生まれた光男は航空機事故で両親を亡くし、鉱山の町に住む祖母に引き取られていた。その町でＭは小学生の光男たちと会い、一夏を過ごした。鉱山の町を出て八年後に市で再会した光男は、シンナー中毒の高校生だった。そして今、四年の時が流れた。生地の都会は光男にエイズを贈り、死を送り付けた。水瀬川を上っては下った光男の生涯は余りにも短く弱々しかった。冷たい川風に乗って「怖いよ、寒いよ、Ｍ、助けて」と、救いを求める光男の甘ったれた声がまた聞こえてきた。悲惨すぎた。

嫌な思い出しかないはずの市で、光男を待つ者はいない。たった一人の肉親である祖母は、寝たきりの痴呆症のまま特別養護老人ホームに収容されている。実際に遺体を引き取るのは医師であるピアニストを代表にした知人たちだった。専務に渡された書類に書かれていた名前が目に浮かぶ。そこには祐子の名があり、修太があり、チハルの名があった。おまけにケースワーカーの天田までが名を連ねている。責任の拡散か葬儀料金の支払いを担保するためか、目的は明らかでない。だが、すべて光男が嫌悪するはずの名前ばかりだった。市を捨てて都会にさまよい出た光男の繊細すぎる神経が、知人たちの勝手な友好を許さないとＭは思う。このまま鉱山の町まで行ってしまいたい心境になる。幼い希望が溢れていた土地に、光男を葬ってやりたかった。

青に変わった信号をにらみ、Ｍは力強くアクセルを踏んだ。巨大な棺車が嫌々をするように車体を震わせながら発進した。遺体の運び先は山地のドーム館だったが、四年前に亡くなったコスモス事業団の理事長が住んだドーム館は今、理事長の個人的な遺産を相続し

た祐子とチハルが住んでいる。彼女たちが、少なくともチハルが遺体を歓迎するとは思えなかった。代表者のピアニストが自分の蔵屋敷を搬送先に指定しなかったくらいだから、ドーム館に運べという指示は光男の同級生だった祐子の好意としか思えない。だが最年少の祐子の地位が四年前に比べて向上したとは思えなかった。遺体を前にした騒動だけは何としても避けたかった。いくら何でも夜明け前に訪ねることはできない。

Ｍは山地に向かう織姫通りを選ばず、産業道路を西に向かった。途中で左折し、四年前に光男と再会した中央公園の横をゆっくり走る。ようやく白んできた空が木立に囲まれた公園を非現実的な景観に見せる。まるで市街地に出現した森のようだ。だが、おとぎの国の森は鉱山の町の元山沢を取り囲んでいた森林とは違う。見る間に明るくなっていく空が色とりどりのゴミが散らかる空間を暴露してしまう。やはり山に登ろうとＭは思った。せっかくの日の出を、市街地が見渡せる高い場所で光男と一緒に迎えたかった。光男は市の風景など見たくはないと言うだろう。しかし、見つめることが生きていく上で必要だったことを、いまさらながらでも知って欲しかった。Ｍは市役所の構内で寝台車をＵターンさせて水道山に向かった。寝台車は光男の祖母がいる特別養護老人ホームへの分かれ道を直進し、山に分け入る。石畳の急坂を二つ、ギアをローに落として越えると水道記念館前の広場に出た。スパニッシュ・コロニアル様式の明るい瓦屋根が東の空からの光でオレンジ色に染まっている。二階から張り出したベランダでは小鳥が遊んでいた。Ｍは記念館の前に寝台車を止めてドアを開け、凍り付いた地面を踏み締めた。全身を包み込む寒さの中を、光男の気持ちを抱いて展望台に向かう。

前方の桜の梢越しに市街地が大きく広がっている。市の東に連なる低い山並みの上のうっすらとたなびく雲が、まさに紫から赤に変わろうとしていた。血のような赤が瞬く間に豪奢な黄金色に変わると、市街全体に白い光が満ちた。顔を出した朝日に逆光となった建築物が黒々としたシルエットになる。南方には遠く、水瀬川が輝く帯となって平野へと広がる市街を遮断している。美しい眺めだった。この市に封じ込められた魔力が解き放たれ、いましも昇天していくようなほっとする光景だ。視線を北に巡らせて山地を見ようとしたが、猛々しくそびえ立った山並みが視界を遮っている。山地は市街地から遥かに遠い。見ることのできない山地に思いを馳せた時、後ろから足音が聞こえた。素早く振り返った目に奇妙な人物が映った。黒い柔道着姿の男が寝台車の後部へ近付いて行く。男と言うより老人といった方が当たっていた。癖のある白い髪を振り乱し、顔一面に白く長い髭を蓄えた男は、さり気なく寝台車の後部ドアに手を伸ばした。観音開きの扉には錠を下ろしてあ

ったが、Mは急いで車へ駆け戻った。

「不幸せな死者に会いたい」

息を切らせているMに、老人が掠れた低い声で訴えた。身長はMとほとんど変わらない。背筋をまっすぐ伸ばし、白くなった髪と髭に覆われた顔でMを見つめている。確かに老人には違いなかったが、黒いウール地の襟元からのぞく肌は青年のように張りがあって朝日に輝いている。

「Mさん、私を死者に会わせなさい」

白い髭に覆われた口が微かに動き、威厳のこもった声で命じた。見知らぬ老人に名を呼ばれたMが動揺する。仕事を思い起こし、かろうじて事務的な声を装って答える。

「見も知らぬ方にお会わせする事はできません」

老人の柔和な目に疑問が浮かび、大きく見開いた目でMを見つめ直す。拒否されたことが信じられないといった風情だ。

「私はかわいそうな死者に呼ばれたから来た。Mさんの許可をもらいに来たわけではない」

「なぜ不幸せで、かわいそうな死者というのですか。気安く私の名を呼ぶあなたは何者です」

まぶしすぎる朝日を浴びた山上で繰り広げられる対話は、現実離れのした感覚をMに与えた。一方的に知られ過ぎていることに違和感が募る。

「その死者は、本当に不幸せではないのかね」

「亡くなった方は皆不幸せです」

混乱した頭で、また事務的に答えた。

「私は一般論など言っていない。ここにいる死者の生涯が不幸せで、かわいそうだと言っているのだ。Mさん、私は皆に師匠と呼ばれている者だ。勝手に会わせていただく」

宣言するように言って、老人が素早く観音開きの扉に両手を当てた。そのまま閉じた両手をゆっくり広げると、錠が下りているはずの重い扉が大きく開いた。信じがたい光景を目の当たりにしたMが一瞬たじろぐ。その隙を突いて黒い柔道着を着て登山靴を履いた老人が、光男の遺体を乗せた担送車を無造作に後部ドアから引き出す。脚が開いて地上に降り立った担送車の上の遺体を、光り輝く朝日が残酷に照らしだした。

「何をするのですか」

大声で叫んだ抗議を無視して、老人は遺体を覆った白布のファスナーを足元まで引き下

ろした。痩せこけた光男の屍があらわになる。強烈な光を浴びた蒼白な顔で、乗りの悪い化粧が醜いほど目立った。歪んだ唇に塗った赤黒いルージュが毒々しい。

「おお、かわいそうな少年は都会にまで追われ、業病にとりつかれて死んだのだ。哀れだ。怒り高ぶる魂が見える」

嘆きの言葉を口にした老人が腰を屈め、素早く光男の唇に顔を寄せた。髭もじゃの口を唇に合わせ、そっと舌を伸ばして毒々しいルージュを舐め取る。

「Mさんのルージュを貸しなさい」

老人の所行にあっけにとられたMは、命じられるままショルダーバッグからゲランを出して手渡す。真紅のゲランを右手の薬指に塗った老人が光男の唇に器用に指先を這わせた。貧相だった死に顔が生き生きと輝き出す。

「死化粧は大切だ。不幸せな死者は、決して神々に受け入れられることはない。自ら立つより他はないのだ」

独り言をいった老人は、胸の前で合わせられた光男の両手に手を伸ばした。

「死者を縛ってはいけない。死者は自由な者なのだ。そうは思わないかね、Mさん」

Mに語りかけながら、老人は光男の両手首を結わえた包帯を取り去る。光男の右手を握り、力を入れて手を下ろさせる。固く硬直した手が嫌な音を立てた。非常識な行為だったが、決して遺体を冒涜しているようには見えない。Mは新鮮な感動を抱いて老人を見つめた。Mの名を知り、光男の来歴を知り、錠の下りた扉を簡単に開いた老人。朝日に照らしだされて行われた出来事が、まるで奇跡に立ち会っていたような荘厳さで思い起こされた。これまでずっと求め続けたものに、ようやく会えたような気持ちさえした。

「光男は生まれ変わるのですか」

陳腐な言葉がごく普通に口からこぼれ落ちた。

「死者は生まれ変わりはしない。死者のままだ。生きている者は、いずれすべて滅びる。それまでの間、不幸せな死者たちはずっと待っているだけだ。この世の神々は決して死者を受け入れようとしない。神々も含め、いっさいが滅び去るまで待つしかない」

「あなたは神々に君臨する神なのですか」

喘ぐようなMの言葉が寒々とした裸木の間を流れていった。

「私は神ではない。インチキ宗教と一緒にしてもらっては困る。私は神ながらの道を教え諭す者だ。死者と今生の者に光明をもたらすことが使命だ。だが、私のような者はこの世に二人とはいないだろう」

「まるでイエスのように」

「その者を知っているのかね」

老人の問いが宙に舞った。Mは黙したまま光男と老人に見入っている。

「ところで、どこまで行くつもりなのかね」

老人の問いが代わった。

「山地です」

短くMが答えた。

「死者は山地の者か」

「いいえ、強いて言えば鉱山の町にしか故人の居場所はありません」

老人はMから視線を外し、遠く南の方角を見つめた。しばらく間を置いてから再び口を開く。

「死者の遺灰は水瀬川に撒くがいい。死者の魂魄が川を通じて市と鉱山の町、そして都会を行き来するだろう。飽かずに待っていられる」

「何を待つのですか」

「エデン」

言い古された言葉にMは面食らった。葬儀社の社員が誇大妄想の老人に惑わされるわけにいかない。慌てて仕事に戻る気になった。遠く輝く水瀬川を見つめている老人に構わず、Mは光男を再び白布で覆い、担送車を寝台車の荷台に収納した。Mが立ち働く様子を、寝台車の傍らで老人がじっと見つめている。柔和な目が恐ろしいほど輝き、衣服を突き破った視線が素肌を舐め回しているような感じさえする。死者に神の道を説くという老人は、生きている者には粘り着くほどの執着を見せるようだ。

「さあ、行こうか」

仕事を終えたMに老人が呼び掛けて助手席に回った。勝手に寝台車のドアを開けて、済ました顔で先に乗り込む。老人の奇跡を一瞬とはいえ信じてしまった弱みがMをくすぐる。仕方なく老人を乗せたまま山地に向かう。布教への対応はピアニストたちに任せることに決めてしまった。

山裾にある美術館から命門学院中等部の裏門へと続く細道を慎重に運転して坂を下った。中等部の門の脇にパトカーが止まっているのが見える。警察官を認めた老人が背中を曲げてドアの陰に隠れた。老人の動作と先ほどの言動から、Mは詐欺師の匂いを嗅いだ。ことさらスピードを落としてパトカーの前を通り過ぎたが、制服警官の鋭い視線を浴びただけ

で停車は命じられなかった。そのまま直進して織姫通りへ左折する。後は山地まで、道はひとすじだった。

「先ほど、警官から身を隠しましたね」

山根川の渓谷に沿って続く山地の道に出たところで、Mは意地悪く老人に尋ねた。

「縁なき衆生と、ことを構えたくないからね」

「あなたは仏教にも造詣が深いのですね。神ながらの道とはどんな教えなのです」

問いを吟味するように沈黙した老人が、黒い柔道着から突き出た逞しい腕を胸の前で組んでから話し始める。

「私は人にオシショウと呼ばれている。教え諭すのが使命だからだ。だが決して教え導くのではない。人はすべて、自らの道は自らで決断すべきだからだ」

「当然のことだと思います」

Mが短く応え、先を促した。

「Mさんは、そういう仕事を続けて毎日が過ぎ去ることが苦痛ではないかね。過不足ない暮らしが退屈になることはないのか」

「私には結構面白い毎日です」

「それはMさんの意識が低いからだ。私に教えを請いに来る人たちは皆、世間的には羨ましい暮らしをし、その無意味さに気付いた人たちばかりだ。言ってみれば覚醒したのだ。この宇宙全体まで認識しようとする人間が、平々凡々たる日常に甘んじていることは、どう見ても不合理なのだ。たとえ気持ちを張り詰めた状態で仕事を続け、家族を愛し、友人と楽しく語り合おうとも、宇宙の果てから見たら空しいことだと思わないか。人として生きる意味がない。活力も想像力も貧困に過ぎる。決して真理など見えてはこない。どれほどの暮らしをしていようと、それが無意味なことであれば、その者は死者と同じだ。生きながらの死ほど耐えがたいものはない。だから私は神ながらの道を教えてやる。生ある物はいつしかすべてが滅ぶのだ。当たり前なことだ。これだけが否定できぬ真理だ。だから滅びの時に向けてこそ人は生きるべきなのだ。死者も同じだ。いっさいが滅びる時を待つしかない。私は、まず身体を鍛えることを勧める。鍛錬された美しい肉体もついには滅びる。惜しいことだ。この惜しくて惜しくてたまらない感情だけが滅びと等価になる。所詮滅びという物理的な作用に物理的な手段で対抗しても意味がない。創造も建設もすべて空しい。ひたすら滅びることを惜しみ、惜しまれる感情の集積だけが宇宙と等価になる。その状態がエデンに他ならない。Mさん、あなたは美しい。このまま滅びるのが惜しいほど

に美しい。だが、あなたは惜しまれる努力をしていない。あなた自身惜しいとも思わないのだろう。愚かしいことだ。残念ながら生きながらの死を選び取っている」

長い説教が続いた。道を説く者はいつも空しいとMは思う。命は滅びても次の命が生まれてくる。その連綿と続く生の歴史を一代限りで退屈で無意味だという。やはり人の驕りだと確信した。

「私は毎日の暮らしに退屈もしていないし無意味だとも思わない。確かに行く末に不安もあるし不安定な生活だとも思う。でも、それだからといって四十歳になる身体を鍛え直してみようとは思わない。万が一、二十歳の肉体に戻れたとしても、それは化け物のようで、滅びることを惜しむどころか滅びてしまいたいと思うはずよ。私は宇宙と等価になるような世界の出現より、退屈に見える暮らしの再生を信じるわ」

オシショウの逞しい身体が小刻みに揺れた。もじゃもじゃした白い髭と髪が大きく膨れ上がる。

「Mさん、私は七十五歳になる。信じられるだろうか。化け物に見えるかね」

「お年の割に素敵な肉体だと思うわ。オシショウが私に言ってくれた言葉も同じ意味でうれしく聞かせてもらった」

「残念ながら意識が低すぎる。職を変わった方がいい。葬儀社はMさんには似合わない」

たとえ老人でも職業蔑視は許せないとMが身構えたとき、街道の先にドーム館へ続く横道の入り口が見えた。Mはブレーキを踏み、寝台車のタイヤをきしらせて街道を直角に曲がった。疎水沿いのピアニストの蔵屋敷を通り過ぎてから、ドーム館の建つ切り通しへ車を進める。タイメックスの文字盤は午前七時を告げていた。

新春の澄明な大気を斜めに切り裂いた朝日が、巨大なガラスのドームを光の固まりのように七色に輝かせている。オシショウの教えを聞いた直後のMには、まるで邪教の寺院のように見えた。四年振りに見るドーム館は以前と変わっていない。植栽された木々の成長だけが時の流れを感じさせる。車寄せから見える大きなガレージも十数台のスポーツカーの位置が変わっただけで変化がない。車体の後部が潰れ、ナンバー・プレートの取り去られたMのホンダビートが四年前と同じ位置に置き去りにされていた。代わりに使っていたMG・Fがすぐ横に駐車してある。すぐ乗り出せそうな磨き上げられた赤い車体が妙に懐かしい。

Mは寝台車を降りて玄関に歩み寄った。スーツの襟元を直してからインターホンのボタ

ンを押す。三回目のコールで、やっと応答があった。

「どなたですか」

ぶっきらぼうなチハルの声がスピーカーから流れてきた。

「葬儀社の者です。故人をお連れしました」

Mが用件を告げたが、応える言葉に迷ったようにチハルが長い間を取った。午前七時では、まだ早すぎる訪問だったのかも知れない。

「玄関に通してください。今、ドアを開けます」

素っ気ない声と同時に錠の開く音が聞こえた。Mが大きくドアを開くと暗い玄関ホールに煌々と明かりが灯った。ドーム館ではすべてのスイッチがセキュリテーセットで操作できたことを思い出した。きびすを返して寝台車に向かった。先ほどまで助手席にいたオシショウの姿がない。辺りを見回したが姿が見えない。二分ほどの間にどこかへ行ってしまったらしかった。それとも、やはり幻覚だったかとMは思う。だが取り立てた影響はない。Mは仕事を続けるだけだ。観音開きの後部ドアを開いて担送車を地上に引き出す。光男の枕元に回り、玄関に向かってゆっくり押していった。吹き抜けになった玄関ホールの中央に担送車を止めて祐子とチハルを待つ。天井から吊り下がった豪奢なクリスタルのシャンデリア越しに、落ち着いた光が白布に包まれた光男を照らしだしている。いかにも居心地の悪そうな雰囲気だ。だが、死者にとって居心地の良い場所など人の世にはない。二階に通じる広い階段の上でドアの開く音が聞こえ、茶のツイードのスーツを着たチハルが顔を見せた。

「何だMじゃないか。不幸があると決まって顔を見せるね。まるで疫病神だ」

頭の上からチハルのぶっきらぼうな声が落ちてきた。まったくその通りだとMも思う。

「葬儀社のMです。故人をお連れしました」

階段を下りて担送車に近付いて来るチハルに丁重に挨拶した。

「参ったねえ。まさかMが来るとは思わなかった。まあ、ハイエナだかコンドルだかは知らないが、お似合いだとは思うよ」

「故人をどこに安置するか指示してください」

チハルの悪口には取り合わず、事務的に尋ねた。

「へえ、Mは葬儀社の主任なんだ。偉いもんだね。私もコスモス事業団の主任になった」

Mの左胸を見つめながら、問いを無視してチハルが言った。その一言でMの口元に笑みが浮かぶ。水道記念館でMの名を呼んだオシショウの謎が簡単に解けた。病院用の名札を

外し忘れていたのだ。余裕を持ってチハルを見つめ返す。

「コスモス事業団は四年前に解散したはずよ。それより、早く安置する場所を教えてください」

「もちろん、コスモスの収益事業部のことさ」

「ゲーム機屋さんのことね」

Mが言い切ると、愉快そうだったチハルの表情が尖った。

「光男はホールの奥にそのまま置いておけばいいわ。どうせ今日中に灰にするんでしょう」

吐き捨てるように平然と言ったチハルの顔をMがにらみ付ける。

「チハルには常識っていうものはないの。それから死者を敬う気持ちも」

今度はチハルが驚いた顔でMを見た。

「縁もゆかりもない死者を引き取るだけでは不十分というのね。どちらかと言えば光男はMと縁が深い。Mが葬式を出せばいいんだ」

チハルの感情的な声が玄関ホールの高い天井に響いた。オシショウが言ったように、不幸せでかわいそうな死者は神々に受け入れられないどころか搬送先のチハルにさえ受け入れられない。しかし、チハルの言動にも一理があると認めないわけにはいかない。確かにチハルよりMの方が光男との縁は深いのだ。

「祐子を呼んでちょうだい。祐子がきっと、ドーム館を搬送先に指定したはずよ」

できるだけ冷静な声で、赤く上気したチハルの顔を見つめながら頼んだ。

「ここを指定したのはピアニストだ。祐子は下りてこないし、光男にも会わない。同じ屋根の下にいることさえ辛いってさ」

チハルの答えはMの全身を悲しみで満たした。何と甘ったれた子供ばかりなのだろうと思う。悲しみの底から怒りが湧く。全身がわなわなと震えだした。

「幼なじみの死に顔さえ見られないと言うのね。なら、光男と一緒に私が会う」

Mは無造作に光男を覆った白布のファスナーを引き下ろした。明るい玄関ホールの光を浴び、光男の口元でゲランのルージュが真っ赤に燃えている。大きく見開いたチハルの目が遺体に釘付けになる。Mはその場で服を脱ぎ去り全裸になった。豊かな裸身全体が薄くピンク色に上気している。死者に向けられていたチハルの視線がMに戻った。陰惨な表情が一瞬に和むのがMに分かった。

「素っ裸が好きな女だ」

そっと遺体を抱き上げたMにチハルが言った。

「そう、すべてのしがらみを取り去った女が光男に付き添い、祐子に会う」

大声でMが応えた。遺体を抱えた裸身が階段に向かって歩き出す。豊満な乳房の下に抱かれた光男の両足が揺れ、赤く染めた頭髪が生者のようになびいた。目の前で繰り広げられる性と死の乱舞は、チハルの目には滑稽なほどグロテスクに見える。思わず駆け寄って剥き出しの尻を蹴ろうとすると、裸身全体が震え、大きな叫びが玄関ホールに満ちた。

「祐子、私はM。光男に会いたくないのなら、無理にでも私が会わせる」

同時に玄関のドアが開いた。Mの怒声がドアの外まで流れ出る。

「死体と一緒に裸踊りかい。M、相変わらず元気なものだ」

背後から冷ややかな声を浴びせられたMが、遺体を抱いたまま振り返った。大きく開かれたドアを背にしてピアニストとオシショウが並んで立っている。オシショウが後ろ手にドアを閉めた。皮肉な声でMに話し掛ける。

「死体を抱いた裸身を拝めるとは思わなかったよ。実に美しい。Mさんの陰毛は黒々と豊かに天を突いている。もったいないことだ。やはり惜しまれる努力をすべきだ」

続けてピアニストが追い打ちを掛ける。

「M、みんな忙しいんだ。僕もチハルも勤めがある。オシショウから聞いたが、Mは葬儀社の社員なんだろう。裸踊りは結構だから、早く遺体を棺に納めて葬儀の準備をしてくれ」

意地悪な物言いだがピアニストの言うとおりだった。チハルの話を聞いて興奮したMの負けだった。Mは口を固く結んで言われるままに遺体をマットの上に戻した。四年振りに会うピアニストとオシショウの取り合わせが不可解だった。オシショウの教えを彷彿とさせるほど逞しく鍛え上げたピアニストの肉体が、何にも増してMを打ちのめした。流麗にピアノを弾く繊細な青年医師のイメージがすっかりぬぐい去られている。Mは唇を噛みしめ、背筋を正して素っ裸のまま玄関を出た。寝台車の後部ドアから棺を降ろして簡易祭壇を収納したコンテナを引き出す。山地の冷気が素肌を刺した。しかし、これが葬儀社の仕事なのだ。Mは裸で作業を済ますことを自らに課した。光男の遺体の前で私情にまかせて興奮した罰だと思った。用意してきた小さな台車に長い棺をバランスを取って乗せる。左手で棺を支え、右手で台車の取っ手を持ってゆっくりと玄関に向かった。腰を屈め、中腰になって台車を押す。後ろに突き出た尻を冷たい風がなぶっていく。下を向いた乳房が歩みに連れて情けなく揺れた。惨めな姿だった。ドアから玄関ホールに入ると暖かさが全身

を覆った。ピアニストとオシショウ、チハルの三人が担送車を囲んでいる。少し離れて祐子の姿があった。祐子が素っ裸のMを見つめる。蒼白な顔が見る間に赤く染まった。黒いセーターにブラックジーンズの見慣れた服装だった。だが、かつて頼りなさそうに見えた長身は、今や見事に鍛え抜いた逞しさを感じさせる。裸のMだけが一人、ドーム館で柔な肉体を晒しているのだ。白い裸身が初めて羞恥に赤く染まった。

「ごめんなさい、M。取り乱していて迷惑を掛けたわ」

側に寄ってきた祐子が小さな声で詫び、Mの作業を手伝う。

「いいえ、取り乱したのは私だったみたい。この格好を見れば分かるでしょう」

返す言葉に困った祐子が下を向き、いっそう頬を赤らめた。

「でも、Mはいつも美しいわ」

祐子の賛辞を聞いた裸身が一段と赤く染まった。胸とウエスト、そして尻の回りの重さが心に痛い。裸でいることの恥ずかしさが今、ヒシヒシとMの全身を覆う。

「私はウエイト・オーバーよ」

頬を赤く染め、明るい声でMが応えた。

「惜しいわ」

何気なく祐子が口にした答えが耳に痛い。豊かに盛り上がった両の乳房の上で乳首がキュッと固くなった。陰毛に覆われた股間で下半身の重みを感じた性器が縮み上がる。すぐにでも裸身を服で覆ってしまいたくなる。皮膚にまといつく室温が暑い。七十五歳のオシショウを別にすれば、四十歳になるMはこの場では十分すぎる高齢者だった。肉体を美しく鍛え上げた若者に囲まれたMが、ただ一人素っ裸で無防備な肉体を晒している。自ら招いたこととはいえ残酷だった。

気を取り直して仕事に戻ろうと思い、目を上げて担送車を見た。大学病院のお仕着せの寝間着を剥がされた遺体が白いマットの上に横たわっている。骨と皮だけに見える貧相な裸身の股間に、アンバランスなほど大きいペニスがあった。

「オシショウご覧なさい。エイズ末期の兆候がすべて現れています。目を背けたくなるほどの悲惨さだ」

ピアニストの低い声が玄関ホールに響いた。

「不幸せでかわいそうな死者だ。この若さで肉体のすべてが蝕まれてしまった。惜しむべき何ほどもない。いっさいが滅ぶまで待ち続けるしかあるまい」

オシショウが答え、ピアニストが無言のまま固くなった遺体をうつ伏せにした。貧相な

尻の割れ目に両手を当てて股間を押し開く。
「醜い肛門をご覧なさい。毎日のようにペニスで責められて窪んでしまっている。都会まで逃げ出したあげくの最後は哀れなものです」
「この死者が同性を愛し、どれほどの官能の高まりに打ち震えたか知る術もないが空しいことだ。所詮滅びるまでの儚い夢でしかない。最後のあがきだ。滅びの前には相応のあがきがあることは覚悟しているが、露ほども惜しまれぬ死はこれで最後にしたいものだな」
二人の会話を聞いていたMの裸身が、今度は怒りで赤く染まった。台車に積んだ棺を投げ出して担送車の前に走る。
「死んだ光男を蔑むことは許さない。早く遺体に服を着せなさい」
裸身を震わせて叫ぶMを二人が振り返った。
「無様な格好で興奮するのはやめなさい。僕たちは光男を蔑んではいない。光男の不幸を我が事として認識するために検分している。それが物言えなくなった光男のためだと思わないか」
ピアニストが冷静な声を浴びせた。オシショウが追い打ちを掛ける。
「Mさん。あなたの裸身は美しい。だが、それだけのものだ。ここに横たわる死者とそれほどの相違はない。惜しまれる努力をしない無様な肉体を晒して、本当に恥ずかしくないか。たるんできた肉の重みが羞恥心を呼び起こさないか。人は惜しまれる自信がなければ素っ裸になどなれはしない。そうでなければ死者と同じになってしまう。Mさん、もう一度訊く。すべてをさらけ出した裸身が恥ずかしくはないのか」
Mは答えを躊躇してしまった。恥ずかしくないと断言できる根拠を捜してしまったのだ。根拠などあるはずもなかった。個性に属する肉体を、人は恥じる必要はない。だが、無様な沈黙がMの肯定を告げていた。
「M、光男を棺に収めてくれ。遺体は裸のままでいい。Mと同じ姿を、光男が嫌がる道理はないよ」
ピアニストが事務的に命じ、続いてチハルたちに呼び掛ける。
「これからの予定を言うよ。法律では明日にでも火葬できるんだが、明日は友引で斎場が休みだ。だから火葬は明後日の日曜日になる。午前十時の窯を予約してある。明日はここで簡単な告別式をする。M、いいね、葬儀社の仕事だ。すべてよろしく頼む」
Mは唇を噛んでうなずいた。ピアニストが手伝って裸の遺体を棺に収め、棺ごと担送車に載せた。後は棺の前に祭壇を造るだけだ。剥き出しの遺体がなくなったことで室内に平

安が戻った。Mは素っ裸のまま奴隷のように立ち働き、簡素な祭壇を組み立てた。作業中も常に、裸身に集まる視線を妙に意識してしまった。醜い姿を叱責する鞭が、いまにも背後から襲い掛かる気がした。

何の飾りもない白い祭壇の上に担送車に載った棺が重々しく横たわった。一応の格好が付いたところでピアニストとオシショウが帰り、チハルが出勤した。ドーム館の玄関ホールにMと祐子と遺体だけが残った。Mの背筋を冷気が掠める。惨めな気持ちで服を着たが、剥き出しの心が寒さに泣いた。

「私はドライアイスを買ってくるわ。いくら冬でも二日は持たない」

疲れ切った声で祐子に呼び掛けた。

「私も一緒にいくわ。ついでに花も買いましょうよ。何も飾っていない祭壇では光男がかわいそう」

二人は連れだって玄関を出た。Mが寝台車のドアを開けようとすると祐子が押し止めた。

「MG・Fで行きましょうよ。いまも鍵はつけっぱなしなの。Mの車よ」

声を掛けた祐子がガレージに向かって歩いて行く。後ろ姿の先で真っ赤なMG・Fの車体がMを誘った。オープンにして運転席に座ると、祐子がうれしそうに声を上げる。

「やっぱりMにぴったり似合うわ。年に一度は点検整備に出しておいたから安心して運転してね」

イグニッションに応えて軽快なエンジン音がこだまする。アクセルを踏み込むと鋭い加速感が背に響いた。積もり積もった疲労が嘘のように吹き飛ぶ。現金なものだとMは思う。一気にピアニストの蔵屋敷の近くまで走ってから口を開いた。

「祐子。修太の姿が見えなかったけど、どこかに行っているの」

Mの問いが風に流れた。祐子は答えない。不安な沈黙の後で聞き取れないほどの小声が耳に入る。

「修太は忙しいの。明日の告別式も、シュータを代表して弥生が来るはずよ」

「えっ、修太の代理で誰か来るの」

「違うわ。シュータを代表して弥生が来るの。素敵な女性よ。シュータの人には思えないぐらい」

「祐子、意味が分からないわ。シュータって何よ。修太と何の関係があるの」

「ごめんなさい。Mは知らなかったのね。シュータはオシショウの教えを実行するために修太が作った組織なの。弥生は組織の広報担当。同じ工学部の学生なのよ。一年浪人した

から私たちより年は上」

「待って、初めから説明してちょうだい。祐子は工学部にいるのね」

「Mは私たちのことを何も知らないのね。そうよね。私だってMが葬儀社にいるなんて思いもよらなかったんだもの無理はないわ。私も修太も工学部の四年生よ。私はテキスタイルを勉強しているの。Mの知っている理事長の本部があった鋸屋根工場は、織機を入れて私のアトリエに使っているの。もう結構いい織物が作れるのよ。これも私の作品」

祐子は黒いセーターの襟元に巻いたスカーフを取ってMの前に広げた。草木染めで染めた淡い緑の濃淡が規則正しく織りなされた品の良い風合いだった。ハンドルから左手を離して手に持つと、絹と麻の混ざった肌触りがした。しなやかな絹と、ざらついた麻の感触が見事に融合して一枚の布になっている。まるで祐子とMを一枚の布に織り上げたようだった。ピアニストとMと言った方が近いかと思い直し、口元に笑みを浮かべる。今のピアニストは絹より麻が似合いそうだった。

「どう、気に入ってくれた。縦糸に麻を使い横糸に絹を使ってあるの。糸を草木染めで染め上げてから撚りを入れ、それから織り上げたのよ。よかったらMに使って欲しい」

「ありがたくいただくわ。うれしくて涙がでそうよ。祐子がいい仕事ができるようになって私も誇らしい」

Mはスカーフを首に掛けた。祐子の温もりが残る生地が首筋を優しく撫でる。つい目頭が熱くなってしまう。人はそれぞれに成長していき、一人だけ取り残されていくような寂しさを感じた。

「それでね、M。修太は都市工学の勉強を選んだの。ピアニストが面倒を見てきたわ。あれからずっと、修太は蔵屋敷に住んでいたの。二人とも新しい文化を創造したいという共通の目標があったからよ。コスモス事業団の思想を受け継ぐといって得意になっていたわ。ピアニストも子供から抜けきれないところがあるのね」

祐子の的確な批評を聞いて、Mは笑い出してしまった。

「何がそんなにおかしいの。でもピアニストは本気よ。怖いくらい。四年前にオシショウと会ってからは行動的になったわ。もうピアノも弾かない」

今朝嗅いだ詐欺師の匂いがまた鼻先に甦った。その詐欺師が、肉体への羞恥を初めてMにもたらしたのだ。贅肉のついた身体が重く、恥ずかしくてならない。

「あの老人は何者なの。ピアニストはすべてを信じ切っているみたいだったわ」

「ピアニストだけじゃないわ。修太も信じている。私もすべてではないけど信じているの。

オシショウの言うことには真理があると思う。生きている者は必ず滅びるし、私は滅びることが惜しいもの。惜しむ気持ちを大切にしたいとも思う。M、私は身体を鍛えているのよ」

「分かっているわ。よく締まった健康的な身体になった。この場で全裸にしたいくらいよ。どうやって鍛えているの」

「チハルと一緒に週三回、スイミング・スクールに通っているの。もう二年になるわ。泳げなかった私が、今はバタフライで三百メートルも泳げる」

Mは目を丸くしてしまった。家に閉じこもっているとばかり思っていた祐子が水泳選手のように見える。いまのMでは二十五メートルを泳ぎ切るのがやっとだろうと思った。

「そう、オシショウの教えは健康的でいいじゃない。ピアニストと修太は布教を手伝っているの」

「始めは顔を出していた程度よ。でも今は違うわ。私がオシショウを信じたのも、自分の肉体が滅びることを惜しもうという一点だけ。だから身体も鍛えるし頭脳もセンスも鍛える。惜しむ気持ちの量が、やがて滅びることと等価になるという話は分かりやすいし魅力的だった。私の回りにいる若くて優秀な人は、ほとんどがオシショウの教えを信じたわ。でも教えはエスカレートしたのよ。個人の話が社会にまで広がっていった。オシショウの教えでは、社会も人が造っているのだから、いずれ滅びるというの。だから社会も滅びることを惜しまれるように、理想的に鍛え上げる努力をすべきだというのよ。そのころからピアニストと修太は積極的になったの。シュータは社会を鍛え上げるために、オシショウがピアニストに命じて作った組織。修太が実質的に取り仕切っているの。よく街で社会変革の宣伝をしていたわ。でも、過激になった行動が市民に疎んじられて、一年前に織姫通りに借りていた事務所から追い出されたの。それからシュータは人目に付かないところに閉じこもってしまった。いまは秘密組織。オシショウも市内を転々としているらしいわ。今朝姿を見せたのも珍しい事よ」

道は山根川の渓谷に沿ってくねくねと曲がって市街地へと続く。市街地の上に広がっていく暗雲が、Mには見えるような気がする。つかの間吹き飛んだ疲労が再び全身を覆った。

「話の概要は分かったわ。祐子、今度は時間を追って話してくれない」

「詳しいことは私も良く知らないの。関心がなかったし、Mには見捨てられたし、私も散々だった。ちょうどMが都会に去ってしまってすぐに話が始まるのよ。四年前にオシショウはMと入れ違いに都会から来たの。駅に着いたときはもう死にそうだったというわ。行

き倒れ同然のオシショウをケースワーカーの天田さんが保護して市民病院に担ぎ込んだの。末期癌だと診断され、麻酔科のピアニストが主治医になって終末医療を行ったんですって。それが亡くなるどころか、一年のうちに見る間に癌細胞が消え失せてしまったというの。病院では奇跡だと言ったらしいわ。その実績があるからオシショウの言葉を人は信じる。教えも難しくない。ひたすら身体を鍛え、頭を鍛えることだけを教える。大勢の人が信じ、繁華街に道場もできた。若くて優秀な人が通ってきて、ボディービルやストレッチをして難しい話をしていたわ。一年ほど盛っていたけど、さっき話した社会変革が表面に出ると潮が引くように人がいなくなり、熱心な若い信者だけが残った。その信者の代表がピアニストと修太だったのよ」

「チハルは大丈夫だったの」

「あの人は大丈夫よ。社会的に著名なものしか信じないわ。でも、身体を鍛える話には乗った。自分が美しくなるのを嫌う人はいないわ。チハルはもうコスモスの中堅社員よ。最近は男性にも興味が出たみたい。安い石鹸の香りをさせて、明け方になってから帰ってくることもある。お金持ちだし、快活だから、周りが放っておかないのよ」

「祐子だってお金持ちでしょう」

「私は機を織るだけでいい。余分なお金はみんな寄付するつもりよ。どうせ理事長さんが衝動的に相続を決めたんだもの。全部チハルが受け取るべきだったと思うわ」

祐子の寂しそうな声がオープンにした車体の外に流れ去った。

「M、今夜は私の部屋に泊まってちょうだい」

唐突に祐子の声が耳元で響いた。

「M、聞いてる。まだ眠ってはいないんでしょう。シュータには十二人の幹部がいるの。ほとんどが工学部の学生。私は弥生にしか会ったことはないけれど、みんな優秀な人らしいわ」

Mの横で寝ている祐子の声が半円形の部屋に響いた。円形のドーム室を二つに割って中央に壁を造ったため、不思議な反響がする。祐子とチハルで一つの部屋を分けたためにせっかくのドーム室が無惨な姿になってしまっていた。見上げる天井のドームだけが円形の夜空を写し出している。

「それにしてもドーム室がもったいないわね」

中央の壁に寄せたダブルのローベッドから星の瞬く円形のドームを見上げてMが言った。

問わず語りに起きていることを証明してしまった。即座に祐子がうれしそうに話し掛ける。
「ベルリンの壁は崩れたけど、ドーム室の壁は去年築いたばかりよ。今夜もまだチハルは帰らないでしょう。遅い帰りを同じ部屋で待つのは耐えられないと言ったら、チハルが壁を造ってしまったの。壁にはドアもない。あれほど一緒に寝たいと言っていたのに、チハルは勝手すぎると思う」
祐子に執着していたチハルが自立し、取り残された祐子が人恋しさに戸惑っているのがMには面白かった。巣立ちのチャンスは毎日のようにある。それはもう祐子が身を持って知っているはずだった。Mの口元に笑いが浮かんだ。
「何がおかしいの。パジャマを着て寝るMなんて想像もできなかったわ」
笑われたことを機敏に察した祐子が意地悪く毛布をまくった。祐子から借りたパジャマを窮屈そうに着たMの身体が、ドームから落ちる星明かりに白く光った。うつ伏せになった祐子の裸身が隣りに並んでいる。細く絞ったウエストの下に高く上がった美しい尻が続いている。水泳で鍛え上げた裸身は肌が張り切って無駄のない優美な曲線を見せていた。Mは風呂から上がったばかりのみずみずしい祐子の裸身を見た瞬間、パジャマを着ることを決心した。成人してからこれまで、パジャマを着て寝たことはなかった。長い間守ってきた習慣を、祐子の前で捨て去ることは悔しかった。だが、どう足掻いても何の手入れもしてこなかった四十歳の裸身は祐子に対抗する術はない。何よりもMは、愚かにも放って置いた肉体への無関心を恥じた。
「ねえ、M。シュータの話は飽きたの」
媚びるように裸身を寄せてきた祐子が耳元で囁く。
「だって、よく知らないんでしょう」
「知っていることだってあるわ。幹部の名前はみんな知っている。まず睦月、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、文月、葉月、長月、神無月、霜月、そして極月。これで十二人でしょう。弥生は広報担当の幹部なの。だから顔を知られている」
「何だ、陰暦の月名じゃない」
「そうよ、暗号で呼び合っているの。本名なんて明かさないわ。それぞれの幹部が月曜日から日曜日までの七人の部下を持つ。全部揃えば九十六人になるわ。実際の仕事は部下がするから組織の全容は幹部にも分からない。知っているのは修太とピアニストだけよ」
「まるでテロ組織のようね」
何気なくつぶやくと、祐子の裸身がビクッと震えた。

「まさか、祐子。本当じゃないでしょうね」

Mが身を起こし、祐子の顔をのぞき込んだ。祐子の裸身が小刻みに震え、瞼が痙攣する。

「分からないわ。でも、シュータは市に過激な要求をしている。拒絶すると滅びが早まるって言っているわ。最近は山地にもパトカーが頻繁に回ってくる。ピアニストと修太が住んでいるからだと思うの。私は怖い」

急に話が現実味を帯びてきた。Mの表情が硬くなる。

「どんな要求を、いつ頃から、どんな手段でしているの」

話を詰めようとビジネスの口調になって問うと、祐子が震え声で話し出した。

「半年ほど前から、インターネットのホームページとEメールを使って要求している。内容は資産税の撤廃と義務教育の廃止よ」

聞いたMはあきれ返った。受け入れられるはずのない要求だった。第一市が裁量できる問題ではない。確かに資産税は市税だし、小・中学校の設置と管理も市の責任だった。だが国家が控えている。少しも現実味がなかった。

「理由はあるの」

「資産税は土地所有を公的に認めるシンボルだし、義務教育は公的に子供を人質に取る方便だと言っているわ。文化的な地域社会を造るにはどちらも撤廃すべきだというの」

資産税を撤廃し義務教育を廃止することが、滅びを惜しまれるべき社会の条件になるのかとMは思う。確かに極端な土地所有を改め、子供たちを家庭に返し、個性豊かな人材を育てなくては、これからの時代が社会を否定するだろうことは予想できる。だが、到底受け入れられるはずのない要求だった。単に組織の主張を誇示し、宣伝することだけが目的に違いなかった。それだけにエスカレートしていく戦術が怖い。

「ひどいことになっているのね。ピアニストは十八歳、修太は祐子と同じ十二歳のときに知り合い、私と一緒に半年ほど暮らしたのよ。その二人が揃いも揃っておかしくなったのでは、責任を感じてしまう」

「Mのせいじゃないわ」

大きく叫んだ祐子がMの身体に裸身をかぶせた。首筋に顔を埋め、喘ぎながら耳元に舌を這わす。

「いつまでも、じゃれてるんじゃない」

壁の向こうから、いつの間にか帰宅したチハルの怒声が飛んできた。祐子の裸身がすくみ上がる。Mは片手で祐子の肩を優しく抱いてやった。掌の中で乳房が弾み、乳首が固く

尖ってくる感触がした。

３　爆破

山地へ向かう街道を挟んで天満宮と向かい合う位置に工学部のキャンパスが広がっている。キャンパスのすぐ背後には山根川が流れている。細長い敷地だった。学科の新設や研究施設の充実のために建て増しを繰り返し、今や十数棟の校舎が無秩序にひしめいている。山地寄りの北隅に建つ五階建ての建物が都市工学科の研究棟だった。築三十年のコンクリートの外壁には枯れた蔦が一面にへばりついている。研究棟の左端の部分に地下室があった。かつて都市工学科のコンピューター室として使われていた二十畳ほどの部屋は、パソコンの普及に伴って大型コンピューターを撤去して資材置き場になっていた。今や訪れる人もいない。その地下室をシュータがサークル活動の名目で占有してしまってから二年になる。国立大学の鷹揚さで、学校側も使い道のない地下室の占有を黙認していた。学生の質の高さと高度な研究を誇る学風が管理の強化を嫌悪していたのだ。

「計画はパーフェクトだよ。不安はない。なぜ弥生が心配するのか、俺には分からない」

折り畳み式のパイプ椅子をきしらせて修太が興奮した声で言った。天井の低い地下室には暖房もなく、コートを着た六人の男女が輪になって椅子に座っている。修太に名指しされた弥生の表情が硬くなった。大柄の身体の背筋を正し、切れ長の涼しい目で修太を見つめた。透き通った声が地下室に響く。

「私は計画の不備を心配しているわけではないの。広報担当として、現場に爆発の警告をする必要があると言っただけ。今の段階で死傷者を出すわけにはいかないでしょう」

「いいや、警告は要らない。俺も修太に賛成だ。爆発は人のいないエレベーター通路を瞬間的に吹き抜けるだけだ。へたに警告を出して人を招き寄せたりしたら、それこそ取り返しがつかない。俺たちが開発した爆弾の精密度をもっと信頼してもらいたい」

修太の横に座った痩せた男が、尖った声で弥生を遮った。

「卯月の言うとおりだ。現場に警告は出さない。弥生は爆破後にインターネットで大衆に向けてアピールするだけでいい。いいね」

修太の声に弥生が渋々うなずいた。だが次の瞬間、細い眉を不満そうに眉間に寄せて、すかさず口を開く。

「では、正確な広報をするための資料を要求するわ。どうして急に軍事担当の卯月の計画が浮上してしまったのかしら。私には爆弾が完成してしまったからとしか認識できない。

いつから最高会議は追認するだけの機能しかなくなってしまったのかしら。私は不満よ。せっかく総務、財務、広報、軍事、司法の担当者が揃っているのだから、主席の修太は全員から意見を聞くべきだと思う」

静かな声で言った弥生が口元を引き締めて修太の答えを待つ。心持ち上げたあごが修太を挑発した。

「弥生、今さら話をスタートラインに引き戻すのは許さない。そんな権限は最高会議といえども、俺たちにはない。上が決めたことを実行するのがシュータの仕事だ」

「それでも、どんな理由があるかを聞く必要はあるわ。正確な資料を知らなければ、とても広報なんてできない。シュータの主張を大衆に知って欲しいから地下に潜ってまで活動を続けているんでしょう」

弥生の言葉を聞いた修太の口元に苦笑が浮かんだ。大きく見開いていた目を閉じてしまう。総務担当の睦月が代わって口を開いた。ちょうど修太を女性にして一回り小柄にした感じの、人形のように可愛らしい顔に冷たい表情が浮かぶ。

「弥生が何を言いたいのか私には分からない。シュータはオシショウの教えを実行する組織よ。信仰に理由など要らない。私たちの信じる神ながらの道は社会変革に通じている。やがて滅びてしまう社会を滅びるのが惜しいまでに変革しなければならない。そうしないと滅びと等価になるエデンの境地が得られないからよ。まず私たちの住む地域社会の変革から一歩を踏み出すのよ。そのためにシュータは資産税の撤廃と義務教育の廃止を市に迫った。六か月も前のことだわ。でも今持って回答がない。回答がないどころかシュータの組織を洗い出そうと警察が血眼になっている。世間に顔の知られている弥生はよく分かっているでしょう。今日だって尾行を捲くのが大変だったんじゃないの。警告はもう何回もインターネットを通じて弥生たちが出したわ。後はシュータの実力で要求を呑ませるだけ。組織された暴力だけが敵を屈服させる。決まり切ったことよ。その力と意志がシュータにはある」

修太の隣で一気に話し終わった睦月の頬が赤く染まった。上気した顔で黒いマウンテンパーカーのファスナーを下ろす。パーカーの下から黒いスエットシャツが見えた。鍛え上げた肉体にも関わらず身体の線がセクシーだ。弥生は男雛と女雛のように並んだ二人を等分に見て再び口を開く。

「今さら睦月に信仰を説かれるとは思わなかったわ。今度の計画が信仰にかなっているかどうか検証したかっただけよ。修太の意見が聞きたい」

「弥生、危険な考えよ。信仰に基づいて計画は立てられているのよ。検証しようというのは破戒だわ。査問の対象になる言葉よ」

弥生の横で司法担当の極月が正面を見たまま冷たい声で言った。

「極月の言うとおりだ。もう時間がない。爆破が済むまでは二度と集まれないから、それぞれの部門で必要な資金を今日配ります。修太は今後のスケジュールを説明してしまってください」

弥生の意見に終止符を打つように財務担当の如月が低い声で言った。いつも修太のご機嫌を取るのがうまい男だ。大きくうなずいた修太が立ち上がり、五人を見回してから口を開く。

「広報部門に動揺があるようで不安もあるが、やるしかない。実行は二日後の日曜日だ。今夜のうちに卯月と兵器担当の霜月が山地湖に潜って武器を回収する。実行部隊はすべて卯月が取り仕切る。後の者は細部を知らなくてよい。爆発を合図に弥生が実行宣言をインターネットで発信する。その後は顔の知られている俺と睦月、弥生、如月は地下に潜伏する。他の幹部は適宜合流、離散を繰り返して次の実行計画に備えてくれ」

修太の言葉が終わると全員が立ち上がった。目立たないように二人ずつドアを開けて外に出て行く。残った弥生の横に修太が立った。

「オシショウとピアニストが計画を支持したんだ。それでいいじゃないか。計画自体は俺たちのものだ。幹部それぞれに得意な分野がある。今度の計画立案に参加できなかったといってひがむのはよせ」

修太のあいまいな言い方が弥生の神経を逆なでする。白い頬がさっと赤くなった。

「私は科学的な見方を失いたくないの。たとえ信仰の道にあっても検証を続けることは大切だと思う」

「信仰の前に科学が立ちはだかる場合もある。科学が真理ではないことは、とうに分かっているはずだろう。後は自分の信念が問われるだけだ。滅びの時に備えて精進を続けてきたことが惜しくはないのか」

修太の声が弥生の耳の底まで響いた。科学の衣装をまとって君臨した思想が、もろくも崩れ去っていった事実が脳裏を横切る。北の海峡を越えた土地に住む弥生の父は今もストレスを逃れて酔いしれたあげく、人類の平等の夢を語るのだ。親子二代で負け続けるのは情けなさ過ぎた。迷いを振り切るように弥生は明るい声を装う。

「実行を前にして、小心になってしまって悪かったわ。もう大丈夫」

「分かればいいよ。明日、シュータを代表してドーム館の葬式に行って欲しい。俺個人の問題なんだがピアニストも参列する。オシショウも来るんだ。やはり、シュータの広報担当に行ってもらいたい」

修太は弥生の手にメモを渡し、返事も聞かずに睦月と一緒にドアの外に出ていった。

朝から山地に雪が舞った。静かに舞い落ちる雪は凍えた地面に積もっていく。地表が雪に覆われ深々と底冷えのする午後。静まり返ったドーム館で玄関のチャイムが鳴った。今日初めて鳴らされるチャイムを聞いて、光男の棺の前に飾った簡素な祭壇の横に控えていたMがドアに向かった。告別式は午後一時からの予定だった。広い玄関ホールには死者の他はMしかいない。ドアを開けると車椅子に乗った老婆がいた。今にも椅子の中で消え入ってしまいそうなほど小さく萎びきった身体だ。小さく開いた両目も虚ろで、何の感情もうかがわせはしない。

「光男のお祖母さんを連れてきた。本来なら喪主だからね」

車椅子のハンドルを握った天田が胸を張ってMに告げた。老婆の姿に鉱山の町で知り合った町医者の奥さんの姿が重なる。豊かな白髪を真夏の日射しに銀色に輝かせて、無心にヴィオラを操る端正な姿だ。あれからもう十年が過ぎた。懐かしさが胸に込み上げてくる。もう一度じっと見つめると、町医者の奥さんの姿はすでに消え失せていた。寝たきりで痴呆症の老婆が車椅子にうずくまっているだけだ。Mは深い悲しみをこらえて道を空け、無言のまま二人を祭壇の前に案内した。また玄関のチャイムが鳴り、黒い服に雪を乗せたピアニストとオシショウが入ってきた。そろいの黒服は、いつものウール地を柔道着風に仕立てたものだ。オシショウは赤、ピアニストは緑の帯を締めている。この寒さにも関わらず、二人とも柔道着の下は素肌のままだ。二階でドアの開く音がして、緩やかな階段に黒のシングルスーツをゆったり身に着けたチハルが姿を見せた。上着の前を開き片手をパンツのポケットに入れている。マニッシュなスーツが少年のような体型によく似合った。チハルの後から祐子が階段を下りてくる。黒いタートルネックのセーターにブラックジーンズといったいつもの服装だった。セーターの上から首に巻いた金のネックチェーンがMの目を打った。うつむいた表情が硬い。祐子とチハルが玄関ホールに下り立つ前に、またチャイムが鳴った。ドアを開けると黒いチャイナドレスを着た女性が深々と頭を下げた。Mも頭を下げる。

「修太に命じられて来ました。シュータの広報担当の弥生です」

ちょうど同じ背格好の弥生が頭を上げると同時にMも頭を上げた。

「葬儀社のMです。どうぞお入りください」

丁寧に言って道を空けると弥生の切れ長な目元に笑みが浮かんだ。思わずMも微笑み返す。妹を見付けたような不思議な親しみがわいた。無遠慮に弥生の全身を見直してしまった。美しいと思った。均整のとれた身体の線が誇らしく存在を主張している。懐かしさと嫉妬が喉元まで込み上げ、Mは戸惑う。弥生が祭壇に向かって歩みだし、Mの視線が後ろ姿を追った。鍛錬した肉体にも関わらず美しく揺れる尻が目にまぶしい。反射的につむってしまった両瞼に、今見たばかりのシルエットが甦った。Mの口元が苦笑する。二十年前の自分自身だった。急に全身が熱くなった。頬が赤らむのが分かる。現在の自分はどこへ行ってしまったのだろうと思い、情けなくなる。

「M、これでみんな揃った。始めてくれ」

ドアの前で立ちつくすMにピアニストが声を掛けた。光男の棺の前に関係者が並んでいる。右手に車椅子の祖母と天田、チハルと祐子の順で並び、左手にオシショウ、ピアニスト、弥生の順で並んでいる。Mは足早に祭壇に向かい、弥生の後ろに立った。簡素な祭壇の上には大きな青磁の壺が置いてあるだけだ。横に青々とした榊の枝が積み重ねてある。祭主を司るというオシショウに命じられたとおり用意した祭器はそれだけだった。本当に簡素なものだ。七人しかいない参会者の寂しさにもひけは取らない。

「オシショウを祭主に、光男の告別式を開始します」

司会のMが厳かな声で開式を告げた。オシショウが一歩前に進み、祭壇の前に立って逞しい両腕を組んだ。深く一礼してから腹の底に響く声で語り始める。全員が頭を垂れた。

「神ながらの道に縁の無かった者に教えを授ける。哀れな死者よ、迷いなく聞け。者は水瀬川の流れるままに上り下り、まさに海へと注ぐ都会にまで彷徨い出て亡骸となった。者よ、決して惜しまれる肉体にも精神にも無縁であった者よ、心して滅びの時を待て。生あるものも神々でさえもいずれは滅びる。しかし、できうるならば、冥界にあっても悔い改めて心身を鍛えよ。神ながらの道を歩む者たちが、やがてこの世を滅びと釣り合うまでの惜しさで満たす。滅びの時は近い。座してエデンの境地を待つ事なかれ。乞い願わくば、者の怒れる魂魄が冥界に満ち、この地上まで溢れ出ることを求める」

語り終わったオシショウは祭壇に供えられた榊の枝を一本取り、後ろに三歩下がった。右手に持った榊を無造作に投げる。音もなく飛んだ榊は祭壇の上に置いた青磁の壺の中に吸い込まれた。参会者が一列になって祭壇の前に並び直した。オシショウが差し出す榊を

持って全員が順番に壺に向かって投げた。六本の濃い緑色の榊が弧を描いて宙を飛んだが、青磁の壺に入ったものはなかった。オシショウが投げ入れた榊だけが大きな壺から貧相な葉を広げている。

「やはり命濃い榊は死者に届かなかった。神々のみならず、この場に集った者にまで哀れな死者は拒絶された。滅びの時を冥界で待つがよい」

祭壇に軽く一礼したオシショウが元の位置に戻った。

「オシショウ、それから皆さん、ご苦労様でした。これで終わります」

ピアニストの一言でいっさいが終わった。悲しいほどあっけない葬式だったとMは思う。光男は死んだ後さえも説教をされた。泣きべそをかいている顔が見えるようだ。

「M、明日の火葬には祐子しかいけない。遺灰は大橋の上から水瀬川に撒いてほしい」

ピアニストが冷たい声で命じた。二日経ってもまだMには違和感が拭いきれない。自分でも険しい表情になるのが分かる。厳しい声でピアニストに問い掛けた。

「明日は日曜日よ。祐子一人の骨上げでは余りにも光男がかわいそう。それに、二人だけで川に骨を撒けって言うの」

「今さらMに説教されるゆえんはない。僕たちは皆、生きている人のために忙しい。死者との付き合いがMの仕事だろう」

ピアニストが言い捨ててオシショウと並んでドアに向かう。車椅子を押した天田が二人に続いた。

「祐子、私も天田さんと一緒に街まで行くよ」

黒いスーツを着たまま、チハルまでが去って行った。Mと祐子、黒いチャイナドレスを着た弥生が玄関ホールに取り残された。祐子は泣き出しそうな顔をしている。気まずい雰囲気が流れた。

「弥生さん、なぜ修太は来ないの」

美しい身体の線を誇らしく見せてたたずむ弥生にMが声を掛けた。我ながら未練たらしい問いだと思う。

「弥生と呼んでください。私もMと呼ばせてもらう。修太がMによろしくと言っていました」

「嘘でしょう。修太がそんなことを言うはずがないわ」

「そう嘘よ。でも、修太はMのことを時々ロにする。Mに強い劣等感を持っているように見えるわ。ピアニストも同じ。だから私は、ずっとMに会ってみたいと思っていたの」

弥生が胸を張ってMを見つめた。豊かな胸だが決して豊満に見えない。改めて肉体への嫉妬を感じる。拭いがたい感情の嵐がMを混乱させる。これまで感じたこともない思いがこの二日のうちにMを翻弄するのだ。

「今のシュータは目が回るほど忙しい。それしか言えないけれど、来ない修太を信じて欲しいの」

弥生の切れ長な目が一瞬光って言葉を繋いだ。

「広報担当だという弥生がそれしか言えないのでは、信じるとも信じないとも言えないわ。何か不吉な予感がする」

Mの言葉にまた弥生の目が光った。

「Mは予言者の真似をするの」

「いいえ。私はオシショウではないわ」

弥生の口元に笑いが浮かんだ。だが、急に思い付いたように顔を引き締め、声の調子を下げて問い掛ける。

「明日は火葬場に行くのでしょう。正午はどこにいるの」

今度はMが怪訝な表情を浮かべた。

「正午にはもう街に戻っているわ。どうかしたの」

答えを聞いた弥生が黙り込む。何事か思案するように目をつむってからMの目を見つめた。真剣な表情だった。

「いいえ、何でもないの。でも官庁街に行くことはないわね」

「ないわ」

弥生の顔に明るさが戻った。

「私も帰らせてもらう。M、またどこかで会いたいわね」

答えを待たずに弥生がドアに向かった。

「ありがとうございました」

祐子が弥生に頭を下げる。Mも黙って頭を下げた。

「ねっM、弥生はシュータの人に見えないでしょう。Mと似たところがあるわ。髪を長くすれば若いころのMそっくり」

ドアが閉まると同時に弾んだ声で祐子が話し掛けた。Mの混乱した感情に祐子の言葉が油を注ぐ。早く仕事を終わらせて都会に帰りたかった。だが、明日の火葬がまだ残っていた。

寝台車のフロントガラス越しに織姫通りに合流する信号が見通せる。先行車両は一台もない。日曜日にしても道は空きすぎていた。Mは巨大な寝台車をゆっくり運転する。骨壺を抱いた助手席の祐子が小さく見える。それにしても寂しい骨上げだったとMは思う。祐子と二人で黙々と箸を運び、砕けた骨を壺に詰めた。白茶けた骨の上に二人の流す涙が落ち、消し炭のようになった白い骨の中に染み通っていった。そのまま遺灰を水瀬川に流すことはとてもできず、祐子が骨を抱いて帰路に就いた。とにかく仕事は終わったのだ。さっぱりした気分で都会に帰ろうと思うが疲労で全身が重い。怪しい出来事が続きすぎてしまっていた。

もうじき交差点というところで信号が黄色に変わり、赤になってしまった。停止線の手前で止まった寝台車を待っていたように、紺色の制服を着た男が飛び出して来る。黄色と黒の縞を塗り分けた通行禁止の柵を寝台車の前に広げた。あっけにとられたMが運転席の窓を開けると、左腕に交通安全の腕章を巻いた警官が近寄って来た。

「織姫通りは通行禁止。三十分間は通れないよ。都会ナンバーだから知らなくて当然だが今日は出初め式。消防隊のパレードがある。この道路は一方通行だからUターンもできない。車をこのままにしてパレードを見物するしかないね」

晴れやかな顔で警官が告げた。開けた窓からはもう、雄壮なマーチが聞こえてくる。

「祐子、仕方がない。パレードを見よう。気分がすっきりするかも知れない」

呼び掛けてからエンジンを切り、ドアを開けた。道路の隅の日陰に昨日の雪がみすぼらしく残っている。思っていたより外は温かい。新春の日射しが目に痛いほどだ。胸のポケットからオレンジ色のレイバンのサングラスを出してかける。祐子と並んで路上に立ち、織姫通りを上ってくるパレードに見入った。誇らしく隊旗を掲げた旗手を先頭に、二十人ほどが二列になった隊列が次々に行進してくる。各町内の住民で組織された消防団のパレードだ。年齢も体型も皆違う。制帽の下に白髪がのぞき、太ったお腹を突き出した団員がいるかと思えば、髪を茶に染めてピアスを光らせた若者もいる。皆真剣な表情で大きく手を振り、足を高く上げて誇らかに行進する。ちょうどMと祐子の立つ交差点の横に検閲台があった。ともすれば足並みが乱れそうになる隊列が、揃って紅潮した顔だけを右に向けて敬礼する。きりっと制服を着こなした見覚えのある市長がおもむろに答礼を返す。アンバランスな厳粛さが涙がこぼれるくらい悲しい。とても颯爽とした気分にはなれそうもなかった。

隊列を十八数え終わった後に消防車の車列が続いた。団員と同様、誇らかにヘッドライトを点灯した真っ赤な車列がエンジンの音を轟かせて進む。消防団のちっぽけな車の後に消防本部の堂々とした梯子車やポンプ車、工作車などの巨体が続いた。立ちこめる排気ガスの臭気にむせ、Mは西の空を見上げた。

ズガッーン

見上げた空を閃光が切り裂き、爆発音が轟いた。二階建ての銀行の屋根の上に広がる真っ青な空に、赤い炎が巨大な噴水のように吹き上がった。閃光が走った空に真っ黒な煙がキノコ雲のように膨れ上がる。雲の根元に赤黒い炎がのぞいている。すべてが瞬間に起こった。しばし平然としていたかに見えた消防車の列に次々と異変が伝染する。梯子車とポンプ車から、猛り立った獣のようにサイレンが鳴り渡った。消防団の車が道路の右端に停車して道を空ける。路面を振動させながら次々に消防車が交差点を左折していく。寄り添って騒乱のパレードを見つめるMと祐子の目の前で、無線機を握り締めた警官が検閲台に駆け寄っていく。

「市長、市役所で爆発事故」

警官の絶叫を聞いた祐子の身体が激しく震えた。青ざめた唇からつぶやきが漏れる。

「シュータだわ」

「えっ」

聞き返したMが祐子の両肩を揺すった。

「どうしたの祐子。爆発と修太が関係あるの」

「分からないわ。でもきっとシュータだと思う」

返ってきた言葉がMの左の耳から右の耳へ通り過ぎる。もう一度空を見上げ、銀行の屋根の上に膨らむ黒煙をにらんだ。祐子の肩から手を放して寝台車に向かう。祐子も慌ててついてくる。車の前に置いてある柵を蹴倒し、運転席に乗り込んだ。

「どうするの、M」

助手席から震え声で聞く祐子に答えずエンジンをかけた。思い切ってアクセルを踏み込み、黒い寝台車を交差点に乗り入れる。静止する警官の笛を無視して産業道路を突き進んだ。

「市役所へ行くわ」

中央公園へ左折する信号でMがつぶやいた。光男の遺骨を抱いた祐子の身体が小刻みに震える。中央公園の梢越しに見える市役所の屋上からしきりに黒い煙が上がっていた。凄

いスピードで市役所の構内に寝台車を乗り入れたが、屋上を見上げている警官たちは静止しようともしない。さり気なく構内の隅に車を止めて消防の指揮車らしい赤いワゴンの後ろに回った。四階建ての市役所の本館を見上げると、屋上のエレベーター室から真っ黒な煙が吹き上げている。長い梯子を延ばした消防車がしきりに放水を続けている。巨大なポンプ車からは二本の太いホースが延び、市役所の玄関の中に消えていた。コンクリートの地表には爆発の衝撃で割れて落ちた窓ガラスが無惨に飛び散っている。今なおガラスが落ちて砕ける甲高い音が耳に響く。周囲を包む無数の騒音の中に、後部ドアを開け放した指揮車から響く無機質な無線の音が混ざった。二人はじっと聞き耳を立てる。

「こちら地階、エレベーター前の爆発地点。火災は鎮火しました。二人の負傷者を確保。市役所の警備員で軽傷です。二人とも自力で出られるのでレスキュー隊は要りません。救急車を玄関に回してください。なお、二つの遺体を発見しました。現場を警察と代わります」

「了解。こちら指揮車、負傷者を確保して速やかに待避。再爆発に備えよ」

聞こえてきた無線の声はMと祐子をぼう然とさせた。修太が関係したかも知れない事故で死傷者が出たのだ。祐子の震えが止まらなくなる。Mは昨日ドーム館で、帰り際に弥生が言った言葉を思い出した。弥生は官庁街には行かないわねと言ったのだ。その官庁街で爆発事故が起きた。震えている祐子の肩を右手で抱えてMは寝台車に戻った。フロントガラス越しに見える騒然とした役所の構内が、まるで映画のシーンのように見える。青い出動服に身を固めた警官が次々に正面玄関に消える。報道陣が指揮者とおぼしい警察官や消防士を追い回す。庁舎を遠巻きにした野次馬が危険を楽しみ、無責任な論評を声高に話している。隣に駐車してあった無人のパトカーの無線が突然興奮した声を発した。

「本部から各移動。シュータからの犯行声明をキャッチ。これは事故ではない。爆弾テロだ。繰り返す、これは事故ではない、爆弾テロだ。警戒を密にして不審者を検問せよ」

声にならぬ悲鳴が祐子の口を突いた。急いでMが寝台車を発進させる。ハンドルを握る手がじっとりと汗ばんでいた。

「M、早くドーム館に帰って。シュータはきっとインターネットで犯行声明をしたのよ」

産業道路に入る信号で祐子が興奮した声で言った。Mは寝台車のタイヤを鳴らして右折し、織姫通りへと急いだ。祐子の抱いた骨壺の中で光男の骨が小さい音を立てた。

「間に合ったわ。まだ警察に回線を突き止められていないみたい。アドレスが昔のままだ

から、どこかのコンピューターの端末を無断で使っているのよ」

今は亡きコスモス事業団の理事長が愛用していたパソコンのディスプレーに、シュータのホームページが浮かび上がった。ホームページの表紙は赤と黒を斜めに塗り分けた、お馴染みのサロンペインの看板と同じデザインだった。カタカナの文字がシュータに変わっているだけだ。チーフが見たらどんな顔をするだろうかとMは思う。しかしチーフでさえ、この意匠がスペインのアナキストたちの旗だったとは知らない。絶対自由が実現する社会を夢見て戦ったロマンチストたちの旗印を宗教団体が使う。皮肉な話だった。ページを送ると大きく赤い×印を付けられた市役所のカラー写真の下に緑色の文字が並んでいる。大きな文字で実行声明と見出しがあった。

実行声明

本日正午、シュータは市役所のエレベーターを爆破した。天を突く赤い炎は我々の　怒りと認識せよ。これはシュータの要求を無視し、あまつさえ警察権力で圧力をかけ　た市当局への警告である。

速やかに資産税の撤廃と義務教育の廃止を迫ったシュータの要求に回答せよ。こ　の次は警告だけでは済まない。やがて来る滅びを先んじて受け入れる者を募ること　になるだろう。

回答の期限は明後日の正午とする。

シュータを支持する覚醒した市民は次の行動に期待して欲しい。

無惨なメッセージがディスプレーを流れていった。爆発で死傷者が出ないことを信じ切った脳天気な声明が空しい。今日からシュータのメンバーは皆犯罪者だった。警察の目を逃れる術はないだろうとMは思う。オシショウ、ピアニスト、修太、そして弥生の顔が脳裏を流れていった。

「行くところまで行ってしまったわ」

ディスプレーをのぞき込んでいた祐子が疲れ切った声で言った。不思議に哀れみも悲しみもない乾燥しきった声だ。Mの肩が大きく落ちた。この街では人たちが皆、Mの前を素通りして行く。もう懲り懲りだと思った。

「さようなら、私は都会に帰る」

疲れ切った声で祐子に言った。

「イヤッ」

大声を出して祐子が泣き崩れる。黙って見下ろすMの前で祐子はさめざめと泣いた。やがて啜り上げながらも、しっかりした声で訴え掛ける。

「M、これまで色々なことがあっても私はまだ涙が涸れない。修太とピアニストは、きっと涙が涸れ果ててしまったのよ。ねえM、あの二人を見捨てないで欲しいの。Mは二日前、ピアニストも修太も一緒に暮らしたことがあると言ったわ。決してMに責任はないけれど、見捨てることだけはして欲しくない。そうでないと私、過去をすべて殺したくなる。Mに見捨てられた思いを抱いて生きていくことはできないわ。お願いM、修太とピアニストに、涙の味をもう一度思い出させて上げて」

またしても子供たちが縋り付いてくるとMは思った。しかし、Mは子供たちの保護者ではない。もう四十歳になる疲れ切った独りの女だ。身体の手入れすら怠ってきた間抜けな女が、肉体と精神を鍛え上げて信仰で武装した者に対抗できるとは思えなかった。

「祐子、私が何でもできると思うのは間違った考えよ。できないことの方が多いの。今度も私は、たまたま仕事で市に来ただけ。都会でひっそり暮らしている女に何ができるというの。よく目を開いて現実を見なさい」

「だって、Mにしか希望がない。私はMが好きだ。きっと修太もピアニストも、死んだ光男も、」

絶句して、再び机にうつ伏して泣き続ける祐子をMは見下ろす。まだ試練は続くようだった。端正な顔に諦めの笑みを浮かべ、Mはそっと泣きじゃくる祐子の背を撫でた。忘れていた官能の予感が下半身をくすぐる。過酷な明日に備えて今夜はまた裸で眠ろうと決心した。

二人はずっとテレビに釘付けになっていた。無惨に破壊された市役所の地階が何度も画面に映し出された。午後十時を回ると軽傷を負った警備員が画面に登場してインタビューに答え始めた。警察の事情聴取がやっと終わったらしくリラックスした表情だ。問われるままに、事件の様子を生々しく再現する。

「正午になるちょっと前、五分前だったかな。ガス会社から役所に電話があったんですよ。女の声でした。私が応対したんですが、市役所の地下でガス漏れの警報が鳴ったから、すぐ修理に来ると言うんです。それまでの五分間、ガス爆発の危険があるから絶対に地階に下りないでくれって警告されたんです。怖かったけど、警備員には事実を確認する義務が

ありますからね。同僚と二人で地階に行ってみることにしたんです。偉くなんてないですよ、ただの職業倫理です」

インタビュアーに向かって画面の中の警備員が誇らしく胸を張った。

「まず一階のエレベーターに行きました。でもエレベーターは四階に上がっている。階段を使って地下に下りていったんですよ。すると二人の男が踊り場に上がって来るんです。若い男に見えましたよ。同僚が脅しつけるように、誰だと大声で誰何したんです。泡を食って二人とも逃げて行くんです。もちろん私たちは追い掛けました。地階まで追って行って廊下に続く曲がり角まで来ると、一人の男が振り向いて大声で怒鳴りました。危険だ、爆発する、階段に戻れってね。それは真剣な声でした。先ほどのガス会社の警告を思い出し、ガス爆発の恐怖が背筋を掠めました。慌てて階段まで戻って床に伏せたんです。エレベーターの扉が開く音と同時に目の中を閃光が走り、顔が熱くなりました。後は消防士に助けられるまで気絶してましたよ。あの男のお陰で命拾いをしたようなもんです。まさか爆弾が仕掛けられたなんて、あの男たちが犯人だなんて、夢にも思いませんでしたね。今でもガス爆発のような気がします」

警備員は何回も繰り返し同じことを話した。頬の火傷を覆ったガーゼがなければ、ただのおじさんにしか見えない。身に迫った危機を、まだ正確に認識できていないようだった。だが、先ほど見てきた市役所の様子と合わせ、現場の生々しい状況は痛いほど二人に伝わってきた。とにかく爆発で二人が死んだのだ。警備員の話によれば、死者は二人組の男の爆破犯らしい。ピアニストと修太かも知れなかった。どす黒い不安がMと祐子の全身を覆った。疲れ切った身体と心をいたわり合うように一緒に風呂を使い、二人は裸のままベッドに横たわった。事件を知っているのかいないのか、街に行くと言って出たチハルはまだ戻って来ない。

Mはベッドに横たわってドームを見上げていた。眠れずに冴え渡った視界を流れ星が横切っていった。その瞬間、脳裏にオシショウとの出会いの場面が浮かび上がった。まれに見た流星が、奇跡を見たような不思議な気分を甦らせたのだ。正月明けの夜明け前に、なぜオシショウは水道山にいたのかと急に疑問がわいた。オシショウの背後に見えたスパニッシュ・コロニアル様式の瀟洒な建物が妙に気に掛かった。はっとして、隣で眠る祐子を振り返った。安らかな寝息を無視して乱暴に揺り起こす。

「祐子、中等部の先の水道山にある建物は使われているの」

「水道記念館ね。見学できるけれど冬季は閉鎖なの。管理人もいないわ」

寝ぼけ眼の祐子が、それでも正確に答えた。Ｍは左腕のタイメックスを見た。青く光る文字盤が午前一時を指している。ベッドから転がり落ちるようにして床に降りた。重く感じる裸身が我ながら憎々しい。素早く服を身に着け、祐子にもらったスカーフを首に巻いた。ドアの前まで行くと、ベッドで半身を起こした祐子が問い掛けてきた。

「Ｍ、こんな夜更けにどこへ行くの」

「心配しなくていいわ。ちょっと街まで散歩に行くだけ。都会に逃げるわけではないわ」

最後の言葉に安心した様子で横になった祐子を残して階段を下り、玄関を出た。深夜の冷気が全身に染みる。爽快だった。寒さを我慢してＭＧ・Ｆをオープンにする。この時間なら、水道記念館まで三十分足らずで行けるはずだった。

4　虜囚

深夜の道路はおびただしいほどパトカーが目立った。ＭＧ・Ｆは二度も警察の検問に遭った。女性一人の運転にも関わらず、トランクの中まで調べるという徹底した検問振りだ。お陰で水道山の中腹の美術館に着いたときは午前二時近くになっていた。Ｍはがらんとした駐車場にＭＧ・Ｆを止め、急いでエンジンを切った。静まり返った空間にエンジン音が響きすぎたのだ。ひょっとすると、水道記念館まで聞こえたかも知れないと思い、不安が掠めた。青く輝くタイメックスの文字盤で長針が十分間を刻むまで、寒さを我慢して運転席で待った。冷気がＭを嘲笑う。もしかしたらオシショウが、無人のまま閉鎖された水道記念館に潜んでいるのではないかという、滑稽な予想を笑う。水も漏らさぬ警備とはよく言ったものだとＭは思った。一時間足らずの間に二度も検問されたほどだ。オシショウが街を見下ろす山の上で安閑としていられるはずがないと思う。だが水道山は、やはり警備の盲点ではあった。調べてみなくてはここまで来たかいがない。

Ｍは車を降り、駐車場からアスファルト道路に出て山に上っていく。街灯はカーブの曲がり鼻にしか設置されていない。夜道がこんなに暗く心細いものかと、久しぶりに認識させられる。時たま頭上で冬枯れの梢が風に騒ぐだけで物音もしない。天井に空いた穴のように、無数の星が青白く瞬いていた。水道記念館に続く最後のカーブにたどり着いたとき、前方から低くエンジンの音が聞こえた。慌てて右手の山肌によじ上る。ザラザラとした赤松の巨木の陰に隠れ、じっと路上を見下ろす。ヘッドライトの光が路面を撫で、カーブを曲がり切ったパトカーがゆっくりと姿を現した。屋根で点滅する赤色灯が周囲を赤く照らす。胸の鼓動が急に高まる。パトカーを見送ってしばらく間を置いてから、Ｍは山道を回って水道記念館の裏手に出ることに決めた。真っ暗闇の山道を星明かりだけを頼りに山の中に踏み込んでいく。

ようやく水道記念館の裏手の崖に出た。闇を透かしてじっと建物を検分する。Ｍのいる場所はちょうど建物の二階と向かい合っていた。道路はもとより、庭や展望台からも見通せない位置だ。張り出したベランダの手すりが二メートルの隙間を隔てた目と鼻の先にある。手を伸ばして飛び付けば、手すりにぶら下がることもできそうだった。木材で組んだ壁面に小振りな窓が見えた。古めかしい鎧戸が下ろされていたが、細い隙間から微かな灯りが洩れている。確かな光を確認したＭの口元に微笑が浮かんだ。やはりネズミは盲点を

利用したのだ。Mは両腕をまっすぐ伸ばし、ベランダに向けて身体を倒した。足元で小枝の折れる音が響いたが、両手はしっかり手すりを掴んでいる。足を地面から放して両手で手すりにぶら下がった。腕に力を込め、力いっぱい懸垂しようとするが身体が重い。寒さの中で冷や汗が滲む。ピアニストと修太、弥生とオシショウの顔が闇の中に浮かんでは消えた。

水道記念館の二階、北向きの会議室に八人の男女が集まっている。天井が高い瀟洒な造りの一階と比べ二階の天井は低い。電気が停まっているため、ランタンの侘びしい灯りが天井を照らしている。足元は闇が占めていた。学校の教室ほどの広さがある部屋の中心にどっしりした樫材のテーブルが置かれ、十脚の布張りの椅子がテーブルを囲んでいる。

「煙草はやめてくれないか」

一番奥の椅子に座ったピアニストが冷たい声で注意した。慌てて卯月が煙草をもみ消す。ピアニストも横に座る修太も憔悴しきった青白い表情だ。暗く沈み込んだ雰囲気の中で、北側の隅に椅子を持ち出して座るオシショウだけが素知らぬ顔で目を閉じていた。取り澄ました声で卯月が話を続ける。

「軍事担当としては、計画は成功だったと断言できる。無人の市役所でエレベーターだけを派手に爆破できた。最高のデモンストレーションになったと思う。爆風も拡散せず、計算どおりエレベーターの通路をまっすぐ駆け上った。後は爆発のどさくさに紛れて戦闘員が逃げるだけで済んだんだ。すべてうまくいくはずだった」

「何を言うか。二人も死んでいるんだ。何が成功だ」

苛立った声でピアニストが卯月を叱責した。

「そう、二人とも俺の部下だ。水曜日と金曜日を殺したのは弥生だ。なぜ警備員が現場に来たんだ。前日の会議で、警告はしないことになっていたはずだ。なぜガス会社をかたって警告したんだ。余計なことをしなければ、二人は死なずに済んだ。弥生の独走としか言えない。俺は断固、懲罰を要求する」

うつむいて椅子に座っている弥生を憎々しげに見て、卯月がまくし立てた。卯月の弁明を無視してピアニストが修太を叱りつける。

「修太、お前の指揮にも問題があったんじゃないか。内部の人為的なミスが一番怖いと、あれほど言っておいたろう。まるで手術道具を体内に置き去りにしてしまったようで話にもならない」

「ピアニストが興奮しても始まらないよ。もうシュータは犯罪者として追われるだけだ。みんな一蓮托生だよ。どんな滅び方をすればよいかが問われているんだ。今後の計画を考える以外に道は残されていない」

意外に冷静な声で修太がピアニストを諌めた。肩を怒らせていたピアニストが小さくうなずく。部屋に沈黙が満ちた。睦月が間合いを計ったように腰を浮かせて口を開く。

「でも、今後の計画を立案する前に内部的なけじめは必要よ。弥生に不祥事の総括をさせる必要がある」

小柄な身体をテーブルに乗り出すようにして睦月が弥生を見つめた。全員の視線が弥生に集まる。顔を上げた弥生が震える声で答える。

「何の申し開きもできません。私の状況判断が甘かった。死傷者を出さないことだけを考えて警告したが、逆の結果になってしまった。二人の死は今後の行動で償いたい。どうぞ懲罰をお願いします」

「処刑だ」

卯月の罵声が飛んだ。弥生の切れ長な目元が震える。

「馬鹿なことを言うな。卯月、いい加減に冷静になれ。だが弥生は懲罰を免れない。司法担当の極月の意見を聞こう」

ピアニストが落ち着いた声で言って全員を見回す。弥生の横に座った極月が感情を抑えた声で答える。

「戦闘員を死なせた責任を問われたケースはありません。従って前例はないわ。でも、シュータの懲罰で一番重いのは反省です。これまでの最高の罰は反省三日間」

ピアニストが腕を組んで目をつむった。そのまま吐き出すように言葉を投げる。

「オシショウ、決断を聞かせてください」

「反省でよかろう」

つまらなそうに目をつむったオシショウが、つぶやくように言った。

「期間は何日です」

自分の職務を遂行するために、極月が反射的に尋ねた。

「二か月間にする。極月はすぐ執行にかかれ」

ピアニストが立ち上がって即答した。オシショウを除く全員が息を呑んだ。これまで三日間しか科されたことがない懲罰が二か月も続くのだ。だが、後二か月間がシュータに残されているかどうか誰にも分からない。シュータが滅びるまで、ずっと懲罰が続くかも知

れなかった。弥生の肩が落ち、端正な唇がきつく引き締められた。
「これでけじめは着いた。極月と弥生を除いた者は僕の回りに集まってくれ。今後の計画の概要を説明したい。一階で見張りに就いている如月も呼んで欲しい」
　ピアニストの声で席の移動が始まる。入口のドア近くに座った弥生と極月を残して、全員が北側の奥に移っていった。室内を見回してから、静かに立ち上がった極月が弥生の後ろに回った。
「みんな忙しくて、懲罰の執行を確認している暇はないわ。オシショウとピアニストの命により私の責任で執行します。弥生、立ちなさい」
「はい、お願いします」
　凛とした極月の声で、素早く立ち上がった弥生がはっきり答えた。
「弥生、シュータを攪乱した罪で懲罰を科す。今日から二か月間の反省を命じます。素っ裸になって反省の準備をしなさい」
「はい、懲罰をお受けします。十分に罰してください」
　神妙に答えた弥生が服を脱ぎ、下着をとって裸身を晒した。鍛え上げられた美しい肌がランタンの光に白く輝く。
「足を大きく開きなさい」
「はい」
　命じられたとおりに弥生が両足を左右に広げた。長い足が震え、ランタンに照らしだされた股間で反射光が輝いた。二枚の陰唇の先でブラッドストーンのピアスが光っている。左耳のピアスとお揃いの暗い血のような石だった。
「二か月の反省期間中は、肉体を惜しむための飾りは必要ない。股間のピアスを外します。弥生の証として耳のピアスだけは許す」
　股間に屈み込んだ極月の作業がしやすいように、弥生は股間を前に突き出す。眉間が苦しそうに中央に寄せられ、陰唇を飾った二つのピアスが取り外された。
「反省の装具を付ける」
　極月が宣言し、テーブルに載せてあった黒いアタッシュケースを開けた。中から直径二センチメートルの金色のリングを取り出し、弥生に差し出す。
「反省の気持ちを込めて、陰門を封鎖しなさい」
　金色のリングを両手で押し頂くと、冷たい金属の感触が手から下半身へと伝わる。ブルッと裸身を震わせた弥生がリングを開いた。中腰になって二枚の陰唇に空けたピアスの穴

に慎重にリングを通す。そっとリングを閉じると、カチッという金属音とともに左右の陰唇が繋ぎ合わされた。思わず背筋が震えた。股間にぶら下がったリングも無様に揺れる。金色のリングがランタンの光を浴びて陰毛の間で輝いていた。情けなさと恥ずかしさが全身に込み上げ、白々とした裸身がピンクに染まった。

「両手を前に出しなさい」

命令に従って前に差し出した両手首に銀色の手錠がはめられた。手錠というより手枷といった方がよいほど鎖が短い。

「さあ、反省のポーズをとりなさい」

命じられた弥生が数歩を歩き、黒い板壁の前に立った。ゆっくり腰を下げて中腰になる。左足を窮屈に曲げて手錠で繋がれた両手をまたぐ。続いて右足でまたぐと、手錠で戒められた手首が膝の裏側に回った。手錠の鎖が短いため、尻を潜らせて後ろ手錠にすることはできない。腰を屈めて尻を突き出したユーモラスな格好でいるしかなかった。そのまま正座するのが反省のポーズだ。正座といっても、頭を床に着けて高く尻を突き出していないと、膝の後ろに回された両手が手錠で痛む。恥ずかしさを我慢して壁に向かって頭を下げ続けるしかなかった。性器や肛門はおろか、陰部全体が丸見えだった。二枚の陰唇を繋いで陰門を封鎖した金色のリングが陰惨に輝いている。

「規則だから肛門栓を装着する。排便時間は毎朝七時から三十分間。その間しか栓は外さない。規則正しい生活のため我慢しなさい」

極月が宣告し、長さ十センチメートルの金属棒を持って、高く掲げられた尻の後ろに屈んだ。棒の太さは親指ほどもある。

「覚悟はできています。挿入してください」

答えた弥生が窮屈そうに両足を開き、尻の割れ目を一層高く掲げて下腹の力を抜いた。尻に当てられた金属棒の冷たい感触が肌に鳥肌を立たせる。極月が金属棒の先を肛門に割り入れ、指先に力を入れた。ウッという呻きが弥生の口を突く。ピンクの粘膜の奥に深々と金属棒が挿入された。棒の根元のビー玉ほどの突起だけが尻の外に残されている。極月が丸い突起に小さな鍵を入れて回すと、肛門の奥で金属棒が漏斗状に膨れ上がった。漏斗の底辺は五センチメートルもある。決して抜き去ることはできない。ピアニストの指示で冶金工学科の信者が開発した恐ろしい装具だった。形状記憶合金で造った金属棒が僅かな電流の刺激で四倍に膨らむのだ。鍵を入れてスイッチを切らない限り形状が変わることはない。弥生の下腹部を屈辱感が襲う。たまらない恥辱が肛門を刺激し続ける。

「懲罰のスケジュールは落ち着いてから決める。今夜は就寝の指示があるまで反省のポーズでいなさい」
「はい」
情けない格好で弥生が答えた。仕事を終えてピアニストたちの輪に戻っていく極月の気配を背中に感じながら、弥生は二か月続く反省に耐えられるだろうかと不安になった。だが信仰への飽くことのない精進だけが、きっと懲罰を乗り越えさせてくれると思い直す。弥生は恥ずかしさを我慢して剥き出しの尻を高々と宙に掲げた。

ピアニストを中心にして、修太、睦月、如月、卯月、極月の六人の幹部が北側の奥で輪になって小さな声で話し合っている。弥生は入口ドアの横の壁に向かい、素っ裸の尻を晒して反省のポーズを続けていた。オシショウも輪から離れて南側の椅子に陣取り、相変わらず居眠りをしている。
突然「キャッ」という女の短い悲鳴と、人の揉み合う音が外のベランダから聞こえてきた。ピアニストの周囲が殺気立ち、睦月が素早くランタンを消した。全員が次の物音に備えて聞き耳を立てる。静けさの中で、ベランダに通じるドアの開く音が大きく響いた。
「俺だ、霜月だ」
廊下から押し殺した声が呼び掛けた。部屋中にホッとした空気が流れ、睦月が再びランタンを灯した。明るさの戻った会議室のドアが大きく開かれ、後ろ手にされたMが霜月に突き立てられて入ってきた。
「Mっ」
ピアニストと修太が同時にあきれ返った声を上げた。
「何だ、二人の知り合いなのか。俺が山伝いでやってきて崖から二階のベランダを見渡すと、ちょうどこの部屋の西側に潜んでいたんだ。チェックを入れてよかったよ。もっと見張りを厳重にした方がいい。武器は運んできた。これからは戦争だぜ」
兵器担当の霜月が野太い声で言って、レスラーのような手でMを会議室の中央に突き出す。Mの足元が危なくふらつく。すぐ体勢を立て直し、部屋の奥に集まっているメンバーの顔を見渡した。後ろ手にかけられた手錠が大きな音を立てる。
「ピアニストも修太も、オシショウもいるわね。みんな死なずに済んだのね。弥生が見えないけど、全員揃っていて安心したわ。さあ一緒に警察に行きましょう。もう足掻いたって無駄よ。二人も死んでいるんだから覚悟を決めなさい」

Mの鋭い声が部屋中に満ちた。
「ハハハハハ、Mはいつも僕たちの邪魔ばかりする。でも、今回は遅すぎたね。霜月の言うように、もう戦争が始まっているんだ」
ピアニストの陰惨な笑い声が会議室に響いた。
「ピアニスト、声が大きすぎるよ。山岳アジトに移るまでは、ここにいなくちゃならないんだ。Mも静かにして欲しい。葬儀社の社員の出る幕はない」
修太の皮肉な声がMを刺激した。大きく胸を張って再び口を開く。
「山岳アジトですって。子供の遊びと同じじゃない。でも人が死ねば遊びでは済まないわ。修太、ピアニスト、そしてオシショウも警察に行きましょう。弥生もきっと後から自首をするわ」
大声がまた部屋中に満ちた。怒りで顔を真っ赤にしたピアニストが椅子から立ち上がり掛けると、居眠りをしていたはずのオシショウがいち早く立ち上がった。
「Mさん、この場所には因縁があるね。わざわざ来てくれてありがたいよ。だが、ご覧のとおり弟子たちは世事で忙しい。私がお相手しよう。弥生も、ちゃんとMさんの後ろに控えているよ」
オシショウの声でMが振り返った。今入って来たばかりのドアの横に、黒い板壁を背景にした白い尻が見えた。陰門を封鎖した金のリングと、肛門からのぞいている銀色の棒が目を打った。Mの視線を意識して、剥き出しの尻は微かに震えている。驚愕がMの全身を捕らえた。大きく目を見開き、信じがたい光景を見つめた。途端に怒りが込み上げてきて、掠れきった叫びが喉を走る。
「弥生になんてことをするの。あなたたちの仲間でしょう」
「M、大声を出さないで。私が望んで懲罰を受けているのよ」
即座に弥生の声がMを遮った。熱く燃え上がった怒りに冷水を浴びせるような響きだった。白い尻の後ろから発せられた言葉が、Mに現実を理解させる。もはやMはシュータの虜囚に過ぎなかった。後ろ手を戒めた手錠が肌に冷たい。
「やっと冷静になってくれたようだね。Mさんの処遇は私が考えよう。ピアニストたちはそのまま計画を詰めなさい。私の方は極月が手伝ってくれればいい。さあ、また仕事だ」
オシショウの一声で会議室に秩序が戻った。ピアニストを中心にした六人の輪では、新たに加わった霜月が大きなバッグを開けて一人一人に銀色に光るリボルバーの拳銃を配った。機械工学科の信者たちが研究室で造った銃を下宿から運んできたのだ。手作りだが精

巧で丁寧な造りだった。六人の表情が見る間に引き締まり頬が赤く昂揚した。ドアの横ではオシショウと極月が、裸でひざまづいている弥生を挟んでMと向かい合っていた。

「Mさん、弥生の言葉を聞いたろう。弥生は致命的な失敗をしたが、自ら懲罰を望み、もう一度自分を鍛え直そうとしている。滅びるのには惜しい覚悟だ。二か月の懲罰が終われば見違えるほど逞しく、美しくなっているはずだ。Mさん、あなたは美しい。しかし、美しさを惜しむ努力を何一つしていない。せっかくの機会だ。弥生に倣って精進してみたらどうかね」

今やオシショウが権力を持ってMに臨む。Mは後ろ手錠のままきつく唇を噛んだ。負けるわけにはいかなかった。

「お断りするわ。私は惜しむものなどない。惜しまれる必要もない。普通に暮らすことだけが望みよ。でも、どう見ても私はシュータの虜のようだ。あなた方の暴力には屈しないが、試練を避ける術はないようね」

オシショウが横に立った極月に目配せした。極月がMの背後に回る。

「実にもったいないことだ。これほど勧めても覚醒しないとは情けない。仕方ない、神ながらの道の名において私が処遇を決める。異論はないね」

オシショウの駄目押しの声が響いた。Mを見据えた目が怪しく光る。

「正常な論理が通るとは思えない。どうにでもするがいいわ。だが屈服はしない」

毅然とした答えがMの口を突いた。オシショウの威嚇を押し返すように大きく胸を張る。

「Mをシュータの虜囚とする。処遇は反省。二か月間弥生と同等に扱う」

宣告の声が冷たく流れた。背後にいる極月がMの後ろ手錠を外す。

「M、裸になりなさい」

命じる声が背中に落ちた。うなずいたMの目に、高く掲げられた弥生の尻が映った。また無様な姿を晒すのかと思うとうんざりする。それも鍛え上げられた裸身の横に晒されるのだ。黙って都会に帰ればよかったと、悔いが喉元まで込み上げてきた。だが、ここまで来た以上、行くところまで行かなければならない。Mは黙ってスーツを脱ぎ、セーターを脱いだ。豊満な裸身がランタンの灯に浮かび上がる。オシショウが唾を呑み込む音が聞こえた。Mは素知らぬ振りで、テーブルに置いたセーターの上から祐子の織ったスカーフを取った。素っ裸の首にスカーフを結ぶ。

「オシショウ、決して屈服はしないが抵抗もしない。スカーフを巻くことを許して欲しい。思いのこもった品なのです」

怪訝な顔のオシショウがそれでも大きくうなずいた。極月が手錠を持ってMの前に立つ。Mは両手を揃えて前に出した。銀色の手枷が厳しく両手首を拘束した。

「壁の前に行って片足ずつ手錠をまたぎ、弥生のように反省のポーズを取りなさい」

命じられるまま、Mは弥生の横で壁に向かって立った。苦しい中腰の姿勢になって、片足ずつ手錠で戒められた両手の間に潜らす。豊かな乳房と腰の回りの肉がスムースな動きを意地悪く妨げる。やっとの事で尻の下に収まった両手を無理に下げて正座した。頭を床に着け、豊かすぎる尻を思い切り突き出しても太股と胸が全身を圧迫する。

「極月、よく二人を比べてみるがいい。同じような背格好だが肉付きの違いは一目瞭然だ。鍛え上げた弥生の裸身は小さく屈めても美しい。それに引き替え、Mの身体からはみ出たぶよぶよの肉塊を見ろ。普通にしていれば分からないが、こうして反省のポーズを取らせれば逃げ隠れできない。贅肉がつきすぎて、尻の大きさなど倍も違う。惜しまれるはずもない裸身だ」

オシショウの言葉がMの身体を貫く。カッと血が全身を逆流する。白い裸身が真っ赤に染まった。

「ほら極月、白豚が赤豚になった。みっともない。早く肛門栓をしてしまえ。黒ずんだ汚い尻を厳しく戒めてやるのだ」

Mの尻に冷たい金属が触れ、奥深く肛門を割って挿入された。やがて体内で金属棒が漏斗状に開く不気味な感触が下半身を圧した。

「極月、陰門を封鎖する穴も開けなさい」

オシショウの言葉に従って、極月が太いディスポーザブルの注射針を二本用意した。極月はアルコールを湿らせたガーゼを持って、高く掲げた尻の後ろに屈み込んだ。大きく割り開かれた尻の割れ目に手を伸ばし、二枚の陰唇を摘み上げる。アルコールで丁寧に消毒した後、無造作に注射針で粘膜を刺し貫く。Mの口が苦痛で歪んだ。全身を二度、鋭い痛みが走った。陰唇に開けた穴に細いビニールパイプを通してから、極月が立ち上がって平然と言う。

「オシショウ、一晩経てば陰門をリングで封鎖できます」

「それはよかった。Mも弥生と同様、精進の道がたどれる」

何がよいものかとMは歯を食いしばり、悔しさのあまり尻を左右に振った。猛り立った熱い尻が冷たい弥生の尻に触れる。引き締まった素肌の感触が柔らかな尻を通して全身に伝わる。苦い嫉妬がMの胸を締め付けた。

「一週間もすれば、Mにも修行のありがたさが分かるだろう。M、十分反省しなさい。弥生もよく指導してやれ」
「はい」
　Mの横で弥生が答えると、オシショウは極月を従えて満足そうな足取りでピアニストたちの所へ去って行った。弥生が尻を動かし、股間からあたりに人影がないか見回す。近くに人がいないことを確認してから遠慮がちに小声で話し掛ける。
「M、二か月は長いわ。頑張ってね。この懲罰はシュータでも三日間しか続けたことがないの」
「弥生が三日を耐えたの」
「いいえ、私は懲罰を受けるのは初めて。でもきっと耐え抜いて甦ってみせる。私は希望がないMが心配なの。この懲罰はまるで拷問だものね。辛くて恥ずかしいわ。希望がないと、とても二か月は耐えられない」
「私には希望なんてない。どんなときもその場その場で頑張ってきた。でも今は、弥生のような若い肉体に比べられて戸惑っているの」
「私の身体など気にしなくていいのよ。Mは、Mにとって滅びが惜しいように鍛えればいい。神ながらの道は相対的なものよ。凄く科学的な教えなの」
　弥生の言葉を聞いて、Mは黙り込んでしまった。この信仰は既に二人の命を奪っているのだ。きれい事で済むわけはなかった。説教が空しく耳に響いた。
　二人は反省のポーズを二時間続けた。素肌を深々とした冷えが押し包む。もう夜明け近い時刻に思われた。部屋の奥で小声で続けられていた会議が一段落し、大きく伸びをする数人の声が会議室に響いた。
「もうじき夜明けだ。見張りは二時間交代で厳密にやれ。今日の予定のない者は静かに眠ってくれ。正午にレポの車が来るので、移動の準備がある者は警戒に警戒を重ねて行動して欲しい。次のミーティングは午後九時から。以上」
　ピアニストの疲れ切った声が響き、修太の声が続いた。
「レポの車が出発したらすぐ、携帯電話でそれぞれの部下に移動の準備を整えさせてくれ」
　特に必要と思えない指示だが、幹部を直接指導する修太の矜持が込められていた。椅子を動かす音がひとしきり響いた後、部屋に静けさが帰ってきた。音を潜めて数人が動き回る。霜月が最初の見張りとして一階に下りた。毛布を二枚抱えた極月がMと弥生の後ろに

立ち、二つの尻を見下ろす。
「就寝の時間よ。二人とも反省のポーズを解いて壁に向かって立ちなさい」
弥生は器用に両足で手錠をまたぎ直して立ち上がる。Mは痺れきった身体を震わせながら、やっとの思いで片足ずつ手錠をまたいだ。弥生に一分も遅れてから壁に向かって立った。尻から太股にかけての筋肉が無様に震える。まるで贅肉が揺れているようで情けない。
「虜囚のMには逃亡の恐れがある。就寝の間は二人の肛門栓を鎖で繋ぐことにする。弥生はMをよく見張りなさい」
「はい」
弥生が答えると、二人の尻から飛び出た球体の突起が長さ一メートルの鎖でそれぞれ繋ぎ止められてしまった。
「弥生、肛門栓が似合うよ。味はどうかしら」
修太とともに近寄ってきた睦月が冷たい声で言った。
「きっと睦月が三日間、肛門に入れていた栓が当たってしまったらしいわ。お腹を壊しそうよ」
かつて無断で報道機関と接触した罪で、三日間の懲罰を受けた睦月の顔が怒りで赤く染まった。広報担当の立場から告発した弥生を、睦月は今持って憎んでいるのだ。
「そう、私は三日間だったけど、弥生は二か月。永遠に思われる時間を恥ずかしい格好で反省するがいいわ。股間のリングもよく似合っているわよ」
捨てぜりふのように言ってドアを開けた睦月の後ろで、修太がMに呼び掛けた。
「M、弥生に良く仕付けてもらってふやけた身体を鍛え直すといい。使用前、使用後のダイエット・モデルが並んでいるようでみっともないよ」
Mの頬が赤く染まったが、即座に言い返す言葉が浮かばない。不用意のまま、手酷く打ちのめされてしまったのだ。
「毛布は弥生の分が二枚あるきりよ。二人で工夫して使いなさい。一階に下りない限り行動は自由。後は弥生の良識に任す」
毛布を床に置いた極月が告げ、ドアから出ていった。女性と男性の部屋に別れるらしかった。二人は男性の部屋に残された。部屋の奥から好奇の視線が注がれてくるようで、Mは身体がむず痒い。
「M、休む準備をしましょう。肛門栓を繋いだ鎖の長さは一メートルしかないわ。息を揃えて一緒に行動しないと手酷く痛め付けられる。いい」

前手錠に戒められたまま壁の前に立った弥生が、同様の姿のＭに小声で囁く。
「まず床にしゃがみ込んで毛布を取るの。一枚を床に敷き、もう一枚に二人くるまって寝ましょう」
Ｍに合図をして弥生がゆっくり屈み込んだ。二人の股間から垂れ下がった鎖が音を立てる。Ｍの動作が少し遅れた。一メートルの鎖が張り切り、二人の肛門を激痛が襲った。
「ウッ」
ぴったり息の合った呻きが二人の口を突いた。思わず苦笑が浮かぶ。Ｍと弥生は敷いた毛布に背中合って横たわり、もう一枚の毛布にくるまって寝た。背中の間を夜明け前の冷気が走り抜ける。どちらからともなく身を寄せ合い、背中をぴったり合わせた。Ｍの柔らかな背と弥生の引き締まった背の間を、お互いの体温が行き来する。思い切って足を絡ませ、お互いの尻を擦り寄せると肛門栓同士がぶつかり合って不気味な金属音が響いた。

5　友の肌合い

白々とした朝の光が水道記念館を照らしだした。夜明けとともに活動を開始した小鳥たちのさえずりが静まり返った林に響き渡る。朝日を浴びて紫紺に輝くルリビタキが、二階のベランダに留まって周囲を見回す。だが、猫の子一匹通りはしない。冬枯れの梢を、時折冷たい風が渡っていくだけだ。山全体が自然公園に指定され、犬の散歩が禁止されているため、早朝から登ってくる者はいない。八時を回ってやっと、通勤の車がせわしなく行き交いだす。山越えの近道が市街を抜けるのに便利なのだ。それも三十分くらいで疎らになる。後はまた荒涼とした冬景色が戻ってくる。水道記念館の二階で寝入ったまま、九人の男女は冬眠する建物と一体になって半日を過ごした。さすがに安眠する者はなく、交互に寝返りを打つ音が静けさの中に響く。それぞれの白昼夢がブラインドの隙間から入る光線の中に狂おしく舞っていた。光の角度がゆっくりと変わり、背後の山の端に日が隠れたころ風が吹き出した。風は裏山の梢を掠めてびょうびょうと吹いた。じっと風の音に耳を澄ましていた修太の胸ポケットで携帯電話が振動する。

「はい」

電話を耳元に寄せて緊張した声で答えた。周囲で聞き耳を立てる気配が全身に伝わってくる。

「十月の満期は夜が少々」

はっきりした声が聞こえると同時に電話が切れた。情報担当の神無月からの電話だった。ピアニストの銀行口座から、ある程度の金が引き出せて、夜持って来るという内容の暗号だった。携帯電話の電波を警察に聞かれても、このくらいなら内容を解読できるはずはない。金額はともかく、まとまった金が入りそうな予感が修太の不安をいくらか癒した。

「夜になってから、神無月が金を持ってくる」

隣で毛布をかぶって横になっているピアニストの背に小声で伝えた。返事はないが、聞いている証拠のようにピアニストが全身でうなづき、寝返りを打った。

「見張りを代わってくるよ」

誰にともなく言って修太は起き上がった。左手首の時計は午後三時を指している。二時間の見張りを終えれば暗くなるはずだった。待望の夜が来る。ふと、夜行性の野獣に思いを馳せてから小さく首を左右に振る。屋根裏にぶら下がったコウモリを描き直した。冬眠

する機会を失ったコウモリだ。シュータによく似合っていると思う。修太の口元に久しぶりの微笑が浮かんだ。大きく伸びをしてから膝を屈伸させる。両膝の関節が情けない音で鳴った。テーブルに置いたままの手製の拳銃を右手で握ってから、銃器を粗雑に扱った不用心さに顔を赤らめる。マウンテンパーカーのファスナーを上げながら周囲を見回した。ブラインドの隙間から入る光でぼんやりと照らしだされた部屋の隅に四人が横になっている。それぞれが毛布を頭からかぶり、寒そうに身体をくの字にしている。呼吸につれて上下する毛布がそれぞれの命を主張していた。いずれも眠っているとは思われぬ浅い呼吸だ。既になくしてしまった命を惜しんでいるような呼吸だった。見つめる修太の目頭が熱くなる。いつ絶たれてもおかしくない命が四つ転がっているのだ。右手に持った拳銃が重い。修太は拳銃をパーカーのポケットに入れ、大きく首を左右に振ってドアに向かった。極月が見張りの交替を待ちかねているに違いなかった。独りの見張りは不安を募らせる。まして今は、風の音で外の気配を探ることもできない。悪い予感だけが時間とともに大きくなっているはずだった。

ドアを細く開けて部屋を出ようとしたとき、壁際の大きな毛布の固まりがもっこりと動いた。途端に昨夜の光景が脳裏に甦った。憔悴しきった修太の意識に華やかな官能の火が灯る。見下ろした灰色の毛布の下に、まぶしい裸身が透けて見えるようだ。修太は屈み込んで、悩ましく蠢いている毛布をまくり上げた。毛布の下から二つの裸身が現れる。スプーンを重ねたように横たわったMと弥生の白い裸身がブルッと震えた。突き出された豊かな尻が怒りと寒さに震えている。見覚えのあるMの尻だ。肛門に挿入された金属棒の先が尻の割れ目で銀色に光っている。尻と一緒に震える金属棒が淫らな感情をあおり立てる。たちまち頬が熱くなって逃げ出したくなったが、すでに遅い。修太は疲れ切った頭で言葉を捜した。

「M、便意を我慢して震えているのかい。極月が肛門栓を外さなかったものね。俺が外してやろうか」

取って付けた口調で修太が声を掛けた。毛布をまくり上げたことで引っ込みがつかないでいるのだ。修太の幼さがMにはおかしかった。今までの羞恥も怒りも嘘みたいに消え失せてしまう。Mは余裕を持って首を上げ、修太の顔を見上げた。

「いつになく優しいことを言うわね。肛門栓の代わりに、小さなペニスを埋めてくれるのかしら」

おどけた声を聞いた修太の顔が、瞬く間に真っ赤に染まる。憎悪を込めてMの尻を蹴っ

た。狙い澄ましたように修太の蹴りは尻の割れ目に決まり、したたかに肛門栓を打った。
「ムッー」
くぐもった呻きがMの口を突いた。激痛が肛門から脳へ駆け上がっていく。修太の短小コンプレックスは未だに健在だったのだ。
「縛られた女を虐めるのが修太の趣味だったわね」
眉間に皺を寄せたMが、じっと修太の目を見据えて言った。
「せっかくだから修太の優しさに甘えさせてもらうわ。早く肛門栓を外してちょうだい。ウンチがしたいのよ」
黙ったまま肩を震わせている修太に、Mが追い打ちを掛ける。
「さあ、早くしてよ。今にも漏れそうなのよ」
弥生の肛門栓に繋がれた鎖をいっぱいに張って、Mが修太に尻を突き出す。Mに引かれるまま弥生も尻を持ち上げた。二つの尻が修太を脅迫する。進退窮まった修太が目をそらす。途端に横のドアが大きく開けられた。
「弥生、何のための反省なの。恥を知りなさい」
会議室に入って来た極月が二つの尻を見下ろして、あぜんとした顔で弥生をなじった。極月の叱責を受けた弥生の裸身が小刻みに震える。
「ごめんなさい。修太がMにちょっかいを出すから、私も腹を立ててしまいました」
弥生の言い訳を耳にした極月が怖い顔で修太をにらみ付けた。
「修太、主席のあなたが見張りの交替を忘れ、虜囚を構っているようでは先が知れるわ。反省ものよ」
修太の頬がまた真っ赤に染まった。部屋の奥で聞いているに違いない男たちを意識して威厳をつけた声で抗弁する。
「極月は見張りについていたはずだ。たとえどんなことが起きても持ち場を離れては困る。それに、毎朝三十分間外す決まりの肛門栓も外し忘れた。そもそも発端はMの便意から始まったんだ。反省が必要なのは極月の方だ」
今度は極月が怒りで顔を真っ赤に染めた。
「いいわ。私は持ち場に帰る。二人のことは指導者として修太が処理してください。私のミスまでカバーしてくれてありがとう」
早口に言って、極月はドアを閉めて階下に下りてしまった。相変わらず高く掲げられた二つの尻が修太の目の前に残されている。

「聞いたとおりだ、俺が肛門栓を外す」

疲れ切った声が響いた。我ながらうんざりした声だと修太は思った。組織が崩壊していく音が、耳の底から聞こえてくるような気がした。確かに組織は存亡の淵にある。Mと戯れているときではないことは百も承知だった。だが、掲げられた二つの尻が決断を迫っている。指導者としての力量が問われていた。

「修太、私は大丈夫。Mにだけトイレを使わせてやって」

極月の叱責で我に返った弥生がしおらしい声を出した。

「分かった、そうするよ。でも、わずかの間でもMを自由にするわけにはいかない。リングを付けて曳いていくことになる」

修太の言葉で弥生の素肌が緊張するのが分かった。Mの下半身に嫌な予感が立ちこめる。Mの尻の後ろに屈み込んだ修太が、弥生の肛門栓に繋いだ鎖を外した。

「昨夜開けた穴にリングをはめる。M、立ち上がって前を向きなさい」

低い声で修太が命じた。テーブルの上の極月のアタッシュケースを開け、直径二センチメートルの金色のリングを摘み上げる。リングをぶら下げた弥生の股間がMの脳裏をよぎった。白い顔が屈辱でゆがむ。しかし、Mは虜囚なのだ。屈服はしないが、抵抗もしないと宣言までしてしまっていた。

「両手を上げて股間を突き出すんだ。弥生と同様陰門を封鎖する」

Mは手枷で戒められた両手を上げ、両足を大きく開いて股間を晒した。修太が足元に屈み込み、二枚の陰唇に通してあったビニールパイプを抜き取る。鋭い痛みがMの背筋を貫いていった。代わって冷たい金属の感触が粘膜を襲い、カチッという金属音が耳の底まで響いた。股間で金色のリングが揺れている。

「しばらく見ぬ間に、あんなにコケテッシュだった股間がぶよぶよになってしまったね」

修太の揶揄する声が羞恥に油を注ぐ。惨めに突き出た下腹部をへこまして、そっと股間を見下ろす。股間に垂れ下がった金色のリングが目に入った。屈辱と羞恥で全身が真っ赤に燃え上がるようだ。リングの先に二メートルほどの細い鎖を繋いでから、修太が尻を掲げるように命じた。無様に股間にぶら下がったリングと鎖を鳴らして、Mが四つん這いになって尻を掲げる。肛門栓の先端に差し込んだ鍵が回されると、体内で膨張していた形状記憶合金が嘘のように細くなり肛門から抜き去られた。元通り窄まった肛門が歓喜の声を上げる。

「さあ、行こう」

修太が声を掛けて、股間のリングを曳いた。

「ヒッ」

陰唇が引き裂かれる苦痛と恐怖に悲鳴を上げ、足をもつらせながらMが立ち上がった。素っ裸で手枷に戒められ、股間にぶら下がったリングに繋いだ鎖を曳かれてドアへ歩く。異物の取り除かれた肛門だけが開放感を謳歌していた。

「修太、何をしているの」

突然ドアを開けて入ってきた睦月が、怖い顔で修太を問い詰めた。

「Mのトイレ・タイムさ。極月が見張りでできないから、俺が代わりをする」

「シュータの主席の仕事とは思えないわ。この非常時にあきれ返ってしまう」

睦月の早口の声に苛立ちと怒りが混じった。

「虜囚を逃がすわけにはいかないよ」

言い訳としか聞こえない小さな声で修太が答えた。Mの口元に笑いがこぼれる。睦月の怖い視線がMを見据えた。

「何のために弥生がいるのよ。二人のリングを鎖で繋げばいい。いくら弥生が反省中でも、虜囚の見張りぐらい命じなければ指導者として配慮に欠けるでしょう。さあ鎖を貸して」

修太の手から銀色の鎖を奪い取った睦月が、尻を突き出してうずくまっている弥生に冷たい声で命じる。

「弥生、立ち上がって前を向きなさい」

立ち上がった弥生の引き締まった裸身がMの横に並んだ。素っ裸の長身の二人が短身の修太と睦月に向かい合った。Mの股間から延びた鎖の端を、睦月が素早く弥生のリングに繋ぎ止めた。

「さあ、仲良く鎖に繋がれて一緒にトイレに行って来なさい」

睦月が楽しそうに言って、弥生の尻を叩いた。美しい裸身が屈辱に震える。修太と一緒にピアニストの方へ向かう睦月の背を、怒りに燃える目でMは見送る。弥生に代わって皮肉の一つも言ってやればよかったと悔いが残った。込み上げてくる怒りで火照った腰に、さり気なく冷たい素肌が寄り添ってきた。

「M、慎重に歩かないと股間が裂けるわ。睦月の意地悪ごときに挑発されてはダメよ」

「分かっているわ。弥生の代わりに腹を立てただけよ。とても仲間にする仕打ちとは思えない」

弥生の裸身が寂しそうに震えた。今度はMが弥生の腰を尻で突いた。それを合図に二つ

の裸身が寄り添ってドアを出る。股間にぶら下がったリングを繋ぐ鎖が弧を描いて垂れ下がり、二人の歩みにつれて隠微に揺れ動いた。薄暗い廊下を五メートルほど歩くと二階のトイレの前に出る。弥生がドアを開け、Mは狭さに驚く。畳半畳ほどの空間に置かれた白い和式の便器がわびしい。壁に穿たれた小さな窓にはブラインドがなく、冬の午後の光が曇りガラスから差し込んでいる。暗がりに慣れた目には明るすぎるトイレだった。白々とした光に照らしだされた裸身を、思わずMは見下ろしてしまう。唐突に、消え入ってしまいたい気持ちになった。リングをぶら下げた贅肉のついた裸身が恥ずかしかった。同じ格好でも、鍛え上げられた美しい弥生の裸身と比べると、情けなさがひとしお募ってしまう。

「二人並んでいると、狭すぎて用を足せないわ。私が後ろ向きで奥に行くわね」

Mの気持ちにお構いなく、向かい合った弥生がゆっくり後ずさっていく。リングを繋いだ鎖が張り詰めていき、二人の股間が鋭く痛んだ。Mは後ろ手にドアを閉め、弥生に曳かれて便器をまたいだ。

「静かに屈みましょう」

弥生の合図にMがうなずき、ゆっくりと尻を下ろしていく。弥生は便器と壁の間の狭い空間にしゃがみ込む。Mはできるだけ便器の後方にしゃがんだ。尻が便器の後ろに出てしまっているようで不安になる。二人とも大きく両膝を広げ、狭い空間に入り込もうと努めた。広げきった膝頭が痛いほど密着する。弥生の股間が便器に触れ、リングが陶器に当たる音とともにウッという呻きが洩れた。

「弥生、大丈夫」

眉間を寄せた弥生にMが問い掛ける。二人の顔の間は三十センチメートルと離れていない。

「ええ、大丈夫よ。苦しい姿勢だけど用を足してちょうだい」

二人の股間の間で垂れ下がり、便器に溜まった水の中に沈んでいる鎖を手探りでたぐり寄せた弥生がMを促す。弥生の優しさが身に滲みるが、Mに用を足す気はない。修太との行きがかり上、トイレに来る羽目になってしまっただけだった。しかし、今更言い出しかねて、Mは言葉を探す。

「こんな格好で二人でいると、不思議な気分になるわ。トイレにいる気がしなくて便意もなくなってしまう」

Mは困惑した声音を装って言い、乳房の下に置いた両手で弥生の両手を握った。二人の手枷の鎖が鳴る。そのまま両手を上げ、弥生の手だけを頭上に残して手を下ろした。下ろ

した両手を弥生の胸元に当て、ふっくらとした右の乳房を包み込む。上を向いた乳首を右手で摘み左手で乳房をもみ上げる。手枷の鎖が鳴り続け、柔らかだった乳首が固くなって突き立ってきた。戸惑った顔をしていた弥生がMの首に両手を回してから、そっと瞼を閉じた。どんなときでも、どんな場所でも性は刺激に応えるのだとMは改めて確信する。リングをはめられた股間から勇気が湧いてくるのが分かる。

「弥生、あなたたちの信仰に未来はないわ。行き着く当てのない道を捨てて私と一緒に元の世界に帰ろう」

優しく愛撫を続けながらMが言った。閉じられていた弥生の目が開き、思いの外静かな声がMの耳を打つ。

「いいえ、信仰には未来があるわ。私たちに未来はなくともね。すべてが滅び去った後に花開く美しい世界が、私には見える」

「それはきっと妄想に過ぎないわ。いくら現実が醜く耐えられなくても、妄想よりはすてきよ。だって手で触れられ、共感することができるもの。こんなに耐え難く屈辱的な目にあっても、弥生の性は私の愛撫に共感しているわ。本当にすてきなことよ。この性は決して妄想ではなく、どんな屈辱にも恥辱にも打ち勝つことのできる現実なのよ。ねえ弥生、もう一度、元の世界に戻ってみない」

手枷で戒められた弥生の両手がMのうなじを抱いた。そのままMを引き寄せ、迷いのない目でMの目を見つめる。弥生は静かに首を左右に振った。

「決心は変えないわ。もう私は、現実を拒絶してしまっているの。確かに私たちは屈辱的な恥辱を味わっているわ。素っ裸のまま鎖に繋がれ、二人一緒にトイレに入るなんて想像もできないことよ。でも私にとってはMが思うほど辛いことではないの。いずれ滅びる身が現実に弄ばれているだけだと思う。辛くて悔しくて仕方がないと思うほど、このまま滅び去ることが惜しくてたまらなくなる。そして、この試練の先には惜しまれるのと等価の世界が広がっているの。私はその世界を信じる。もう引き返したくない」

確信に満ちた声を聞きながら、Mは熱心に弥生の乳房を揉みほぐし、突き立った乳首を愛おしんだ。

「確かに、この美しい乳房が滅ぶのは惜しいわ。でも私の愛撫に共感する感覚は今現在だけの弥生の特権だと思う。肉体の滅び去った世界がいくら素晴らしく美しくても、性のときめきだけは決して得られはしない」

「私には、なくていいものだわ」

即座に答えた弥生の声に、Mは悲しみを聞いた。

「窓の外に人の気配がしたら、私は大声を出す。いいわね、一緒に帰ろう」

Mの張り詰めた声が狭い空間に響き渡った。二人の視線が絡み合い見つめ合ったまま、ゆっくりと短い時が流れる。激しい風の音に混じってバイクのエンジン音と若者の嬌声が聞こえてきたとき、Mが全身を緊張させて大きく息を吸い込んだ。喉元まで込み上げた叫びを、すんでの所で弥生の口が封じた。素っ裸のまま向かい合って便器の上にしゃがみ込み、大きく両膝を広げ合った二人の女が口付けを交わしている。大きく開いて被せられた弥生の口の中で、Mは唇を開き舌を伸ばした。ぎょっとして小さく窄められた舌に、ひとしきり舌を這わせてから意地悪く退く。Mの舌を追っておずおずと弥生の舌が伸びた。二つの舌がもつれ、激しく絡み合う。微かな喘ぎが二人の口の間から漏れた。Mがそっと目を開くと、目の前に切れ長な弥生の目があった。まさに燃え上がろうとする炎が瞳の中で揺れている。

「M、どんなことがあっても、生きてる限りMを守るわ」

感に堪えた声で弥生が叫び、中腰になって立ち上がった。しゃがみ込んだMの身体に全身でのし掛かっていく。Mの乳房に弥生が激しく股間を擦り寄せる。柔らかな陰毛と陰唇からぶら下がったリングが、腰の動きにつれてMの左右の乳房をなぶる。そのままの姿勢で弥生は腰を下ろし、Mの下腹部に尻を預ける。肛門栓の先が下腹を鋭く突いた。急に便意が高まり、弥生を下腹に乗せたままMは激しく脱糞した。肛門栓で封じ込まれていたガスが何回も大きな音を立てる。狭い空間にやり切れないほどの臭気がこもった。断続して肛門を襲うガスの音に顔を赤らめながら、Mは弥生の乳房に顔を埋めて小さく言った。

「ごめんなさい。恥ずかしくて全身赤くなってしまった」

「トイレに来たのだもの恥ずかしがることはないわ。私だってMの前で同じことをする。かえって一緒にいられたことがうれしい」

落ち着いた口調で言った弥生は、器用に身体を捻ってMの横に中腰で立った。

「M、鎖に注意して身体の向きを変えて。水を流してからお尻を洗って上げる」

弥生が有無を言わせぬ声で言った。

「まさか、弥生にそんなことさせられないわ。私は寝たきりのお婆さんではないのよ」

ほとんど祐子と同じ年齢の弥生がMの保護者のように振る舞う。Mは面食らってしまった。自分のお株を取られたような気さえした。

「恥ずかしがらなくてもいいのよ。排便の後には、また肛門栓を挿入されるわ。お尻の穴

を清潔にしておかないと、きっと肛門が爛れてしまう。睦月はたった三日間の反省だったけど、三日目には肛門が真っ赤に爛れたわ。痛みで涙を流していたのを覚えている。私たちの反省は二か月間よ。余程注意をしないと歩くこともできないほど肛門が爛れてしまうわ。さあ、後ろ向きになってお尻を出しなさい」

弥生の言葉に促されて、Mが苦労して後ろ向きになる。弥生が便器の水を流す。しばらく水を流し続けてから、少し温かくなった水を両手にすくった。

「M、頭を床に着けてお尻を突き出すのよ」

言われたとおり後ろに突きだした尻の割れ目に、冷たい水が浴びせられた。水が三回掛けられた後、冷え切った尻を柔らかな手が丁寧に洗う。肛門の粘膜をとおして弥生の温かさが全身に伝わる。Mはリングに封鎖された陰門の奥が濡れそぼってくるのを感じた。どんなときでも官能は高まるのだ。忘れていた二つ目の事実をMは思い出した。

「いいわよM、一応きれいになったわ。でも水だけではダメ、外に出たら廊下に横になるのよ。股間を繋いだ鎖が短いけれど、何とかして肛門を舐めて上げるわ」

Mは耳を疑ってしまった。祐子ほどの少女が大胆なことばかり口にする。これまでの情報が整理し切れず、Mの頭が一層戸惑う。確固とした弥生の言動に追われるようにトイレを出て廊下に横になった。

「M、もう少しお尻を上げて。鎖が張り詰めて股間が痛むけど、我慢してね。もう少しで肛門に口が届くわ。お尻の穴に舌を入れるからびっくりしないでね」

Mの股間を目指して弥生が苦しい姿勢で屈み込み、顔を突き出して肛門を舐めようとする。二人の股間を繋いだ鎖はいっぱいに張り切り、リングをはめられた陰唇が無様に伸びきっている。Mの陰部を鋭い痛みが襲い、弥生の丸めた舌が肛門をなぶる。股間の痛苦と尻の快楽が同時に下半身を貫く。メラメラと燃え上がる官能の炎が下半身から脳へ這い上がっていく。

「ムッー」

思わず喘ぎ声が口を突き、Mは惑う。惑いの中から三つ目の確信が大きく立ち上がってきた。どんな状況でも官能の炎は身を焦がすのだ。歓喜と苦痛に歪む口元に妖艶な笑みが甦った。もう恐れるものなどありはしないと思った。

「終わったわ。これで完璧よ。乱暴に肛門栓を挿入されても、お尻が爛れる心配はないわ。できれば、私が排便した後も同じようにして欲しい」

Mの隣で横になった弥生が興奮した口調で言った。

「ありがとう。もちろんさせてもらうわ」

Ｍが上体を起こして弥生の口に唇を付けた。つぐんだ口を舌でこじ開け、肛門を舐めてくれた舌を愛おしんで舌を絡ませた。

「正直言って私はＭが心配。何度も言うようだけど二か月間の反省は拷問より応えるはずよ。私は体力に自信があるし希望もある。でもＭが絶望してしまいそうで怖い。ねえＭ、私は全力でＭを守る。決して音を上げないでね」

再び身体を離した弥生が心配そうに言った。またＭの意識が微妙に揺れる。私は少女に庇われ守られるほど軟弱に見えるのだろうか。こそばゆさが弥生に清められた肛門から立ち上ってくる。むずがゆさの中で、三度も思い出した官能の炎が怪しく尻を炙る気配を感じた。

「おもしろいわ」

Ｍは心の中で叫んだ。弥生と、とことん付き合ってもいいと思った。何よりも官能があり、人の温かさがある。そんな弥生が信じてしまった信仰の行く末をはっきりと見据えなければならないと覚悟を決めた。

「多分私は、弥生が思っているほど弱くはないみたいよ」

弥生を安心させるでもなく、自分に言い聞かすでもなく、小さな声でＭがつぶやいた。隣で横になった弥生の切れ長な目に笑いが浮かんだ。上を向いたＭの口元にも微笑が浮かぶ。後二か月がテロリストたちに残されることを、Ｍは初めて願った。

二回目の夜の訪れとともに、冷たい闇を縫って神無月が裏の階段から忍んで来た。水道記念館の二階の会議室に低い声が響く。

「ピアニストの預貯金はすべて封鎖されていた。かろうじて二か所の郵便局のＡＴＭから二百五十万円を引き出せただけだ。もちろんビデオカメラが動いていたから、俺も今日から手配される」

テーブルの上に札の入った封筒を置いて、神無月が暗い声で先を続けた。

「オシショウ、ピアニスト、修太、睦月、弥生の五人は昨日のうちに指名手配された。今日の午前中には卯月の部下の月曜日と日曜日が逮捕された。もちろん微罪に引っかけた別件逮捕だが、死んだ水曜日と金曜日の交友関係から簡単に卯月の組織が洗い出された。今回の軍事部門はこれで壊滅した。あっけないほど脆いものだ。交友関係を辿られれば対抗しようもない。卯月も今日付けで指名手配されている」

テーブルに置いたランタンの光にぼんやりと照らしだされた室内に、そろって溜息が落ちた。昨夜と同様ドアの横で壁に向かい、素っ裸のまま反省のポーズを続けている弥生の裸身からも微かな吐息が洩れた。Mの豊かな尻に触れたまま、身動き一つしなかった引き締まった尻が細かく揺れる。二人の肛門栓を繋いだ鎖が小さな音を立てた。弥生の悔しさがMの素肌に伝わってくる。

「神無月の報告のとおり状況は悪い。資金も思ったほど集まらなかった。早急に山岳アジトに移って出撃の機会を探ろう。このままではじり貧になるだけだ」

ピアニストの悲壮な声が響いた。

「賛成だ。ピアニストの提案以外にシュータの生きる道はない。滅びに向けて戦い続けるにしても戦い方がある。一方的に追い詰められて蹂躙されるのは嫌だ。時を見て出撃するしかない。今夜にもアジトに移動しよう」

修太がピアニストの提案を引き取って応えた。シュータの指導者としての矜持が張り詰めた声にこもっている。

「ダメッ、夜の移動なんて危険すぎる。検問に引っかかって銃撃戦になるだけだわ。それで一巻の終わりよ。移動するなら白昼堂々、他の車に紛れてさり気なく行くべきよ。渋滞が激しい昼なら、警察も検問を続けることはできない」

睦月の熱を帯びた声に全員がうなずく。興奮した面もちの霜月が手製の拳銃をコートのポケットから出して左手で銃身を撫でる。銀色の火器がランタンの光を浴びて輝く。カチッと撃鉄を起こす乾いた音が室内に響いた。

「霜月、よせ。暴発したらどうする。銃器などは滅びを彩るただの飾りだ。花火大会は最終日にしろ」

ピアニストの叱責に霜月が頬を赤く染めて抗弁する。

「まだ爆弾だって二発残っている」

「それがどうした。ここで打ち上げる気か」

冷たい声でピアニストが応え、修太に命じる。

「方針は出たんだ。早速細部を詰めてくれ。明日の夜は山岳アジトで落ち着きたい。オシショウは僕が納得させる。時間がないんだ。すぐ始めてくれ」

命令を下したピアニストは、大きく両手を組んで目をつむった。部屋の中にオシショウの姿はない。午後十時を回ったころ、コンビニエンス・ストアーに行くという冗談を残して外に出たきりだった。オシショウの行動を制止できる者は誰もいない。しかし、時と場

合があるとピアニストは思う。この非常時に、たとえオシショウだからといって無責任過ぎた。ピアニストはオシショウの勝手な行動を憎んだ。何よりも今、秩序が重んじられねばならないのだ。じっと瞑目したまま、ピアニストはこれまでの経過に思いを馳せる。

エレベーターの爆破ごときの物損は金で片付く。問題は死者と怪我人だけだとまたしても思い至る。これまでに何回となく出した結論だった。弥生の軽率な行動が悔やまれてならない。反省二か月の懲罰も軽いとさえ思う。シュータに集まった子供たちを使ったことが間違いだったとも思った。だが、コスモス事業団の理事長亡き後の社会変革の夢は、組織を持たないピアニストには妄想でしかなかった。夢を現実に繋いだのがシュータと思えば悔いを残す余地はないはずだった。しかし、つい愚痴りたくなる。指導者を命じた修太も甘い。組織全体のゆるみが今日の事態を呼び寄せたのだ。ピアニストは顔をしかめて首を左右に振った。何とか滅びを押し止める方法はないのかと、思考はまた迷路にさまよい出る。口で滅びを賛美するからといって、ピアニストの関心は滅びなどにはない。何とかして社会の向かう方向を変えさせることだけを望んだ。オシショウの教えなどは、あってもなくてもよかったとさえ今は思う。信じられるものは自身の思想だけだった。思えば、現実だけを生き抜いていくMの姿を拒絶してからもう十五年近くなるのだ。あるがままの現実を自在に操り、魔術師のように生きるMが今でも憎い。きっとMは、ピアノを捨てた僕を心の底で軽蔑しているに違いないと思った。ひとすじの道を歩めず、回り道をして迷う人間を馬鹿にしているのだ。ピアニストならばとうの昔に投げ出しているはずの過酷な状況の中で、望みを捨てずに自分の道を突き進むMの姿は脅威だった。そのMがまたしても目の前に現れている。不吉な予感がピアニストの脳裏を掠めた。腕を組んで瞑目したまま、ピアニストは苦笑する。殺人が絡む事件で追われる犯罪者が、不吉な予感もないものだと思った。世界はなぜ、Mが縦横に歩き回る理不尽さを許したのか。曖昧な規範がすべての原因だとピアニストは答える。魔術師のMが自在に動き回って影響力を振るえないように、細部まで緊密に構成された秩序ある社会が欲しかった。秩序だけが恣意に打ち勝つ。優れたデザインの基に社会を造り変える以外、Mのような者が跳梁する場を無くす方法はないと思う。そもそも性の拙さを笑われる所以はないのだ。独りで快楽に耽ることを責められる道理はないとピアニストは憤る。なぜMは僕を放っておかなかったのかと、出口無しの現在にピアニストの思考は乱れ、時間を遡って未練ばかりが募っていった。どうせ馬鹿どもとともに滅びるのなら、虜囚となったMを思い切り陵辱してから滅びたいと唐突に思った。少なくとも気分転換にはなるかも知れなかった。

ピアニストは腕組みを解き、目を開けてさり気なく周囲を見回して修太の姿を追った。修太は窓辺に寄って、四台の携帯電話を不規則に使い分けて手短に外部と連絡を取り合っている。他のメンバーも明日の移動の計画を練り上げるのに余念がない。ピアニストは音を立てないように椅子を引いて立ち上がった。気配を消すことに専心してゆっくりドアに向かう。ドアの横の壁の前に二つの裸身がうずくまっている。ピアニストの目の下に豊かな尻と引き締まった尻が並んでいる。二つの尻の割れ目に肛門栓の金属棒が突き出ている。陰門を封鎖した金色のリングがランタンの揺れる光を浴びて隠微に輝く。ピアニストはテーブルの上のアタッシュケースから肛門栓の鍵を摘み取って豊かな尻の後ろに屈み込んだ。少し開いた太股の間から床に頭を着けたMの顔が見える。いぶかしむ目が大きく見開かれ、ピアニストの弱気な視線を捕らえた。

「今晩はピアニスト。私の所に初めて来てくれたわね。修太より遅かったけど恨みはしないわ。ご用事はなあに」

ふざけきった口上にピアニストの頬が紅潮した。恥ずかしさに全身を震わせた後、努めて冷静な声を装う。

「シュータの虜囚になったMを陵辱しに来たのさ」

ピアニストの声と同時に、弥生の尻が微妙に震えた。Mの脳裏を疑問が掠める。弥生の反応はMを案じたものとは思えなかった。だが、シュータを操るピアニストの言動に疑いを持ったとも思えない。不思議な違和感が全身を満たした。Mはさり気なく剥き出しの股間から明るい声で応える。

「それは光栄ね。ところで、修太の許可は取ったの。あなたとオシショウは所詮顧問格よ。シュータの指導者は修太でしょう」

「僕が決めたことに逆らう者はいない」

断言したピアニストが肛門栓に鍵を差し込む。

「ピアニスト待って、私を陵辱する前に弥生を犯しなさい。あなたの成熟振りを見てからでないと私は安心できない」

今度は弥生の尻が激しく震えた。もう間違いはなかった。よりによって弥生はピアニストに好意を抱いたのだ。弥生の先行きに不安を感じてMの目頭が熱くなる。

「僕は、こんな小娘は相手にしない。見くびらないで欲しいね」

冷たく言い放ったピアニストをMが一喝する。

「弥生の素晴らしさが分からないピアニストは、いつまでたってもただのガキよ。私を陵

辱できる道理がない。ペニスが折れてしまうのが関の山だわ」

挑発に乗ったピアニストの顔がたちまち真っ赤に染まった。心の片隅で僕らしくないと言う声が聞こえたが、もう取り返しがつかなかった。

「よしっ、二人まとめて陵辱してやる」

声を震わせたピアニストが二つの尻を繋いだ鎖を外す。右手でMの肛門栓に入れた鍵を乱暴に回した。栓を引き抜く指先が震えている。続けて弥生の肛門栓に鍵を差し込む。形状記憶合金が収縮するのももどかしそうに、乱暴に栓を引き抜く。弥生の尻を激痛が襲った。

「ヒッー」

陰惨な悲鳴が弥生の口を突き、うずくまった裸身が激しく震えた。

「よく泣く子供だ」

弥生の痛苦にお構いなく、立ち上がって二つの尻を見下ろしたピアニストが苛立ちのこもった声で言い捨てた。

「使い込んだMの尻に比べ、弥生の青い尻はいかにも酸っぱそうだ。とても僕のペニスを受け入れられるとは思えない」

ピアニストの追い打ちに、また弥生の尻が小刻みに震えた。寄り添った弥生の肌が熱くなったのが分かる。Mの全身を怒りが突き抜けた。尻の穴に力を込めてじっと怒りを耐える。

「Mの肛門が僕を求めてピクついてきたよ。さすがは性の達人だ。恥ずかしげもない。小さく窄められて恥じ入っている弥生の尻とは雲泥の違いだ」

無様な裸身を辱めるピアニストのあざけりをMが静かに遮る。

「ピアニスト、人を呪わば穴二つっていう言葉を知っているの」

「Mの墓も僕の墓も、どちらも掘る気はないね。ただの気晴らしをするだけだからね」

「ハハハハハ」

Mの笑い声が部屋中に響いた。驚いたピアニストが周囲を見回す。だが他のメンバーたちは切羽詰まった仕事に余念がない。

「やはりピアニストはインテリのガキね。私は墓穴のことを聞きたいんじゃない。ピアニストの言うように私は恥知らずだから、女の穴のことを聞きたかったのよ。お尻の穴にしか関心を持てないピアニストは女にとって男でないわ。女しか持っていない穴に、男しか持っていない棒を突っ込むから、男も女も天国にいけるのよ。弥生がよく泣くなんてよく

言えたものね。尻の穴にしかペニスを入れられないピアニストごときに、女を泣かすことができるものですか。ガキのころと同様、マスターベーションに励んでいるのが分というものよ」

ピアニストの爪先から脳天まで猛り立つ怒りが駆けめぐった。目の下でMの肛門がピクピクと蠢いてピアニストを嘲笑っている。

「その辺でやめたがいい、役者が違うよ」

ドアを開けて入ってきたオシショウが涼しい声でピアニストをたしなめた。両手でコンビニエンス・ストアの袋を抱えている。袋から顔を出したワインのボトルとフランスパンが異様だ。目を丸くしてオシショウを見つめるピアニストの逞しい肩がわなわなと震えた。

「オシショウ、この非常時に買い物にいくなんて非常識すぎます。警察に通報されでもしたら取り返しがつかない」

叱責に動じる風もなく、オシショウがゆったりした口調で応える。

「怒ってばかりいるから判断ミスが出る。私のことよりピアニストは自分のことを心配すべきだ。私が帰って来なかったらこの場をどうしのぐ気だったのだ。二つの生々しい尻を並べては目の毒というものなのだよ。陰門を封鎖した女を女と思ってはいけない。尻の穴はあくまでも方便にすぎぬ。もっと自分を惜しむべきだなピアニスト。非常時とは惜しむべきことを学ぶときなのだ。やみくもに苛立つことはない」

ピアニストの両肩ががっくりと落ちた。

「さあ最後の晩餐としゃれてみよう。いいボジョレーが買えたのだ。新しいステージの前祝いになる」

颯爽と部屋の奥に向かうオシショウに、肩を落としてピアニストが従う。

「ピアニスト、命拾いをしたわね」

Mの楽しそうな声が股間から響いた。オシショウが立ち止まって振り返り、Mの尻に呼び掛ける。

「Mさん、元気がいいのは今のうちだけだよ。山の辛さを想像した方がいい。鍛え上げたピアニストにたっぷり泣かされることになるよ」

オシショウの言葉に弥生の尻が緊張して震えた。Mの脳裏を不安がよぎる。しかし、もう怖いものなどないのだ。運動不足で重く感じられる裸身を揺すってMは懸命に不安に抗おうとした。

6　山岳アジト

すでに日は背後の山陰に隠れた。日陰になった水道記念館の一帯はことのほか寒々としている。まだ指名手配されていない霜月と如月が外の様子を探りに出た。二人ともポケットに入れた拳銃を握り締め、緊張した顔で周囲を警戒している。

八人の男女は全員が一階に下りて玄関ドアの前に待機していた。拳銃を握った手を顔の横に上げた姿勢で、修太がブラインドの隙間から外をうかがっている。

「もうじき時間だ。迎えの車が来る。卯月、乗り込み前のチェックをしろ。最初の車に五人、次も五人だ。二台目との間隔は五分間」

修太の低く緊張した声が響いた。黙ってうなずいた卯月が後ろに並ぶMの身体を点検する。Mは頭から毛布をかぶせられていた。毛布の下は全裸だ。Mと弥生に服を着せるかどうかで異論も出たが、遠目にはフード付きコートにも見えなくはない灰色の毛布をかぶせることで決着した。後ろ手に手錠をかけられ、口には祐子の織ったスカーフで猿轡を噛まされている。肛門栓も股間のリングもはめられたままだ。毛布の上からウエストを麻縄で二重に縛られていた。弥生と離されたことで、かえって厳しく拘束されることになってしまった。後ろの列に並んでいる弥生は、Mと同様素っ裸で毛布をかぶっていたが、手錠を外され猿轡も噛まされていない。懲罰を受けている弥生と虜囚のMとの差は明快だった。だが、弥生とお揃いのスニーカーを与えられたため、Mも素足は免れていた。

「車が来たぞ。出発用意。できるだけ急いで乗車」

外の広場にいる霜月の合図を受け取った修太が、押し殺した声で全員に告げた。ドア越しに重々しいエンジン音が聞こえてくる。大きく玄関ドアが開けられ、修太に脇を抱えられたMが屋外に出る。ピアニストと極月、卯月が後に続いた。玄関ドアから三メートル前の道路にパジェロが止まっている。後部ドアと助手席のドアが大きく開け放されていた。Mは修太に腰縄を曳かれ、ピアニストに押されるようにして後部ドアへ向かった。

「床に腹這いになるんだ」

背後からピアニストが厳しい声で命じた。Mは高いステップに立って後ろ手に縛られた身体を不安定に屈めた。途端に先に乗車していた修太が頭を押さえて床に押し倒す。自由にならない右肘をしたたかに床が打った。痛みに悲鳴を上げるが、厳しく噛まされた猿轡からは息も漏れない。情けなく鼻水が流れ、涙がこぼれ落ちただけだ。屈辱を感じさせる

余裕も与えず、ピアニストと極月が毛布に覆われた身体を踏みつけて座席に着いた。ドアを閉める前にパジェロが発進する。道路の端に立った霜月と如月が緊張した顔で見送っていた。

美術館の前まで坂を下りてから、運転していた文月が張り詰めた声で車内に呼び掛ける。

「水道記念館に来るまで検問はなかったわ。まっすぐアジトに向かいます。卯月、シートベルトを締めてよ」

助手席の卯月が慌ててシートベルトを締めた。ポケットの拳銃を握り締めたまま、修太が補給担当の文月に声を掛ける。

「よし、すべて順調だな。交通法規どおり運転してくれ。それから物資の方はどうだ」

「急だったけど一週間分を運び込んでおいたわ。一日十四人を見込んであるから、この人数なら実際はもっと持つわ。指令どおり私の組織は使わず幹部だけでやったから足がつく心配もない」

「よくやってくれた。パジェロ二台で一週間分の物資が運べるのは心強いね。週一回、連絡便を出せばいいんだ」

修太がほっとした声で応えた。

「警察の目が山へ向かない限り大丈夫よ。少なくとも二月いっぱいまでは人も来ないところよ」

前途を楽観したように文月が言った。三月になったらどうするのだろうと、狭い床に腹這いになって二人の会話を聞いていたMは不安になる。警察の目が山に向かないはずがないとも思った。山の中で銃撃戦が行われるかも知れない。Mの考えを見透かしたように、尻に乗ったピアニストの足に力が入った。Mは何も考えないことに決め、荷物になったように車体の揺れに身体を預けた。パジェロは順調に市街を走り抜け、山地に向かう。全員が無言のまま車体の揺れに身を任せている。

「ピアニストの家だね」

三十分ほど走ってからポツンと修太がつぶやいたが、返ってくる答えはない。六人を乗せたパジェロは、鬱蒼とした杉木立を縫って山奥へと向かう。狭くなった山根川を何回となく渡り、うねうねと続く林道を車体を揺らせながら走った。舗装道路が絶えてから、もう三十分になる。いつの間にか山根川の渓流も見当たらなくなっていた。林道に沿って小川ほどの流れが見えるだけだ。いくつもの谷筋に流れる名もない支流沿いに更に進む。

「もうじき県境だな」

黙って車の揺れに身を任せていたピアニストが思い出したように言った。刺々しかった車内の緊張がようやく薄れていく。緩やかなカーブを曲がりきると前方に小さな待避場が見えた。大型車がやっと方向転換をする余地がある。

「営林署も警察もここで管轄が代わる。うれしい限りだ」

ピアニストの明るい声に応えるように、文月がアクセルを踏み込む。車体が激しく揺れ、パジェロは簡単に県境を越えた。これまでと違い、驚くほど荒れた林道の感触が車輪から伝わってくる。踏み固められた轍の跡さえない。ほとんど通行車両がない証拠だ。全員の口元に笑みがこぼれる。M一人が床に横たわり、車体の激しい振動をもろに全身で受けて苦吟していた。荒れ果てた林道を十五分ほど上った。植林が進んでいない広葉樹の多い山並みが新鮮だった。時折山側に枝道が見える。

「そこじゃないか」

座席から身を乗り出したピアニストが林道から右手に折れる細道を指差す。

「いいえ、もう一つ先よ」

自信に満ちた声で答えた文月が、細道を通り越してから大きくハンドルを切った。チョロチョロと水が流れ出している小川の中に、文月はパジェロを乗り入れた。

「ピアニストが来たころと川筋が変わったみたいよ。お陰で水道がだめになっていたわ。後十分で着くはずよ」

激しく揺れる車内に文月の声が響いた。舌を噛まないように十分注意した口調だった。床に横たわったMの全身を絶え間なく衝撃が襲う。何回となく吐き気が込み上げてくる。ついに耐えきれなくなって両足を蹴り上げた。毛布の裾が乱れ腿の付け根まで丸出しになる。構わず両足で床を蹴り続けた。

「文月、車を止めてくれ」

ピアニストの大声が響いた。激しい揺れが収まり嘘のように車内が静かになった。ピアニストと修太が座席の左右に離れる。床に横たわったMを極月が引き起こした。

「もうちょっとの所で我慢がきかない。いかにもMらしいね。シートに座ると、もっと悲惨な目に遭うよ。大きく足を開いて踏ん張って立っているしかない。大きな尻を目の前にする極月には申し訳ないが、肛門栓をよく観察して職務に役立ててもらうしかないね。Mに代わって僕が謝っておくよ」

後ろ手の手錠を鳴らして腰を曲げて立ち上がったMに、ピアニストが笑い声で言った。修太がウエストを縛った縄を解いて毛布をはぎ取る。豊満な裸身が現れ、車内が急に狭く

なった感じになる。
「行ってくれ」
　ピアニストの声とともにエンジンが唸りを上げ、大きく車体が揺れた。白い裸身が転げそうになる。Mは両足を大きく左右に開き、豊かな胸を前のシートの背に預けた。股間のリングが情けなく揺れる。突き出した尻の割れ目に極月の息が掛かりそうでむず痒く、恥ずかしい。だが、シートに座って肛門栓の衝撃に責め苛まれるよりは余程ましだった。猿轡をきつく噛みしめて屈辱に耐える。極月は憮然とした顔で押し黙り、すぐ目の前で揺れる尻の割れ目をじっと見つめた。車の振動ごときに耐えられないMが憎らしくなる。だが自分の担当する虜囚の尻だった。仕方ないと思い、諦めて目をつむった。股間から漂うMの体臭がきつく鼻孔を襲う。ウッと短く極月が呻き、横を向いた。腰を曲げて突き出したMの尻に極月の硬い髪が触れた。極月の気持ちを察したMの全身が羞恥で赤く染まる。もう二日も風呂に入っていなかった。両の乳房をシートの背に痛いほど押しつけて尻を引いた。すぐ目の前にフロントガラスがある。熱く火照った顔で一心に外を見つめた。山に囲まれた風景が激しく揺れる。小川になった細道を抜け出し、パジェロは開けた谷沿いに緩やかな山肌を回り込んでいく。激しい振動がやんだ視界に谷川を挟んで大きな盆地が見えた。広さは市の野球場ほどもある。背後の緩やかな斜面は松林になっている。ひときわ高い赤松の巨木の陰にログハウスが見えた。松林に溶け込むようにひっそりと建っているが、街の建て売り住宅より大きい。
「コスモス事業団の理事長の遺産だよ。ドーム館と並行して建設を進めたものだ。地域を変革する計画が停滞するようなら、いつでも山籠もりをして練り直すと言っていたよ。結局、一度も使うことがないまま死んでしまった」
　ピアニストが珍しく感傷的な声を出した。じっとログハウスを見つめる修太の目が潤む。
「凄いね、ピアニスト。話には聞いていたけど、想像していたよりずっと規模が大きい。さすがは理事長だ。でも、なぜ誰も知らなかったんだろう」
　修太の問いに、Mも耳を澄ませてピアニストの返事を待った。理事長の個人的な遺産はすべて、チハルと祐子が相続したはずだった。
「ログハウスのことは、建設した都会の業者以外は僕と本部秘書の飛鳥しか知らない。理事長が極秘に建設したものだ。山奥にも関わらず設備は万全だよ。資産リストにも載せていない。このまま朽ち果てても惜しくなかったのだろう。チハルに話さなかったくらいだから、男の遊びだったのかも知れないな」

ピアニストが遠くを見るような目で言った。目の中に冬枯れの山と青い松林、どっしりとしたログハウスが映っている。パジェロは谷川を渡り、枯れ草をかき分けて、まっすぐログハウスに向かった。太い丸太を贅沢に使って組み上げたログハウスは、床を高く取って正面に広いテラスを巡らしている。建物全体が暗い緑色に塗られ、窓に下りた鎧戸は褐色だった。迷彩を施した軍事施設のように周囲の松林に溶け込んでいる。まさしくアジトだった。

「裏に回ってくれ。玄関がある。車も隠した方がいい」

現実に戻った用心深い声でピアニストが文月に命じた。松林に背を向けた北側の壁は黒く塗られていた。ちょうど車三台分の駐車スペースも設けられている。黒い屋根が張り出した大きな玄関ドアの前にパジェロが停車した。

「さあ、やっと着いた。ドアは理事長の暗証番号で開く」

パジェロのドアを大きく開けて、一人で車外に出た修太の背にピアニストが呼び掛けた。寒風が車内に吹き込みMは身体をすくめた。極月の目の前で裸の尻が震え、括約筋が窄まる。赤黒い粘膜を割って突き出た肛門栓の先も震えていた。顔をしかめた極月がポケットから銀色の鎖を取り出す。肛門栓の先端に鎖を繋ぎ乱暴に手元に引いた。ヒッと短い悲鳴がMの口を突く。盛り上がった肛門から金属棒の先端が三センチメートルも抜け出た。体内に残ったロート状に開いた部分が括約筋に激痛を与える。極月の鼻孔をまた異臭が襲った。

「まったく臭い尻だわ」

極月の罵る声が痛みに震える裸身を打った。たまらない屈辱が込み上げ、突き出た尻が蒼白になる。

「顔の前に尻を広げるMが悪い。謝れるように猿轡を外してやるよ。極月が腹を立てるなんて珍しいことなんだ」

ピアニストが楽しそうに言って、狭い車内で中腰になった。勝手な言葉が怒りに火を点ける。好きで裸でいるわけではないと叫んでみたが、猿轡で声も出ない。屈辱感だけが情けないほど募る。早く弥生に会いたいと思った。

「へー、猿轡にするにはもったいない生地だね」

祐子の織ったスカーフを解いたピアニストが感じ入った声で言った。

「汚い手で触らないでよ。祐子が苦心して織った作品よ。人の痛みも分からない者に触って欲しくない」

唾液を吸い取られ、渇ききった口に怒りの声が満ちた。
「ふん、愛しい祐子の織った生地か。そんなに興奮するようでは会って早々淫らな関係が戻ったのかも知れないね」
あざける声で言ったピアニストがスカーフを床に投げた。うんざりした顔で極月に声を掛ける。
「さあ、早くMを降ろしてくれ」
大きくうなずいた極月が鎖を曳いて車外に出た。Mは尻を突き出した格好で、後ろ向きに引き出される。尻の痛みでステップを踏み外し、再び車の床に倒れ伏した。目の前にスカーフが落ちている。思い切り首を伸ばしてスカーフを口にくわえた。唾液で濡れた布地から祐子の香りが立ち上ってくるような気がする。Mの目から止めどなく涙が溢れた。
「情けない姿だ」
車外に両足を投げ出して横たわるMをあざけりながら、ピアニストが車を降りようとする。尻を踏まれた裸身が弓なりになり、スカーフをくわえた口から声にならない呻きが洩れた。
「さあ、いつまで寝ているのよ」
極月が冷たく言って鎖を引いた。肛門の痛みで反射的に尻を浮かす。ぼろぼろになった裸身を震わせ、やっとの思いで後ろ手に縛られた身体を起こし、大地を踏み締めた。汗まみれの肌に冷気が襲い掛かる。極月がまた軽く鎖を引いた。尻に伝わる鈍い痛みが、早く歩けとMに命じる。スカーフを噛みしめた歯に力を込めて、Mはゆっくり歩き始めた。止めどなく涙がこぼれ、冷たい風に吹き流されていった。

ログハウスの玄関からまっすぐ、幅一メートルの廊下が奥に続いている。山に面した北向きの天窓から入る光で屋内は明るい。鋸屋根工場を模した明かり取りが上手に配置してあった。廊下の左側に三つ、右側に四つのドアがある。効率的に設計された建築だったが、南に開けた部分が極端に狭い。山間に立てられる建築としては異様な配置だった。人目を忍ぶ意図が随所に見て取れるようだ。
極月に曳き立てられたMは、廊下の突き当たりの広間の端で正座するよう命じられた。広間は二十人ほどが集まれる広さで、厚い組木でフローリングされている。トレーニングルームのような雰囲気があった。Mは冷たい床の上に膝を折って正座した。目の前は横長の窓で、床から三十センチメートルの所にステンレスのパイプで手すりが設けられている。

窓の上には鉄棒が渡されていた。

「膝を開きなさい。しばらく忙しいから、ここでMを拘束する」

極月の命じる声が頭上に落ちた。またしても屈辱的な指示だ。Mは頬を赤く染めて左右の膝を開いた。股間があらわになり、黒々とした陰毛の間で陰門を封鎖した金色のリングが光った。極月がMの横に屈み込む。股間に手を差し入れ、肛門栓に繋いだ鎖を引き出す。短い鎖を目の前のステンレスのパイプに潜らせて、股間のリングに繋ぎ止めてしまった。もうMは立ち上がることができない。許されるまで正座した姿勢を続けるしかなかった。噛みしめていたスカーフを落とすと、ちょうど股間が隠れた。祐子の好意のように思われて泣ける。

「鎧戸を全部開けてくれ、窓は無反射ガラスだから日に反射する心配はない。トイレは使ってもいいが、水は飲むな」

ピアニストの指示がログハウスの中に響き渡った。それぞれの部屋で窓を開く音が聞こえる。極月が目の前のカーテンを開き、窓を開けて鎧戸を押した。明るい日射しがMの目を打った。もう夕刻近いはずだった。それでも明るい外光に照らされて、Mは無心に弥生の到着を待った。これほど人に焦がれたのは生まれて始めてのような気がした。不安な十五分間が過ぎ、眼下に広がる枯れ草の斜面の果てに白いパジェロが現れたとき、Mの目からまた涙がこぼれた。近付いてくるパジェロの車窓に、先ほどまでのMと同じように中腰になった弥生の裸身が見えた。Mの口元に微笑みが浮かび、痛む肛門が切なく疼いた。後続車の到着で、ひとしきり玄関が賑やかになる。無事に合流できたことを喜ぶ華やぎさえ伝わってきた。素っ裸で正座して、ざわめきに聞き入るMの背後に人の気配がした。うなだれていた首を起こし、背筋を正すと同時に背後から肩を抱かれた。後ろ手に縛られた両手が裸のウエストに触れた。温かな素肌の感触が胸に響く。

「やっと一緒になれたわ」

振り向いたうなじに弥生の優しい声が掛かり、両の乳房が強く握られた。Mの全身から緊張が去り、胸が熱くなる。思わず涙が流れた。

「辛い仕打ちをされたようね。負けてはだめよ」

妹を励ますように弥生が言ってMの横に座る。Mと同様素っ裸だったが両手は自由だ。ステンレスのパイプに繋ぎ止めた鎖を悔しそうに右手で摘んだ。

「すぐ外してもらうわ。手錠も反省時間以外は必要ない。そうでないと二か月は持たないわ。ぼろぼろにされてしまう」

弥生の興奮した声を聞いたMが、やっと冷静さを取り戻す。
「弥生は二か月でも私は違う。警察に救出されるまでずっと続くわ」
立場の違いを思い知らされた弥生の顔が曇る。
「だいじょうぶよ。私がいるわ」
きっぱりと言った弥生が立ち上がり、大きな声で極月を呼んだ。黒いアタッシュケースを下げて忙しく広間に入ってきた極月に、弥生が厳しく抗議する。
「Mの手錠と鎖を外してください。Mの処遇は私と同じだとオシショウが命じたはずよ」
極月に続いて広間に入ってきた睦月が弥生の言葉を聞いて眉をひそめた。憎々しい声が広間に響く。
「反省中の弥生に勝手なことを言わせてはだめよ。Mと同じ格好にしてやればいい。極月は甘すぎると私は思う」
「私の仕事に干渉しないでよ。睦月に指図される所以はない。弥生の処遇は私の流儀でさせてもらう」
睦月を振り返った極月が厳しい声で言った。弥生の口元が思わずほころぶ。
「弥生、反省中の者が司法担当に抗議するなど許さない。懲罰します。両手を後ろに回しなさい」
激しい声で極月が命じた。弥生の顔がひきつり、力無く肩が落ちた。仕方なく後ろを向き、背中に両手を回す。両手首を拘束する手錠の音が広間に響いた。
「この広間は屈伸刑にちょうどいいわ。両足を開きなさい。十五分間の屈伸を命じます」
宣告を聞いた睦月の顔に、してやったりと言いたげな笑いが浮かんだ。弥生の表情が険しくなる。大きく開いた股間のリングに極月が鎖を繋いだ。睦月がうれしそうに極月を手伝い、尻の割れ目から突き出た肛門栓の先に長い鎖をつける。股間から二本の鎖を垂らした弥生に極月が冷たく命じる。
「刑を執行します。屈伸しなさい」
後ろ手に縛られた弥生が膝を曲げて屈み込む。両膝が直角に折れた姿勢になった。肛門栓から延びた鎖の長さを測った極月が、ステンレスのパイプに鎖を縛り付ける。弥生はそのまま床にしゃがみ込んでしまった。
「さあ、屈伸に戻してやるよ」
楽しそうに言った睦月が、股間のリングに繋いだ鎖を二メートルの高さの鉄棒に渡してゆっくり引き始める。陰唇を引き裂かれる恐怖と痛みで弥生が腰を上げた。そのまま引き

上げられ、膝を曲げて屈伸した姿勢で鎖を繋ぎ止められてしまった。二本の鎖が弥生の股間から上下に延びてピンッと張り詰めている。スキーの滑降の姿勢で固定された裸身は滑稽に見える。しかも、弥生は身動きすらできない。膝を曲げた苦しい姿勢を十五分間続けなければならないのだ。残虐な刑罰だった。

「十五分後に許す。しっかり反省しなさい」

「きっとオシッコを漏らすよ」

極月が告げ、睦月が冷やかして広間を出ていく。睦月の背に弥生が毅然とした声を浴びせる。

「あなたは五分で我慢できなかったが、私は鍛え方が違う」

笑い声だけが帰ってきた。素っ裸で正座させられたMの横で、素っ裸で中腰にさせられた弥生が二本の鎖で繋がれている。Mは全身が疲れ切って抗議する気にもなれなかった。力無くうなだれて目をつむった。

「M、用心して。これはMへの警告よ。私はこの姿勢に三十分は耐えられる。でもMが懲罰されたらひとたまりもないわ。Mのためだから、じっと目を開いて私を見ていて」

弥生の真剣な声でMは目を開き、弥生を見た。目の前に弥生の股間がある。燃え立つ陰毛の間から二枚の陰唇を封鎖した金色のリングが飛び出ている。鎖に引かれて無様に伸びたピンクの陰唇が痛々しい。意外に明るい声に安心して、Mは思い切って顔を見上げた。にこやかな顔が大きくMにうなずく。途端に弥生の表情が引き締まり、歯を食いしばって苦痛に耐えた。

「油断するとだめね、身動き一つできないのは応えるわ。やはり肛門で痛みを耐えるしかない」

自嘲して言った顔に笑みは戻ったが、眉間に寄せた皺は深まる。Mにはやせ我慢に見えてならない。

「そんな辛い格好で、弥生は三十分もいられたの」

「屈伸のポーズだけならね。四十分でも平気よ。でもお尻と股間を固定されて、身動きができないのは初めて。思ったより辛い。極月の機嫌が悪すぎたわ」

太股とふくらはぎの筋肉を盛り上げ、懸命に屈伸の姿勢を続ける弥生の口調が弱気になった。

「ごめんね。極月の機嫌が悪いのはきっと私のせいよ。車の中で、もう少しでお尻を舐めさせるところだったの」

弥生が思わず吹き出す。

「そうだったの。私も睦月にお尻を舐めさせるところだったわ。二人とも機嫌が悪くて当たり前ね」

Mの目に窓から見た弥生の裸身が甦る。二人して声を忍んで笑ってしまった。不用意な笑いで弥生がバランスを崩す。僅かに尻が落ちた。伸びきった陰唇が裂けるほどの激痛に、慌てて尻を上げる。今度は括約筋が裂けるほど肛門栓が尻を責めた。ヒッ、ヒッーと短い悲鳴が二度、連続して口を突いた。弥生の悲鳴がMの股間に激痛を伝える。裸の背筋を寒気が走り抜けた。

「思ったより過酷な責めよ。まだ五分も経っていないのに気弱になってしまうわ。ひょっとすると睦月が言ったとおり失禁するかも知れない。そうなってもM、笑わないで見ていてね。明日からの日課が決まれば、あの人たちは面白がってMに懲罰を科すわ。わたしが側にいると思って、これからやることを見て、きっと耐えていってね」

悲壮な声にMは真剣にうなずく。確かに弄ばれるだろうと思った。ふやけきった肉体が蔑まれるに違いなかった。恐怖が喉元まで込み上げてきたが、これは戦いだと思い、鍛え上げた弥生の裸身にじっと見入った。

弥生は二度と口をきかなかった。澄みきった目を大きく見開き、歯を食いしばって身体のバランスを取る。もう十分は経過した気がする。Mの目の前で張り詰めた足の筋肉がブルブルと痙攣している。筋肉の痙攣は全身に伝わっていく。脂汗の浮いた裸身が細かく震え、歯を噛みしめて一文字になった唇が歪む。大きな痙攣が下半身を襲う度に、肛門と陰唇を交互に激痛が見舞う。その度に口が開き押し殺した陰惨な悲鳴が洩れた。鼻からは切ない呻きが止めどなく溢れ、鼻水が床に落ちる。涙もこぼれ落ちていた。Mは見ていられず目を覆いたくなる。祐子ほどの歳の少女が、なぜこんな拷問に耐え続けるのかと不安になる。救いを、許しを、泣き叫んで求め、乞うべきだと思う。弥生はMに、懲罰に負けない姿を見続けるように告げた。だが、見る者が耐えられないほどの試練は殉教と呼ぶべきものに違いない。そして弥生は信仰を持っているのだ。信に殉じようとする者の、滑稽なまでの気迫がMを打つ。目をつむるわけにはいかなかった。これも戦いの一つだと覚悟して大きく目を見開く。

苦吟する弥生の下腹部と尻がわなわなと震えだした。陰毛が激しく揺れ、固く引き締まった腹筋が波打っている。なだらかな尻の曲線も消え、太い筋肉の筋がひときわ盛り上がっている。もう身体のバランスを取ることができなくなっていた。リングを通されたピン

クの陰唇が長く伸びきり、肛門栓の太い金属棒が尻の割れ目に露出していた。それでも動ける幅はやっと十センチメートルほどに過ぎない。すでに悲鳴もやみ、止めどない喘ぎだけがうなだれた口に溢れていた。もう限界だった。後は失神して倒れ、無惨に陰唇が引き裂かれるだけのことだった。

Mは助けを呼び、許しを乞うことを決断した。たとえ弥生の意に添わぬことでも仕方ないと思った。やはり弥生とは価値観が違うのだと自分に言い聞かせ、Mは中腰に立ち上がった。股間と肛門を激痛が見舞い、目の前が真っ白になった。弥生の痛苦に報いることのない決断を、万分の一かの痛みで贖おうと思う。痛みに耐えて助けを呼ぼうとした瞬間、極月の声が響いた。

「一分早いけど、ミーティングの時間よ。許してやるわ」

Mには天使の声に聞こえた。弥生の信仰もプライドもこれで保たれるのだ。ほっとして弥生の顔を見上げた。

「許しなど要らない。私の試練は私が乗り切る」

唇の端から血を滴らせた弥生が、凛とした声で叫んだ。

「勝手にすればいい。その様子では十秒も持たない」

極月が冷たく言い捨てて出ていこうとする。

「待ちなさい。あなたが命じた陳腐な刑の執行を良く見るがいい。弥生以外で耐えられる者など、この世にいない」

Mの怒声が広間に響いた。振り返った極月の目に憎しみが浮かぶ。

「お前の汚い裸も吊してやろうか」

極月の残忍な声を、突然弥生の悲鳴が覆い隠す。

「ヒッ、ヒヒッー、ヒー」

途切れなく続く絶叫がログハウス全体に轟いた。驚いて広間に集まってきた全員が、素っ裸で後ろ手に縛られ、両膝を直角に曲げたまま拘束された凄惨な弥生の姿を見た。

「何をやってるんだ。小娘をいたぶっている暇などない。早く解放しろ」

蒼白な顔でピアニストが命じた。

「ダメヨッ。これが現実よ。ピアニストの夢とは違う。極月、時間を教えて」

Mの大声が弥生の悲鳴に重なる。

「残り、二十秒」

左の頬をピクピクと痙攣させた極月がぼそっとつぶやく。

「弥生、後二十秒よ。勝てるわ。十五、十四、十三、十二、」

Ｍのカウントダウンする声が全員の興奮を誘う。十秒前からは数人が弥生を囲み、大声でＭに和した。ひときわ高く弥生の悲痛な悲鳴が響き渡り、懲罰の時間が切れた。間髪を入れず、霜月が大きな手を鉄棒に伸ばしてリングに延びた鎖を断ち切る。弥生の裸身が糸の切れた操り人形のように床に倒れた。青白くなった裸身が痙攣を続けている。股間から流れ出た尿が瞬く間に床に広がっていった。だが失禁を笑う者は誰もいない。感嘆した声と拍手がぼろ切れのように横たわる弥生の裸身を包んだ。

「極月、後始末を命じる。規則どおり手錠ははずせ。私刑の処分は後で決める。他の者は食堂でミーティングだ」

ピアニストが吐き捨てるように言って背を向けた。修太が後に続き全員がそれに倣った。二つの裸身と極月、そしてオシショウが広間に残った。

「弥生こそ、神ながらの道を行く者だ。極月、驕り高ぶりは身を惜しむ者の振る舞いではない。修業が足りなかったな。二人をいたわって裸になれ。反省は免れまいが、みんなの心証が違うだろう」

言い残して去っていくオシショウの後ろ姿を極月が見つめ続ける。やがて肩をすくめ、小さく首を振ってから服を脱ぎ始めた。窓の外に広がる暗闇が三つの裸身を包み始めていた。

素っ裸の三人が呼ばれて、食堂に入っていった。食堂は広間の隣にある。東向きに調理台を巡らし、中央に細長いテーブルがある。正面にピアニストと修太が並んで座り、他のメンバーは向かい合って座っている。天井に吊った三つのランタンが輝き、玄関に出るドアの前には赤々と燃える石油ストーブが置いてあった。ほっとする温もりが三人の裸身を迎えた。Ｍと弥生は手錠は許されていたが、それぞれの肛門栓を鎖で繋がれていた。足元のおぼつかない弥生の肩をＭが抱いてゆっくり歩く。二人の前に極月の裸身があった。スリムというより痩せているといった方がいい裸身だ。小さく盛り上がった尻が鞭のようなしなやかさを連想させる。尻の割れ目は深く、陰毛は薄い。背筋を正し毅然としてテーブルの正面に向けて歩いていく。

「弥生とＭはドアの前に正座しなさい。極月はストーブの前に立て。すぐ査問を始める」

修太が座ったまま告げ、腕組みしたピアニストがうなずく。Ｍと弥生はドアの前まで戻り、黙って床に座った。冷気が足に伝わってくるが、室温は広間と格段に違う。暖かいほ

どだった。

「極月が行った私刑について査問します。だが素っ裸で現れたほどだから事実関係は省略して弁明から始めたいと思う。極月、弁明しなさい」

修太が査問の開始を告げると、ストーブの前に立った極月が頭を下げて話し始める。痩せた裸身が胸を張った。見事に切れ上がった股間を飾ったトルコ石のピアスがランタンの光に輝く。

「私に弁明の余地はありません。反省中の弥生を職権で懲罰しました。冷静な判断でなかったのは事実です。非常時に愚かなことをしたと思っています。司法担当として自ら懲罰を受ける覚悟があります」

「反省だ、反省三日間」

霜月の声が響いた。男たち全員がうなずく。Mの横で弥生の肩が緊張する。極月の裸身が見る間に赤く染まった。

「決まったな。極月には反省一週間を命じる。しかし今は忙しすぎる。素っ裸になって査問に応じた態度も評価できる。一か月の執行猶予にしよう」

ピアニストが断固とした声で宣告した。反対できる者はいない。極月は懲罰を免れたのだ。不当な扱いにMの裸身が怒りたつ。抗議の声が喉元まで込み上げ、全身が緊張した。思い切って立ち上がろうとした瞬間、弥生の右手がそっと股間に置かれた。指が陰毛をまさぐり陰門を封鎖したリングを軽く摘んだ。Mの怒りがゆっくりと遠のいていく。不毛な抗議が弥生の意に添うはずはなかった。また弥生に助けられたような気がする。ついさっきも、広間で極月に懲罰される寸前にわざと悲鳴を上げてくれたのだ。Mの胸に熱いものが込み上げてくる。同時に、これまで育ててきた確固とした自意識が揺らぐ。ふと友愛という言葉が浮かんだが、一人きりで生きてきた過去が頬を赤く染めさせた。思わず弥生の横顔をのぞくと、自信に溢れた笑みが帰ってきた。弥生の勝利が揺らぐことはないのだ。誰もが知っていることだった。

「極月は末席に着け。ミーティングを続ける」

修太が短く言った。極月が深々と頭を下げる。再び頭を上げ大きく胸を張って席に向かう。睦月が椅子に座ったまま手を伸ばして、すれ違う極月の尻を叩いた。ピシャッと乾いた音が食堂に響いた。

「それではこれから、アジトの生活で注意する点を伝えます」

修太が全員の顔を見回しながら、ゆったりとした声で話し始めた。査問が終わった後の

弛緩した空気が室内に流れている。厳しい表情で腕組みをして座っているピアニストが首を左右に振った。腕組みを解いた両手を左右に広げて修太の声を制した。全身に苛立ちが溢れている。

「林間学校の生活指導ではないんだ。何で我々がここにいるのか認識しなければ意味がない。シュータが敗北したことを隠してはいけない。今にでも警察の襲撃があるかも知れないのだ。このままでは滅びる気にもなれない。死んだまま滅びてしまっては何も生まれない。尻尾を巻いてしまっていいのか。僕は嫌だ。もう一度希望を持とう。惜しまれる社会を再建するんだ」

ピアニストの叫びが室内に満ちた。全員が背筋を正して次の言葉を待つ。

「基本はいつでも抗戦できる体勢でいることだ。日を追うごとに戦闘力を高めることに目標を置こう。規律正しい生活と団結が大事だ。個々の体力も鍛えてもらう。来るべき出撃に備え、まずシュータを理想的な戦闘組織に変える。自らが惜しまれる組織にならねば、社会を変革することなどできはしない。滅びと等価になるほど惜しまれる社会をシュータに体現するんだ。きっとできる。君たちの能力は高い。希望に向かって精進を重ねよう」

沈滞していた部屋の空気が高揚していくのがMにも分かる。股間に置かれていた弥生の右手が微かに震え、強く握り締められた。弥生は大きく息を吸い込み、そのまま静かに止め、求めるようにピアニストを見つめている。Mは全身の力が抜け、うなだれてしまった。心の底から深い悲しみが立ち上ってきた。子供たちはいつも、邪悪な思想に弄ばれるのだ。荒ぶる言説にひかれていく鋭すぎる感性が悲しい。疲れ切った裸身が心の寒さに震えた。

ピアニストの演説に大きくうなずいて修太が立ち上がった。先ほどより声のトーンを上げて話し始める。

「ピアニストの言うとおりだ。心を引き締めて規律を高めよう。まず見張りを厳重にする。見張りは屋根裏部屋を使って二十四時間武装して行う。二時間交替だ。松の梢越しにログハウス前の広場が一望でき、裏山の稜線も見える。睦月が最初だ。後は月順に交替する。すぐに配置に就け」

小柄な睦月が椅子を鳴らして立ち上がった。兵器担当の霜月が銀色に輝く拳銃を差し出す。睦月の小さな手に大きなリボルバーが重い。慎重に弾倉を開けて実弾を確認する。補給担当の文月が差し出す大型のマグライトと双眼鏡を持ってドアを開けた。

「夜の見張りは耳で見るんだ」

修太の掠れ声が睦月の背を打った。

この時間まで見張りを置かなかった事実にピアニストは愕然とした。組織のレベルアップが緊急の課題になる。有無を言わせぬ大人の権威がまさに求められていた。この場を修太に任せるわけにはいかないと思った。大きく息を吸い込んでから、ゆっくり吐き出すようにピアニストは言葉を口に乗せる。

「毎日の起床は午前五時。午後七時には就寝とする。日課は訓練と作業が中心になる。何よりも組織の戦闘力を高めることを優先するんだ」

ピアニストの声に全員から無言の驚きが帰ってくる。昼と夜を逆転させた生活を続けてきた学生が、一朝にして農民の生活に戻るのだ。しかし、それが父祖たちの暮らしなのだ。日が昇る前に起き、日が沈めば眠る。精神から鍛え直すには一番良い方法だった。ピアニストは言葉を続ける。

「見て分かるとおり天井には電灯がある。このログハウスには自家発電装置があるし石油もプロパンガスもある。簡易水道が入り、浄化槽が設置してある。トイレは水洗で風呂もある。街の暮らしと変わりがない。だが、発電装置は使わない。そして、肝心の水が使えない。簡易水道の取水口が山崩れで埋もれてしまったのだ。貯水槽の水が切れれば我々は干上がってしまう。それもいつ入れたか分からない水だ。先ほど作業と言ったのは取水口の整備だ。手作業で土木工事をすることになる。さっき見てきた限りでは復旧のめどは立たない。その間の水は、湧き水から汲んで使う。湧き水までの距離は五百メートルある。獣道を登っていくのだ。辛い仕事になる。それでも飲料水が確保できるだけだろう。トイレや風呂で使う水はない。すべてログハウス前の広場の先の自然で賄う。いくら寒くても身体は山裾の谷川で洗え。トイレは山の中だ。ここから二百メートルは離れている。何度も言ったように、我々はキャンプに来たのではない。辛い作業を続けながら戦闘力を高めるんだ。明日から原始生活が始まると思ってくれ。怠けるものは徹底して懲罰する」

全員の身体が緊張した。極月の裸身がほんのりと赤く染まる。担当の仕事が増えることになりそうだった。

「細部は修太が発表してくれ。僕はオシショウと今後の方針を詰める」

言い残してピアニストが席を立った。オシショウの姿がなかったことに、今更ながら全員が気付いた。山の暮らしは本来、若者のものなのだ。続けて修太がメモを広げ、気難しい表情で口を開く。

「全体の状況はピアニストが説明したとおりだ。明日からの日課と見張りのローテーションは毎日この壁に貼って置くからよく見てくれ。明日の起床は五時。すぐログハウスの掃

除に掛かる。この作業でよく身体をほぐしておけ。足元が明るくなりしだい水汲みにいく。自分が一日に使う水を各自で用意するんだ。続いて七時まで運動の時間。外の広場に集合してくれ。七時から九時が朝食と身の回りの片づけ。九時からずっと取水口の復旧作業をする。四時からまた運動と訓練。六時から夜食とミーティング。七時に就寝だ。分かりやすくていいだろう。単調な生活だ。十分心身が鍛えられる。とにかくやってみよう。もうじき七時だ。今夜は夜食抜きで就寝にする。貯水槽の水は今夜中に抜く。水が欲しい者はミネラルウオターを飲め」

疲れ切った声で修太が最後に部屋割りを伝えると、全員が力無く立ち上がった。腹の鳴る音がどこからともなく聞こえる。長い夜になりそうだった。

「弥生とMは極月の指示に従え。着衣は許さないから食堂で寝起きすることになる」

いったんドアを出た修太が面倒くさそうに半身をのぞかせて命じた。温もりが残る部屋に素っ裸の三人が残った。

「正座しなさい」

極月に命じられたMと弥生が再び正座した。二人の目の前にトルコ石のピアスで飾った極月の股間がある。

「私は寒い広間で寝起きさせたかったけど、仕方ないわね。食堂の隅を使いなさい。手錠は許すけど、肛門栓は繋いだままにする。残念ながら二人の寝袋は用意していない。毛布をかぶって抱き合って寝るのよ。さあ立ちなさい。毛布を取りに行くわ」

ランタンを持った極月が奥のドアまで行き、赤々と燃えるストーブを消した。

「勝手にストーブを点けたりしたら懲罰よ。ピアニストの話は覚えているでしょう」

冷たい声で言って極月がドアを開ける。ストーブの消えた部屋に冷気が襲い掛かる。三人の裸身に鳥肌が立った。

7　山の生活

山岳アジトでの奇妙な日課がスタートして一週間が経った。

朝の五時は、まだ真の闇だ。見張りの交替が屋根裏部屋に上っていく足音と同時に、各部屋から一斉にがさごそと物音が響き渡る。素っ裸のまま抱き合って毛布にくるまっていたMと弥生も反射的に目覚める。弥生が勢いよく毛布を剥ぐ。温もりの残る裸身を一瞬のうちに冷気が包んだ。思い切って覚悟を決め、二人一緒に息を合わせたように立ち上がった。二つの尻から延びた細い鎖が寒々とした音をたてる。鎖で繋がれた日々にも、ようやく順応してきていた。寒さに震えながら、鳥肌になった裸身を二人で摩擦し合う。向かい合ってきつく抱き合い、お互いの背に両手を回して背中から尻にかけて力を入れて擦る。徐々に背から尻に浮いた鳥肌が消え、密着した乳房と下腹が擦れ合って上半身が温かくなる。今度は交互にしゃがみ込んで太股から足にかけて擦り合う。十五分ほど続けると二つの裸身がピンク色に染まり、全身がぽかぽかとしてきた。同じ状態になるまでにMの方が五分ほど遅れる。毎朝情けないと思うが年のせいだと諦めざるを得ない。弥生の裸身は滑らかで張りがあり、ほれぼれするほど素晴らしいのだ。かつての私も同じだったと胸を張って自負し、その素晴らしさに今更ながら触れられることを喜びたいとも思う。

全身が温かくなったところで、バケツに汲み置きの水を使って拭き掃除を始める。水は手が凍り付くほど冷たい。雑巾をきつく絞って床に置き、両手を当てて四つんばいになって二人で床に並ぶ。素っ裸の尻を高く掲げ、昔ながらの拭き掃除を始める。二十畳の食堂を五往復もするとMの吐く息が荒くなる。太股の筋肉も硬く張り詰めてくる。だが弥生は休もうともしない。二人の肛門栓が鎖で繋がれているため、Mも弥生に付き合わないわけにいかない。重い尻を無様に振って必死に弥生の後を追った。

「いい準備運動になるわ。全身の筋肉がほぐれていくのが分かるでしょう」

遅れたMをからかうように、弥生が振り返って声を掛けた。Mは息が弾んで答えることができない。もう七日も続けている日課なのに、全身の筋肉は硬く張り切って痛むだけだ。やっとの思いで毎朝広すぎると罵り続ける食堂の床を拭き終わった。ようやく天窓が明るくなり、吐く息が白く見える。休む間もなく水汲みが始まるのだ。玄関からバケツの触れ合う音が聞こえてくる。Mと弥生は連れだって廊下を駆けた。広い玄関でスニーカーを履いていると、右手に竹の笞を持った極月が背後に立った。ヒュッーと笞が空を切る音で身

体がすくみ、Mが振り返る。初日に散々打たれた尻が条件反射で震えた。一週間経っても、笞痕はまだ痣になって残っている。鋭い痛みが全身に甦った。

「また一番最後ね。怠けていると、また笞が飛ぶわよ」

黒いトレーナーの上下を着た極月が、しなやかな竹笞を振りかぶって鋭い声で威嚇した。

「ぬくぬくした極月と違って、素っ裸の私たちはウオーミングアップに時間が掛かるのよ」

Mの代わりに答えた弥生の尻に、軽く笞が飛んだ。

「急げ。日が暮れてしまうわ」

極月の怒声に追われてドアを開け、裏庭に出る。身体の芯まで凍り付かせる冷気が素肌を責める。ぼんやりとした明るさの中で文月が差し出す二つのバケツを左右の手で握る。大きなバケツを二つずつぶら下げ、Mと弥生は松林に向かって駆けた。薄明の林に大振りの裸身が二つ分け入っていく。豊かな尻と、高く引き締まった尻が筋肉を躍動させて走る様は異様な美しさを感じさせる。二人の吐く息が真っ白になって後方に流れ去った。松林の先は鬱蒼とした山林に獣道が続く。激しい勾配を休みなく走る。弥生がスピードを合わせてくれるが、Mはすぐにでも座り込んでしまいたくなる。肛門栓を繋いだ鎖が枝に引っかからないように、弥生が後になって細心の注意を払う。

初日はこの辺りで鎖を枝に取られ、Mが倒れてしまった。もっともその時は走ってはいない。ふくらはぎの筋肉が吊ってしまったMは、足を引きずりながら歩いていた。肩を落として無気力に歩くMが異常に対処できなかったのだ。突然肛門を襲った激痛に腰が砕け、無様に尻餅を付いてしまった。落ち葉と枯れ草が堆積した獣道に倒れたMは、足の痛みで立ち上がれなかった。擦れ違いのできない獣道を塞いでしまった焦りと情けなさが全身を被った。何とか立ち上がろうと四つんばいになって歯を食いしばった。固く硬直したふくらはぎを弥生が優しく揉み続けた。駆け付けてきた極月がののしり、剥き出しの尻を笞で打った。硬く張り切ってしまった尻に笞が痛い。Mは悲鳴を堪えたまま屈辱に泣いた。

今、同じ道をMは走り続けている。わずか一週間しか経っていないのに見違えるばかりだ。緩い下りに差し掛かると、先を行く人影が見えた。五十メートルは離れているが、小柄な身体は睦月らしかった。所々で下草の中に入り、帰ってくる者に道を空ける。みんな額に汗を浮かべ、左右にぶら下げたバケツから水をこぼしながら登ってくる。満水にしたバケツも貯水槽に入れるときは六割程度に減ってしまう。バケツ一つでは二往復しなければならなかった。三日前に街から上がってきた補給車が、やっと十分な量のバケツを運び

込んできた。今は湧き水との間を二往復する必要はなかった。だが、各自が二つのバケツを持つことになったため水汲みの苦痛が増したような気がする。

一週間前の最初の水汲みでバケツを調べられたMは、水が二割も残っていなかった。また極月に尻を打たれ、その日は三往復もしたのだ。弥生に迷惑をかけることだけが苦痛だった。でも、弥生は嫌な顔一つ見せずにMを励ました。身体を鍛え上げるしかないと、その時Mは決心した。

斜面を下りきった向かいの岩壁の下に湧き水はあった。一面に張った氷を割って清澄な水が豊富に湧き出している。Mと弥生は用意してある柄杓で水をすくい、四つのバケツをいっぱいに満たした。柄杓の水を口に含むと、冷たさで舌が凍え、続いてまろやかな味が口いっぱいに広がる。一瞬、全身の痛苦が霧のように晴れた。命の水だ。走ってきたばかりの道を、今度は両足に力を込め一歩一歩踏み締めながら帰る。重いバケツが両腕を責める。歩く度にバケツが揺れて足に水が掛かる。飛び上がるほどの冷たさだ。ようやくログハウスに戻り、貯水槽に水を空けるころには山間に光が満ちている。谷間から朝日が顔を見せるのももうじきだった。

単調な山の生活も、今日で三週目になる。

暦が代わって二月になっていたが、寒い日が続いていた。幾分輝きを増した日の光だけが確かな季節の移ろいを知らせている。三週間目の運動の時間は、疲れ切った顔が外の広場に並んだ。半月続いた過酷な生活が、全員に疲労を蓄積させている。水汲みの後のマラソンはきつい。

「もう十四日も経ったんだ。今日からは四キロ走ろう」

取り囲んだ顔を見回したピアニストが弾んだ声を出した。ピアニストは全裸だった。引き締まった身体を朝日が斜めに照らしている。取り巻く全員が素っ裸だ。ログハウスの前の広場の端に全員が集合している。十一人の裸身を冷たい風がなぶっていった。オシショウの姿だけが見えない。

Mの目の前には広大な草原が広がっている。松林と、向かいの山に沿って流れる谷川に挟まれた広場は陸上競技のトラックほどの広さがある。一周が約四百メートルだ。この広場をこれから十周も走るのだ。無言の溜息がほとんど全員の口から出た。Mの裸身をうんざりするほどの疲労が支配する。昨日までは二キロメートル、五周で済んだ。二倍の距離

を想像するだけで全身の力が抜けてしまう。
「スタートまで二分よ。後ろを向きなさい」
　真っ白な息を吐きながら極月が告げた。Mと弥生の肛門栓を繋いだ鎖が取り外される。でも自由になった身体を喜んではいられない。すぐマラソンがスタートするのだ。水汲みで疲れ切った身体が拒絶反応を起こし、吹きつける寒風に震える。だが、鎖を外された弥生は全身で自由を謳歌する。引き締まった裸身を朝日に輝かせ、両足を大きく開いてストレッチ体操を始める。全身の筋肉がしなやかに伸び、美しく躍動した。
「さあ、Mもストレッチしなさい。せっかく二キロが走れるようになったのだから、四キロでも同じことよ。足が吊ると距離が長い分辛いわ。十分に筋肉をほぐすのよ」
　楽しそうな声で弥生が呼び掛けた。仕方なく、Mものろのろと硬い身体を動かし始める。白いスニーカーが踏み潰す霜柱の感触が、不安な気持ちを一層高める。
「よしっ、スタート」
　ピアニストの大声が草原に響き渡り、十一人の素っ裸の男女が一斉にスタートした。二十代の若々しい裸身が集団で走り出す様は壮観だった。吹きつける寒風に負けずに、伸びやかな裸身が風を捲いて走る。裸体の群はまっすぐに松林に向かう。広場全体が斜面になっているため、登り道のスタートだ。コースを一周する度に二回のアップダウンがある。フラットな陸上競技のトラックとは比べようもない。荒れ地を駆けるクロスカントリーといった方がよく似合った。単調にコースを周回する姿だけがトラック競技と似ている。広い踏み跡のできた草原を松林に沿って全力で走る。Mは集団の最後尾にいた。二十メートル先に五人の裸身が見える。大きく両手を振り、足を蹴り上げて走る姿が逆光にまぶしい。尻の筋肉が美しく躍動している。同じように鍛え上げた裸身だが、それぞれに個性がありレベルも違う。谷側のインを走る睦月の小さな尻は丸くて可愛らしい。短い足を忙しなく蹴り出し、地面を這うように走っている。睦月に比べ、山側のアウトを走る文月は飛ぶように走る。肉付きの悪い尻から伸びた長い足が大きく地面を蹴る。ひときわ逞しい霜月の裸身が五人の集団を抜け出していく。神無月、卯月の男性二人が必死に追いすがっていった。
　コースは目の前の切り立った山の前で右回りにコーナーを回る。下りになった斜面の第二コーナーを無理のない姿勢で走っていくピアニストの裸身が見えた。Mとは五十メートルの差があった。ピアニストの後に弥生が続き、極月が追う。少し離れて修太の裸身がコーナーを回った。さわやかな息づかいが聞こえてくるような安定した走りだ。Mが谷川に

沿った直線コースにでたときは、睦月と文月から三十メートル離されていた。しかし、Mはペースを守って淡々と走る。初日と違い、それほどの焦りも感じなかった。

初日のマラソンは思い切ってスタートした。もちろんMが最後尾だったが、前を走る睦月との差は十メートル程だった。だが三百メートル走ったところで足が吊ってしまった。痛む足を引きずり、くたくたになってゴールしたときは先頭から三周も遅れていた。倒れ伏してしまった身体を最下位の罰が待っていた。全身から込み上げてきた焦燥感と屈辱感は、二週間経った今でも忘れていない。四十歳になる肉体は焦ったら負けなのだとつくづく思った。

今朝は六周目になってもMは走り続けている。息は荒く、足が痛んだが、地面を蹴る力は衰えない。だが、先を走る睦月と文月との差は百メートルに開いていた。しかも、まだ二キロメートルも残っている。走ったことのない未知の距離を考えると急に体が硬くなる。

「M、ファイト」

突然大きな声を掛けられ、尻を叩かれた。Mの横に、熱く躍動する弥生の裸身が並んだ。ピアニストが颯爽と二人を抜き去っていく。

「M、走りが軽そうに見えるわ。その調子よ、前の二人は必ず抜ける。頑張ってね」

スピードを落としてMと併走した弥生が大声で力付けた。

「サボるな」

耳元で叱声が響いた。追いついてきた極月が、力まかせに弥生の尻を打って二人を抜き去っていく。

「先に行って、私は大丈夫。弥生は一番になってね」

Mが荒い息づかいで弥生の横顔を見て言った。汗の光る上気した顔が大きくうなずき、切れ長の美しい目が優しく笑った。そのまま弥生はスピードを上げる。しなやかな脚が力強く地面を蹴り、極月とピアニストの裸身を追う。Mの目の前で優美な裸身が一際大きく見えた。トップから一周遅れたが、Mにはそれほどの落胆はない。たとえ今朝も最下位でも、今のペースだけを守ってゴールしたいと思った。弥生が言ったように走りも軽い。身体を鍛えることの楽しさが分かってきたような気がする。でも全身が痛み、息が切れて辛い。弥生の声援を思い出して歯を食いしばって走る。最後の一周を迎えるころには、先を走る睦月と文月との差が五十メートルにつまっていた。二人の走りが重く見える。ひょっとしたら抜けるかも知れないと思い、熱い希望が全身に沸き上がったとき、また尻を叩かれた。弥生だ、と思いすぐ前を見つめる。黙ってMを抜き去った弥生の後から二メートル

離れ、ピアニストが追う。二人が地面を蹴る規則正しいリズムが耳を打つ。ゴールのテラス前まで五十メートルある。ピアニストが弥生を抜くかどうか微妙なところだった。二週遅れのＭもスピードを上げた。力を振り絞り、必死にピアニストに追いすがりながら大声を出す。

「弥生っ、後ろは二メートル」

Ｍの声が聞こえたのか、弥生がスパートする。全身の筋肉が躍動し、長い脚のストライドが伸びる。引き締まった尻の割れ目からのぞく肛門栓が、走りに連れて朝日に光った。ゴール間近でピアニストが弥生と並んだ。美しい男女の裸身がもつれ合ってゴールに飛び込む。ピアニストの長い腕が弥生を抱いた。地面に崩れそうな裸身を抱いて支え、右手を持って高く掲げた。弥生が常勝のピアニストに初めて勝ったのだ。弥生の目に涙が浮かび、日に輝いた。倒れそうな裸身をピアニストに預け、両手をピアニストの首に回した。思い切ってピアニストに抱き付く弥生の高揚した顔に、Ｍは官能の煌めきを見た。信仰を越えた喜びが邪悪な思想に抱かれていた。追いすがっていったＭのスピードが落ちる。疲れと悲しさが全身を覆った。もう走りたくないと思うが、まだ一周残っていた。

「Ｍ、後一周だけよ。ファイト」

コーナーを回るＭの背に弥生の激励が飛んだ。心なしか艶めいた声に聞こえる。Ｍはたまらない寂しさを感じ、振り返らずに走った。気分を切り替えて前を走る睦月と文月に精神を集中する。

コーナーを回りきり、ゴールまで二百メートルの地点で、Ｍは文月の三メートル後ろに迫った。七メートル先に睦月がいる。二人とも走りのリズムが崩れ、脚が重そうだ。そのまま百メートルを追走して二人の様子をうかがう。絶対抜けきれるとの自信を持って、Ｍはラスト百メートルでスパートした。真っ正面にゴールを見据え、何も考えずに最後の力と気力を振り絞って地面を蹴る。見る間に文月を抜き去り、睦月に迫る。ゴール付近で思い思いの運動をしていた八人が集まり、大声で声援している。後ろを振り返った睦月の顔がすぐ目の前にあった。睦月の大きな目に驚きと恐怖を見たと思ったとき、小さな裸身がよろけた。接近して走るＭもバランスを崩し、二人でもつれ合って地面に倒れた。倒れた二人を文月が抜き去る。いち早く起き上がった睦月も走る。ゴール前十メートルの地面に、力尽きたＭの裸身だけが残った。凄いスピードで弥生が駆け寄ってきて、Ｍを助け起こす。

「Ｍ、だいじょうぶ。勝ったわ、Ｍの勝ちよ。二人も抜いたのよ」

耳元で弥生が興奮した声を上げた。Ｍは大きくうなずき、ゆっくり立ち上がった。全身

に満足感が満ちる。
「でも、またペケだったわ」
　自嘲した声で言って、弥生と並んで喘ぎながら最後の十メートルを走る。
「きっと睦月がわざと転んだのよ。明日は必ずMが勝つわ」
　すかさず弥生が励ました。明日という言葉がMの耳に新鮮に響いた。久方ぶりに希望の味が甦ってくるようだった。
「よし、朝飯にする。九時の作業には遅れるな」
　全員のゴールを待って修太が告げた。七時半だった。八時三十分までに洗面、水浴、用便、朝食を済ませ、また集合して水道復旧の作業に向かうのだ。七人の裸身が思い思いの方向に駆け出す。Mと弥生、極月、霜月の四人が広場に残った。
「最下位の罰を執行する。男は霜月、女はM。ウサギ飛びでトラックを一周よ。二人とも手を後ろに回しなさい」
　ひときわ寒い風が立つ中、三着でゴールした極月が冷たい声で命じた。
「俺は久しぶりだが、Mは毎日だな。課外授業は辛いぜ」
　おどけて言った霜月が後ろを向き、盛り上がった尻の上に両手を回す。極月が無言のまま後ろ手に手錠をかけた。くたくたになったMの裸身も後ろ手にされ、手錠で縛られてしまった。全身から急に力が失せていくのが分かる。毎朝のことだった。情けなさが身に滲みて寒い。
「おう寒い。早く片づけて飯を食おうぜ」
　元気な声で言った霜月が後ろ手に縛られた裸身を屈めた。豪快にウサギ飛びをして松林に向かう。股間で大きなペニスが揺れていた。
「弥生とMは、肛門栓を外す時間よ。尻を出しなさい」
　極月が命じた。二人にとって運動の後の一時間、午前八時三十分までが肛門栓の挿入を許される貴重な時間だった。最下位の罰で潰れる時間が本当に惜しいと、Mは嘆きたくなる。寒風の中でひざまづき、高く掲げた二人の尻から肛門栓が抜き取られる。二人の股間の地面に銀色の肛門栓が落ちた。体温と同化した肛門栓が野外の冷気に晒され、金属棒全体から白い湯気が立ち上っている。弥生が大事そうに二つの肛門栓を拾った。後ろ手に縛られたMの眉間が辛そうに寄せられる。弥生が両手に持っている金属棒は、二人の体内で二十三時間肛門を責め続けたものだ。それを再び肛門に挿入するために弥生は握っている。悲惨すぎた。自分の肛門栓を弥生に持たせておくこともやるせなくて恥ずかしい。Mはう

なだれて地面を見た。

「前を向きなさい」

極月の声で向き直ると、二人の股間のリングが二メートルの鎖で繋ぎ止められてしまう。

「弥生はMが最下位を脱出するまで付き合うことになるわね。恨むならMを恨みなさい。いつものように、私はログハウスで十分間待つ。それまでに戻れば手錠は外す。後ろ手では食事もできないでしょう。今日こそ、時間内に罰を終えるのよ。さあ、スタート」

大声で言った極月がMの尻を叩いた。二つの尻が飛び跳ねながら松林に向かった。Mは後ろ手錠の鎖を大きく鳴らして懸命にジャンプする。四キロメートルを走りきった両足の筋肉が悲鳴を上げ、急に便意が襲ってきた。罰の最中に垂れ流す恥辱を思い出して暗澹とした気持ちになる。罰が済むまで肛門栓を抜かないように、極月に頼めばよかったとさえ思う。懸命に便意をこらえ両足に力を込める。しかし、両足を揃えて飛び上がるのは苦痛だった。足がもつれ、股間のリングに繋いだ鎖が不規則に揺れた。もう我慢できない。隣りでMにペースを合わせ、平然と飛ぶ弥生の余裕が憎らしくなる。

「毎朝、辛い罰に付き合わせてごめんね」

喘ぐ声で横に並んだ弥生に声を掛けた。脂汗の浮き出た青白い顔を見た弥生が、すぐMの状態を察した。

「ダメッ、我慢するのよ。お尻を汚してウサギ飛びを続ければ、本当に肛門が爛れてしまうわ。歩くこともできなくなるって言ってあるでしょう」

冷たく言って弥生が前に出た。股間のリングを曳かれる恐怖で、Mの便意がいくらか薄らぐ。何とか松林に沿って跳び続け、コーナーを下るところまで来た。もうじき罰が終わるが、谷川から吹き付けてくる冷たい風が下腹をなぶった。流れの音が冷たく耳に響く。もう限界だった。Mはウサギ飛びをやめ、地面にしゃがみ込んでしまった。

「まだよ、ここでは駄目。走るわよ」

弥生が叫び、股間を繋いだ鎖を持って手元に引いた。激しくリングを引かれたMが、痛みに負けて立ち上がった。股間を突き出して無様に走る。弥生は草むらをかき分けて谷川に向かう。乱暴に鎖を曳いて、構わず流れの中に踏み入っていった。Mの両足を凍り付くほどの冷たさが襲った。足の間で急流が渦を巻いた。川幅が三メートルもない谷川の中央にMは曳き出された。横に弥生が並ぶ。二人は上流に向かって立った。水深は三十センチメートルほどしかない。

「さあ、いいわ。水洗トイレで用便の時間よ。ただし、お尻を水の中に入れてするの。肛

門の腫れがひくわ」

弥生が優しく言ってしゃがみ込む。Mも弥生に続いた。ウサギ飛びで熱くなった股間を冷たい流れが打った。すぐに冷たさが痛みに代わる。容赦なく流れが股間を襲い、尻の割れ目を下る。とても排便するどころではなかった。

「弥生、もういいわ。冷たすぎる」

全身に鳥肌を立てたMが、力無く弥生に訴えた。

「ダメッ、私が用便したいの。Mも付き合って」

震えるMの肩を左手で抱き、穏やかな声で弥生が答えた。寒さの中で弥生の優しさが身に滲みる。Mの全身に温かさが伝わっていく。負けてなるかと思う。涙がこぼれ落ちそうになるのを耐えて、下腹に力を入れた。全身でいきむと、水中で開ききった肛門を急流がなぶっていった。爽快だった。二人一緒に用便を済ませ、立ち上がった弥生がポツンと言った。

「下流で睦月が口をすすいでいたかも知れない」

股間から水を滴らせながら、二人して大声で笑った。笑い声が林に吸い込まれ、谷川を流れ下った。久しぶりの笑いだった。

「同じものを食べ、同じように生活しているのだから害はないわ」

やっと元気の出たMが明るい声で言ってから川を上がる。Mの首に巻いたスカーフを弥生が外し、Mの股間を拭いた。

「弥生、お願い。今日はあなたのお尻を先に舐めさせてちょうだい。いつも甘えているようで気が引けるの。マラソンで二人を抜いたお祝いにしてよ」

後ろ手錠のMが歯がゆそうに頼んだ。

「いいのよ。私の方が体力があるだけのことよ。順番など気にしなくていいわ」

素っ気なく答えた弥生がMに尻を掲げさせた。温かい弥生の舌が尻の割れ目に入り込んできた。丁寧に肛門を舐め、舌を這わせる。腫れた粘膜が揉みほぐされていくのがよく分かる。弥生のお陰で肛門が爛れずに済んでいるのだ。こらえていた涙が溢れ、地面に落ちた。

「Mのお尻は二週間前と比べると、まるで別人のようよ。すっかり贅肉が落ちて引き締まってきたわ。体重も十キロは落ちていると思う」

涙に気付かない振りをして、弥生がそしらぬ声で言った。確かに体重が落ち、身体が引き締まったとMも思う。もう少し筋肉がつけば見違えるようになると、自分でも感じてい

た。弥生の言葉がうれしくて、Mはまた涙を流した。過酷な生活にも取り柄はあるのだ。

ウサギ飛びの罰を終えて二人で食堂に入っていったが誰もいない。罰に三十分もかかれば当然のことだった。それでも二人の裸身を赤々と燃えるストーブが迎えた。凍えきった裸身が生き返るようだ。ガスレンジの上に大きな鍋がかけられ、まだ白い湯気が上がっている。

「さあ、私たちも朝食にしましょう」

弥生が楽しそうに言って、部屋の隅に置いた箱から食品パックを二つ取り出す。

米軍の野戦食Ｃレーションだった。温めるだけでそのまま食べられた。いかにも合理的だが、味気ない。だが調理が苦手のシュータのメンバーにはちょうど良い食事なのだろう。気難しいピアニストも何も言わなかった。食べるのも皆バラバラだ。特に規律はない。集団で行うことと、個人で行うことが明確に区別されている。その意味では自主性が尊重された現代的な組織だった。弥生がガスレンジの前に行き、鍋を火にかける。鎖で繋がれたMも後ろ手錠のまま横に並んで鍋の中を見つめた。盛んに立ち上る湯気が乾燥した素肌に心地よい。湯が沸騰するのを待ってＣレーションを鍋に入れ、ストーブの前の椅子に並んで座った。

「椅子に座ることが、こんなにうれしいなんて思っても見なかったわね」

椅子の上で尻をもぞもぞさせているMに、弥生が楽しそうに声を掛けた。肛門栓を許される朝食の時間はありがたかった。夜食は床に正座して食べなければならない。それに夜食の後のミーティングでは、たっぷり二時間の反省のポーズが待っているのだ。

「これで手が自由になればと、毎朝思うわ。弥生に食べさせてもらうのは心苦しい」

後ろ手の手錠を鳴らしてMが答え、悔しそうに唇を噛んだ。

「私たちが遅いのだから仕方ないわ。でも、明日からは大丈夫。最下位の罰を受けなくて済む」

弥生が口元に微笑を浮かべて慰めるように言った。Mの目が明るく輝きだす。文月と睦月を追い抜いたときの感動が甦った。明日はきっと勝ってみせると心に誓う。

「弥生のお陰よ。もし私が一人きりだったらどうなるの。今だって朝食は食べられないわ」

「朝食を抜くだけの話よ。Mには私がついているのだから、暗い方に考えてはだめ。さあ、もうできたわ。食べましょう」

簡潔に言って弥生が立ち上がった。Mも続いて立ち上がる。一人ではとても耐えられな

かったと思い知った。一方的にMを庇護する弥生が保護者のように見える。だが弥生の態度に尊大な素振りは露ほどもない。保護しているなどという気負いはどこにもないのだ。Mとは確かに違っていた。友愛という言葉がまた脳裏を掠めた。これまで知ることのなかった感情に戸惑いを感じ、そっと弥生の横顔を見た。美しい横顔だった。一切を信じ切っているような穏やかな表情をしていた。

ストーブの前で二人は向かい合って座った。弥生がMの口に食物を入れ、次に自分の口に運ぶ。Mは幼児になったような気がしてくる。弥生が味のきついシチューをスプーンでMの口に入れた。口の端を伝った汁を手を伸ばして拭ってくれた弥生の口元に米粒がついている。細長い外米が妙に滑稽に見えた。Mは手を伸ばして取ってやりたい。もどかしく手錠を鳴らして弥生に告げると、米粒を手に取ってそのまま口に運んだ。Mが吹きだし、弥生が笑う。二人きりの楽しい朝食の時間が流れた。

山岳アジトにこもってから、もう一か月が過ぎた。

アジトを囲む山々にも春の気配が感じられるようになってきた。木々の冬芽が大きく膨らみ、日溜まりにあるハンノキの蕾が今にも弾けそうに見える。底冷えのする未明に凍り付いた水も、力強い日射しを浴びるとすぐに融けてしまった。

規律正しい生活の中にぽっかりと浮かんだ雲のように、ほのぼのとした朝食時間が終わる八時三十分になると、決まって明るい広間に極月が入って来る。つかの間の自由を楽しんだMと弥生も、水道復旧の作業に出掛けるのだ。苦しい作業が午後四時まで続く。簡易水道の取水口をせき止めた土砂を取り除く作業は、もう一か月も続いていた。

「さあ、用意をしなさい」

正座して極月を待ち受けていた二人に号令が掛かった。股間のリングを鎖で繋がれた二つの裸身がひざまづき、高々と尻を掲げた。床に置いた肛門栓を極月が二人の体内に挿入する。一か月が経っても辛い時間だった。自分で洗い清めた金属棒が肛門を割る冷たさと切なさに慣れることはない。肛門栓が突き出たMの尻を極月が平手で打った。高い音が広間に響く。

「Mは一か月で見違えるようになったね。尻が高く上がり、ウエストが引き締まった。理想的な体型になったわ。憎らしいくらいよ」

しみじみとした声で極月が言った。確かに二つ並んだ尻に遜色はない。どちらかといえ

ばMの尻の方が丸みを帯び、割れ目も深い。なまめかしさを漂わせた成熟した尻だ。尻から続く太股も悩ましく見えた。まだ十分に筋肉を鍛え上げていないため、弥生に比べると全体のラインがふっくらしている。二人とも一様に足が長い。

「立ちなさい」

極月に命じられて、立ち上がった二人が正面を向いた。並んだ裸身が極月を圧倒する。二人の背は極月より五センチメートルほどしか高くはないが、豊かな胸が目の前に迫ってくるようだ。形のよい乳房の先で四つの乳首が誇らしそうに上を向いている。目を落とすと、高く切れ上がった二つの股間で漆黒の陰毛が燃え上がっている。陰毛の間からぶら下がった金色のリングさえ誇らしく見える。極月は二人のリングを繋いだ鎖を外した。

「着衣を許します。早く着なさい」

極月の声で二人の顔にうれしそうな笑みが浮かんだ。寒風に吹きさらされる屋外の作業では、二人にも着衣が許されていた。Mと弥生は手を取り合って窓の上の鉄棒に吊したトレーナーを取りに走る。大柄な裸身が二つ、寒々とした広間に躍った。軽やかになったMの動きが、ひときわ新鮮に極月の目を打つ。滞在一か月を記念した今朝の六キロメートルのマラソンで、Mは修太を抜き去り極月に迫ったのだ。もっとも極月との差は百メートルはあった。それにしても見事な上達振りだと極月は思う。一か月前の初マラソンで三百メートルしか走り続けられなかった無様な姿が嘘のようだ。すっきりした美しい裸身が精進の跡を物語っている。

厚手の黒いトレーナーの上下を着た二人が揃って後ろを向き、極月に尻を差し出す。トレーナーの尻の部分に空けた穴から肛門栓の先端がのぞいている。股間のリングに代わって、今度は二つの肛門栓を鎖で繋がれてしまった。だが、二人の顔には落胆も屈辱感も浮かばない。裸体を強いる過酷な処遇が、着衣を許された作業をかえって楽しいものに感じさせていた。

「弥生、今日で懲罰期間も半分終わるわ。この鍵を渡すから、後は自分で管理しなさい。虜囚の見張りもこれまでどおり、弥生にまかせる。さっき全員集会で決定したのよ」

振り向いた弥生に小さな銀色の鍵が手渡された。肛門栓と鎖、手錠に共通する万能の鍵だ。鍵を手に持ったまま、あっけにとられた顔で極月を見つめた弥生の表情が輝き出す。喜びの涙が頬を伝った。もう極月に拘束されることはない。弥生が自由意志で、規律に従って自らを拘束することになる。自主的な反省が始まるのだ。横に並んだMの目からも涙が落ちた。無理やり強いられてきた屈辱と恥辱がこれで無くなる。同じ恥ずかしい格好を

するのでも、自ら進んでするのと強制されるのでは行って帰るほど違う。うれしさで目の前が真っ白になった。

「私と文月は明日、山を下りることになった。代わりに皐月と水無月が来るわ。総務担当の睦月が司法担当も兼ねると言ったけど、私は断った。借りを作るのは嫌だし、何よりも弥生を信じようと思ったのよ。一か月も続いた懲罰に弥生は見事に耐えたし、Mの指導振りも見事で言うことはない。仲間の中で本当に信頼できるのは弥生だと思った。残りの一か月は自主的に反省させるべきだと提案したのよ。睦月の他は全員が賛成したわ」

「ありがとう」

泣き声で言った弥生の目から、また涙が滴り落ちた。Mは啜り泣く弥生の肩を抱いて一緒に涙を流した。

８　新しい提案

簡易水道の取水口をせき止めた土砂を取り除く作業が続いていた。九人の男女が砂礫で埋まった沢に一列になって並んでいる。手に持てる岩とバケツに入れた土砂を手渡しで運び出す単純な作業だ。工学部のエリート学生たちにも、さすがにそれ以外の方法は考えられなかった。土木機械を運び込むわけにはいかない。スコップとバケツだけに頼る手作業が延々と続いた。最後に残った大きな岩を得意の爆破技術で破砕することだけが楽しみの作業だった。二時間ごとの見張りの交替で、頻繁に二人がいなくなる。極月と文月が山を下りた午後は特に作業が停滞した。昼食を取らないため、寒さの中で気持ちも荒む。

「明日からはオシショウにも作業に出てもらおう」

吐き出すようにピアニストが言ってスコップを投げ出した。

「七十五歳では無理だよ」

修太が砂の入ったバケツを持ち上げ、ピアニストを見上げて応えた。

「無理なものか。毎日寝てばかりいるよりよっぽどいい」

「オシショウは瞑想して、神ながらの道のことを考えているんだ。ピアニストの言い方は師に対して失礼だと思う」

「行動しない思想などはゴミ箱に捨てればいい。僕たちに必要なのは行動だ。社会変革のための行動なんだ。もう一か月が過ぎた。各自の戦闘力も上がっている。土木工事の真似事で満足している場合ではない。何をなすべきか、決断するときが来ているんだ。資金も心許なくなっている。後一か月は持たないだろう」

苛立つピアニストを弥生が心配そうに見つめている。修太の横に並んでいた睦月が頬を膨らませて抗議の声を上げる。

「シュータはオシショウの教えを実行するための組織のはずよ。主席は修太だわ。たとえピアニストでも、オシショウをないがしろにはさせない。資金を提供しているからといって、組織を私することは許せないわ」

必死に言い募る睦月をピアニストが突き飛ばした。

「今日の作業は終わりだ。ログハウスに戻って今後の方針を協議しよう」

スコップを拾い上げたピアニストが肩を怒らせて工事現場を後にする。弥生が真っ先にピアニストを追った。鎖で繋がれたＭも弥生に従って歩かざるを得ない。内部から組織が

崩れていくにおいがした。追い詰められた者の定めだった。
「よしっ、決着をつけよう」
背後で修太の声が響き、土砂の入ったバケツを乱暴に地面に捨てた。全員がログハウスに向かって歩き出す。

松林から出た途端に甲高いヒヨドリの声が聞こえた。鳴き声は連続して三回、大きな音で響き渡った。不自然な鳴き声に全員の足が止まり、戦慄する。忘れていた警報音が耳に甦った。屋根裏部屋の見張りが初めて鳴らす警報だった。まだ松林にいた霜月が急いで肩に背負っていたザックを下ろす。五丁の拳銃を取り出して男たちに配った。それぞれが身近な松の幹に身体を寄せ、拳銃の撃鉄を起こす。Ｍと弥生はピアニストと一緒にログハウスの陰に走り込み、壁の隅から広場を見渡した。谷川の向こうから低いエンジン音が聞こえ、真っ黒なジープが姿を現す。ちょうど山の端に入ろうとする日の光を浴びて、ジープはひときわ獰猛に見えた。まるで冬枯れた草原に出現した黒豹のようだ。ジープはゆっくりと広場の斜面を登り、ログハウス正面のテラスから十メートルのところで停車した。時刻は午後三時を回ったところだ。街に向かった極月と文月の乗るパジェロの出発予定時刻は二時半だった。容易にすれ違いができない山道の記憶が全員に不安をもたらす。
松林の梢を渡る風に不気味なエンジン音が混ざる。直列六気筒４０００ｃｃのエンジンが野太い音を立て続け、息を潜めて見守る男女の不安を煽った。突然ジープの後部ドアが大きく開き、二つの裸身がもつれるように転げ落ちた。続いて白いコートを着た女が颯爽とドアから降り立ち、地面に転がった二人の尻を蹴った。よろける足で立ち上がった裸身に全員が目を見張った。毎朝見慣れた極月のしなやかな裸身と、文月の肉付きの悪い痩せた裸身が並んでいる。どちらも黒い縄で後ろ手に縛られていた。口に噛まされた木の枝の猿轡が凄惨な雰囲気を際だたせている。霜月が銃口を上げて白いコートの女に狙いを付けるが、二人の裸身が照準を妨げてしまう。制止する修太がいなくても、とても発砲できる状態ではなかった。静けさの中に、高い女の声が響き渡る。
「ピアニスト、出てらっしゃい。私はチハル。財産の横取りは許さないよ」
弥生の横にいたピアニストが苦笑した。ピアニストは大きく両手を広げ、ログハウスの陰から広場に踏み出す。
「ようこそチハル。まずジープの運転手に、エンジンを切るように命じてくれ」
チハルがにっこり笑い、高い運転席に手を上げて合図した。エンジン音がやみ、静寂が

戻った。急速に不安感が薄れていく。逆光になった運転席のドアが開き、ダークスーツに身を固めた長身の男が地上に降り立つ。襟元の白いワイシャツと赤いネクタイがやけに目立った。山の中には似合わない服装だ。ジープにも似合いはしない。どう見てもベンツで市街地を走る格好だった。

「飛鳥か」

ピアニストがつぶやいてジープに近付いていく。思わずMと弥生もピアニストの後に続いた。コスモス事業団の本部秘書だった飛鳥が、理事長の個人秘書だったチハルとともに現れたのだ。コスモス事業団はゲーム機を作る収益部門だけを残して解散した。四年前のことだ。もはや本部は無いし理事長も亡い。過去の亡霊が現れたようにMには見えた。不吉な予感が喉元に込み上げてくる。

チハルが極月と文月の腰に繋いだ縄を乱暴に引いた。二人がヨチヨチと切なそうに尻を振って歩き出す。腰縄から股間に下りた縄目が痛々しい。二条の縄が性器を挟んで陰部に食い込んでいる。歩く度に陰部を激痛が襲う残酷な縛りだった。二人とも剥き出しの尻を後ろに突きだし、無様に歩くしかない。両の乳房も縦横に緊縛され、醜く歪んで縄目からはみ出していた。極月は必死に屈辱に耐えようとして、猿轡の代わりに噛まされた木の枝をきつく噛みしめている。文月の目からは涙がこぼれ落ちた。チハルの暴力志向は一向に変わっていない。鍛えられたシュータのメンバーを二人も、手もなく捻ってしまうパワーには舌を巻かざるを得ない。小走りに斜面を下りてきた修太たちが、拳銃をかざしてチハルと飛鳥を取り囲んだ。ピアニストの横に立った修太が緊張して掠れ声を出す。

「飛鳥もチハルもシュータのことは知っているはずだ。二人ともこのまま帰すわけにいかない。まず極月と文月を解放してもらう」

「ガキは黙ってな。私はピアニストに話があって来たんだ。五時までに私がドーム館に帰らなければ、県警のヘリコプターを呼ぶようにコンピューターに指示してある。そんな玩具で警察と銃撃戦をしたくなかったら、おとなしくしているんだね」

鋭い声で応えてから、チハルがピアニストの背後に目をやり、頓狂な声を出した。

「あれ、Mがいるじゃないか。いい年をしてテロリストの仲間になるとは思わなかったよ。どこにでも顔を出すんだね。光男の火葬の晩にいなくなってから一か月になる。Mに捨てられたと思って、祐子はイギリスに行ってしまったよ。本当にかわいそうだ」

「Mはゲストさ。お望みなら、君たちもゲストに迎えてやるよ」

ピアニストが、いつもの調子で馬鹿にしたように言った。

「こんな所でキャンプをするほど暇じゃない。私は明日アメリカに発つ。コスモス・アメリカで仕事をするんだ。理事長さんの隠し財産を確認するよう、飛鳥が無理に頼むから来たんだ。この臭い裸だって、お情けで連れ戻してやった。街に下りるときは風呂ぐらい使えよ。垢が溜まって臭くてならない。警察の検問にでも遭ったら、真っ先に目を付けられるぞ。人の親切も知らないでいっぱしの抵抗をするからこの始末だ。石鹸を使って臭い股を良く洗ったがいい」

大声でまくし立てるチハルに全員が一言もない。極月と文月の裸身が恥ずかしさで真っ赤に染まった。確かに水浴だけで済ましていた身体の異臭は、慣れてしまった者に分かるはずがなかった。医師でありながら臭気に気付かなかったピアニストの頬も赤く染まる。全員が手を上げて脇の下に鼻を当てた。チハルが大声で笑う。

「こんな寒い所にいたんじゃ分かりはしない。原始人が車に乗って、珍しがってヒーターを入れてみろ。暖まった狭い車内だ、すぐムンムンに臭い立つこと請け合いだぜ」

楽しそうにシュータの隙を説明したチハルが、寒そうに肩を震わせた。横に並んだ飛鳥を見上げて、さり気なく目配せをする。飛鳥が小さくうなずくのを見てからまたピアニストに話し掛ける。

「私はテロリストにも、こんな山の中のログハウスにも興味はない。でも、理事長さんの遺産は私と祐子が相続したんだ。無断で勝手にさせない。全権を委任して、飛鳥をここに残す。よく話し合うといい」

宣言したチハルが飛鳥を振り返った。わずかに肩をすくめてから、照れくさそうに顔を見上げる。

「これでいいかい。飛鳥、私はもういくよ。あんたのことはアメリカに行っても忘れない」

初めて聞く、しんみりとしたチハルの声だった。チハルが男にも関心を持ってきたと、祐子がドーム館で言った言葉をMは思い出した。初めての男と出会ったチハルが、整理し切れぬ思いを抱いて別れようとしているのだ。一切を振り捨てるように首を振って、チハルがピアニストに視線を戻した。これまでに見せたこともない、厳しい顔付きになって叫ぶ。

「最後に言っておくが、飛鳥には定期的にアメリカへ連絡させることにしている。連絡が途絶えたら警察が来ると思ってくれ」

嘘に違いないとMは思った。別れる男を気遣うチハルの自負心がかわいかった。男を振

り捨てて新天地に向かう希望もまぶしかった。みんな大人になっていくのだ。
「こいつには待避所まで付き合ってもらうよ。そこからパジェロに乗せて帰す」
極月の腰に繋いだ縄を引いて、チハルが得意そうな声で言った。厳しく緊縛された極月の裸身が大きくよろめく。解放された文月が尻を振って睦月の方に向かった。極月を曳き立ててジープの助手席のドアを開けたチハルが飛鳥を振り返る。
「飛鳥、忘れ物だよ」
チハルの声を聞いた飛鳥が、一瞬迷うように正面のログハウスを見つめた。やがて肩を落としてジープに歩み寄り、高い車内から大型のアタッシュケースを二つ取り出す。
「さあ、車まで送ってやるよ」
極月に繋いだ縄を乱暴に引いたチハルが、裸身をジープのステップに追いやった。後ろ手に縛られた不安定な裸身は頭からシートに倒れ込んでしまう。素知らぬ顔でチハルがドアを閉めて運転席に回る。後ろ姿をMが追った。鎖で繋がれた弥生もMに続く。運転席のドアを開けたチハルに、背後から声を掛ける。
「祐子がイギリスに行ったのは、本当のことなの」
チハルが眉を寄せてMを振り向く。間近に見るチハルに女の匂いが漂う。
「しつこい女だね。本当のことさ。オックスフォードで二年間、毛織物の勉強をする。テロリストの仲間になったMとは、もう道は交差しない」
「私は仲間ではないわ」
大声に驚いたチハルが改めてMと弥生を見つめた。
「ふーん、仲間ではなく、切っても切れない仲か。相変わらず趣味が悪い」
言い捨てたチハルが高々と片足を上げ、二人を繋いで垂れ下がっている鎖の弧を思い切り踏みつけた。
「ヒッー」
肛門を激痛が襲い、Mと弥生の口から同時に悲鳴が上がった。二つの大柄な身体がしゃがみ込んでしまう。トレーナーの尻に空いた穴からは、銀色に光る肛門栓が三センチメートルも飛び出していた。
「まったく悪趣味だよ。Mは本当のマゾヒストかも知れない」
しゃがみ込んで涙を流すMを嘲笑ったチハルがジープに飛び乗る。野太いエンジン音が山間に満ち、力強くジープが発進した。
「あのままチハルを行かせていいのか。ピアニストの責任だぞ」

遠ざかるエンジン音を追って、修太の声が空しく響き渡った。ピアニストは答えようともせず、修太を無視して飛鳥の前に進んだ。

「飛鳥、理事長の遺産の管理で来たはずはないな。利口なあんたのことだ。何が目的だ」

直截に尋ねたピアニストの言葉に笑顔を浮かべ、初めて飛鳥が口を開く。

「久しぶりにピアニストと共同の事業がしたくなったのさ。アジトの中に入れてくれ。私はチハルと違って臭くても気にならない」

ピアニストの頬がぱっと赤く染まった。しかし、怒りをこらえて涼しい顔を装う。

「今夜は飛鳥のために風呂をたてよう。しばらく裸の付き合いをしていけばいい」

「それはいいな。一晩なら付き合おう。ピアニストはずいぶん逞しい身体になった。裸を見るのが楽しみだよ」

飛鳥が言い返し、二人で大声で笑った。並んでログハウスに向かって歩き出す。日が陰った広場に不吉な風が渡っていく。

「邪悪な者よ、去れっ」

突然広場に大声が轟いた。ログハウスのテラスに黒い柔道着を着たオシショウが仁王立ちしている。

「去れっ」

再び声が響いた。シュータのメンバーが騒然とする。修太がテラスの前に走り、オシショウを守るように飛鳥とピアニストの前に立ちふさがる。右手の拳銃を握り締めて二人を見据えた。

「オシショウの言葉が聞こえたはずだ。飛鳥をログハウスに入れるわけにいかない。帰ってくれ」

飛鳥は修太を見ようともせず、テラスのオシショウに声を掛ける。

「ただの商談ですよ。行商人が来たと思えばいい。あなたとピアニストに商売の話がある」

意表を突いた飛鳥の言葉にオシショウが戸惑ったようだ。真っ白な髪と口を覆った長い髭が日に輝いて揺れた。

「とても行商人には見えぬ立派な風体だが、何を売りに来たのだ」

一息おいてから発せられたオシショウの声が、広場に満ちた緊張を解きほぐす。飛鳥の口に微笑が浮かんだ。

「世界のトップ・ビジネスマンの格好はこんなものですよ。商っているのは希望です」

「ほう、苦いか甘いか、とても食えた代物でないかも知れぬ。だが希望という商品を見るのもおもしろい。見せてもらおう」

オシショウの声で動揺した修太が身体を固くする。ピアニストが右手で修太を押し退け、飛鳥と並んでログハウスへ向かう。二人の後ろに弥生が続いた。Mも黙って従う。新しい展開についていけぬ修太たちが広場に残されてしまった。寒風に吹きさらされてたたずむ七人を、弥生が振り返った。

「さあ、新しいステージが始まるのよ」

凛とした声が七人の耳を打った。一様に肩を落として、若者の群が歩き始める。確かな滅びの匂いがした。Mは弥生の高揚した気分が伝染しないように、鎖をいっぱいに延ばして歩み続ける。肛門をなぶる鈍い痛みが冷静さを保たせることを願った。確かに新しいステージが開始される予感がした。しかし、邪悪な思想が大きく羽を広げ、空高く舞い上がる準備を始めたに過ぎない気もする。オシショウの鋭敏な神経は、その事実を見抜いたうえで野合する事を選んだのだ。古いものに愛着を寄せる修太たちを、Mはふと愛おしく思った。

ピアニストと飛鳥は並んで食堂に入っていった。弥生はMを従えてまっすぐ広間の窓辺へ向かう。

「少し早いけど、反省の時間にするわ。M、裸になるのよ」

広間の鉄棒の下に立った弥生が、極月に渡された鍵で二人の肛門栓を繋いだ鎖を外した。素早くトレーナーの上下を脱いで素っ裸になった弥生が、アタッシュケースから出した二本の手錠を持って促すようにMを見た。まだトレーナーを着たままでいるMの表情が曇る。

「食堂でなく、ここで反省するわけにはいかないの」

「何を言っているの。反省の時間だから食堂に行けるんでしょう。飛鳥という人の提案をぜひ聞きたいの。私はシュータの広報担当よ」

Mは黙ってうなずいてトレーナーを脱いだ。飛鳥に尻を掲げた裸身を見られたくないとは言い出せなかった。拘束具の鍵を預けられてから弥生は変わったとMは思う。信仰への自信に加え、組織の一員としての責任感がより強くなった。それもピアニストに偏っている。もはやピアニストを補佐する者は修太ではなく自分だと自負しているようだ。かろうじて懲罰を受けている負い目が露骨な行動を控えさせているにすぎなかった。

Mの両手首で手錠が鳴った。もう一つの手錠を受け取って弥生の両手を拘束する。再び

二つの肛門栓を鎖で繋ぎ、弥生を先頭に食堂に向かった。奥のストーブを囲んで、飛鳥を真ん中にしてピアニストと修太が座っている。三人から少し離れ、赤々と燃えるストーブを背にした席にオシショウが座っていた。Mが後ろ手にドアを閉めた。冷え切った裸身を温かな空気が心地よく包む。オシショウを除く三人が目を上げ、入ってきた二人を見つめた。飛鳥の視線がMの全身を舐める。

「すごいね、M。四年前より引き締まった魅力的な身体だ。横のお嬢さんにも負けていない。山の中まで来たかいがあったよ」

飛鳥の感動の声を無視して二人はドアの横の壁に向かって並んだ。背中に張り付く視線を痛いほど意識しながら、Mは足を上げて手錠をまたいだ。大きく拡がった尻の割れ目に飛鳥の視線が食い込んでくるようで切ない。尻の下に手錠で繋がれた両手を回して正座し、反省のポーズを取った。二つの裸の尻が男たちに向かって並んだ。飛鳥の口から声にならない溜息が洩れた。

「目の保養に来たようだよ。Mの尻は凄い。すべてが丸出しだ。股が開ききらないようにリングで止めてあるのがユニークだね」

横に並んだ弥生が震える尻にそっと素肌を擦りつける。怒りを耐えよと伝えてくる。Mは裸身を赤く染めて飛鳥の言葉に耐えた。

「二人は自主的に懲罰を受けているだけだ。僕たちの規律は性的に動揺するほど甘くない。商談に入ってくれ」

ピアニストの突き放した声が部屋に響いた。弥生の緊張が緩む。ピアニストの声の一つ一つに弥生の身体は反応するのだ。

「二十億円稼がないか」

飛鳥が無造作に言葉を落とした。部屋にいる全員が、一瞬意味が分からずあっけにとられた。日常生活に縁のない数字だった。金の単位に実感がわかない。オシショウだけがつむっていた目を大きく開いた。両眼が鋭く輝いている。大きく息を吸って飛鳥が言葉を続けた。

「個人の生活には縁のない金だが組織には必要な額だ。特に非常事態に見舞われた場合は何よりの武器になる。今後の希望に繋がるはずだ」

ピアニストがあきれきった顔で飛鳥の横顔を見た。しばらく間を置いてから失望の声が口を突く。

「二十億円が希望という商品なのか。話は分からないではない。だが、実現性のない夢を

見ている暇などない。万一実現性があったとしても、二十億は金融機関のコンピューターのディスプレーに並んだ十桁の数字だ。実際には、どこにもそんな現金はない。非常事態にある組織が、画面の数字を食うわけにいかない」

「その現金があるんだ」

飛鳥の大声が食堂に満ちた。喉に渇きが込み上げてくるような、乾ききった沈黙が部屋を占めた。反応に満足した飛鳥が、声を落として再び話し始める。

「三月十日から五日間、市の競艇場で世界選手権レースが開催される。十年がかりで市が誘致したビッグレースだ。優勝戦の行われる最終日の売り上げは二十億円にもなる。全部現金だ。二十億の現金は確かにある。それもいわば泡銭だ。我々が有効に使って悪いことはない」

一瞬Mは耳を疑った。続いて怒りが全身に込み上げる。掲げた尻がブルブルと震えた。弥生のことを考える余裕もない。たちまち怒りが口に溢れる。

「テロリストに飽きたらず、強盗にまで落ちるつもり。最低な宗教があったもんだわ。社会変革が聞いてあきれる」

Mの怒声が部屋に満ちると同時に、ドアが開いた。冷たい風が吹き込み、白い裸身が食堂に入ってきた。ストーブの前に立った極月が怒りに全身を震わせる。チハルに緊縛された縄目の痕が痛々しい。

「この男の処罰を提議します。あの女に開放されて、やっと戻ってきたばかりなのに、まさか強盗の話を聞くとは思わなかった。この男と女が仲間にした仕打ちを、私と文月の身体に残る縄目の痕で思い出して欲しい」

怒りを抑えて弾劾する極月を、飛鳥が立ち上がって制した。百八十センチメートルを超える長身が全員を見下ろす。

「チハルが行った暴力は私が詫びる。彼女は忙しすぎたのだ。私だって相当の覚悟をして来ている。だがチハルが同行しなければ、私の提案を聞いてもらうことはできなかっただろう。私も手ぶらではない。事前に受け取ってもらいたい品がある」

胸を張って言った飛鳥が、床に置いてあった大型のアタッシュケースの一つをテーブルに上げた。無造作に錠をスライドさせてケースを開いた。型抜きしたスポンジに埋まった六丁の拳銃が黒く輝いている。ケースを見下ろしていた極月の目が大きく見開かれた。凶々しい暴力の予感に裸身が鳥肌立つ。飛鳥が拳銃を取り上げてピアニストと修太に手渡した。

「米軍制式のベレッタＭ９２Ｆだ。９ミリ口径で装弾数は十五発。連続して発射できる。君たちの改造拳銃とは戦闘力が違う。もう一つのケースには弾丸千発とマガジン、フォルスターが入っている。すべてを進呈しよう。いわば結納金のようなものだ。これだけの武器を提供するんだ。私も一蓮托生であることを理解してもらいたい」

醜悪なプロポーズの様子を、Ｍは少し開いた股の間から見た。ピアニストが拳銃を握って重さを確かめている。ベレッタで狙いを付けている修太の目が輝いている。たたずんでいる極月の裸身の横に、じっと腕を組んで目をつむっているオシショウの姿が見えた。

「飛鳥、コスモスの本部秘書だったあんたが、なぜ武器商人になって強盗を勧めに来たんだ」

握った拳銃から目を離さずに、さり気なくピアニストが尋ねた。

「ご承知のとおり、社会を変革するはずだったコスモス事業団は解散した。ただのゲーム機屋になってしまったコスモスに私の能力を生かす場所はない。売り上げを伸ばすことだけに能力を使う毎日に耐えられなくなったのだ。私のプライドが許さない。有り余る能力とコンピューターを駆使して、不可能そのものに挑戦するシミュレーションを四年間考え続けた。今回の計画が一番スリリングで確実性がある。だが、残念ながら私には戦力がない。これも企画倒れで終わるかと諦めかけていたとき、追い詰められた組織が身近にいたというわけだ。私は金など要らない。一億円ももらえばいい。自分の能力が生きたことを実感できればそれでいいんだ。だから、あくまでも実行の責任はシュータに負ってもらう。私は陰に隠れた黒子だ。すでに指名手配の身になったシュータにとっては別に問題はないはずだ。すべてが終わったら私はアメリカにでも行くよ」

股間から様子をのぞき込むＭは、きな臭いにおいを嗅いだ。飛鳥は責任のすべてをシュータに押し付け、一億円だけをもらうと言う。虫のいい話だった。六丁の凶悪な武器の存在だけが事実で、他はすべて作り話に思われた。しかし、チハルのいるアメリカに行きたいという話は、本音かも知れない。天窓から落ちる光が弱くなり、夕暮れが近付いていた。熱気の満ちた食堂に寒さが染み込んできた。

「飛鳥、今夜は泊まりだな。風呂でもたてよう」

黙ってベレッタをいじっていたピアニストが自分に言い聞かすように言った。修太と極月が顔を上げてオシショウを見つめる。二人の縋り付く視線を浴び、オシショウが目を開けて腕組みを解いた。

「確かに極月は臭う。風呂は必要だ」

素知らぬ顔で言ってオシショウが立ち上がった。ドアを開け放して廊下へ出る。極月の裸身が恥ずかしさで赤く染まった。

全員が一か月振りに風呂に入った。谷川から汲み上げてきた水を沸かした貴重な風呂だ。Mと弥生の入る順番は最後だった。小さなステンレスの湯舟の湯は膝のあたりまでに減り、濁ってもいた。窮屈な思いをして二人一緒に沈み込むと、やっと湯が胸まで上がった。それでも温い湯が全身をゆっくり暖めてくれ、生き返る心地がした。

「肛門栓を抜いてはだめかしら。せっかく、お湯で石鹸が使えるのだから清潔にしたいわ」

身体の芯まで温まったところで、Mが弥生に甘えた。

「そうね、違反だけれど、目をつむりましょう」

明るい声で答えた弥生が立ち上がる。洗い場で四つんばいになったMの尻から肛門栓が抜かれた。続いて弥生の栓をMが外した。開放感が全身に拡がり涙が出そうになる。十分に石鹸を泡立て、お互いの裸身を洗い合った。うれしいくすぐったさで二人とも笑う。懐かしい時が流れ、外は深々と冷えていった。

「弥生も強盗には反対でしょう」

再び湯舟に並んで浸かり、お互いの肛門に手を伸ばしてマッサージを続けながらMが尋ねた。答えが怖かったが尋ねないわけにいかなかった。Mの肛門を撫でる指先が止まった。沈黙が流れた。やがて力強く弥生の指が動き始め、リングで封鎖された陰門へと指が伸びた。静かな声が帰ってくる。

「分からないわ。私たちには滅びしか残されていない。どう滅びるかだけが問われているの。惜しまれるだけの滅びが迎えられればそれでいい。そのために資金がいるのなら、反対はしないと思う。まず私自身を鍛え上げる。そして組織を鍛え上げる。社会はその後になるわ。信じる道に必要とされれば、私はすべてを投げ出す」

また殉教者の声を聞いたとMは思った。耳を覆いたくなる。これほど近しく感じられる弥生がその一点で遠のいていく。だが、引き締まった裸身はMの素肌と触れ合い、指は陰部を這っているのだ。どちらが真実なのかとMは惑う。頬を涙が伝った。弥生の股間に伸ばした指が、すっと肛門に吸い込まれていった。終着駅だと思っていた山岳アジトから、もう少しだけ道が延長される予感がした。Mにとっても、弥生にとっても、踏み外したくないひとすじの道だった。

9　強盗団

二月も下旬になってめっきり日の出が早くなった。だが今朝の天窓には明るさがない。そのせいか、寒さもことさらに感じられる。Mの腕の中で弥生が身震いした。石鹸の香りが冷気に混じる。昨夜の楽しい入浴の記憶が凍える肌に満ち足りた気持ちを甦らせた。開放感が全身に拡がっていく。一か月振りに肛門栓を許されて眠ったのだ。違反を承知で入浴時に抜き取った肛門栓は、風呂を出るときにまた挿入されるはずだった。しかし、弥生は再び四つんばいになることを命じなかった。二人は自由な身体で寄り添って風呂を上がり、拘束されずに眠りについた。弥生が何事かを決意したと、その時Mは確信した。不幸の予感が肌を掠めたが、身近に寄り添う人格だけを信じようと思った。どんな状況にあっても、自らの責任と人格だけを信じて生きていくしかないと、改めて思い定めた。

「起きましょう。寒すぎるわ」

弥生が明るく声を掛けて毛布をはね飛ばした。冷気が全身を包む。震えながら起き上がった二人が素っ裸で向き合い、ウオームアップのマッサージを始める。肛門栓と鎖で拘束されていた昨日までと違い、擦り合う手に力がこもる。十分ほど擦り合って肌がほんのり赤くなったころ、弥生がMを広間に誘った。日課になっている食堂の雑巾掛けを始める素振りも見せない。

「今日から服を着ましょう」

当たり前のように言った弥生の声が耳を打った。心の底から喜びが沸き上がってくる。二人で広間の鉄棒に吊したトレーナーを取って、それぞれが素肌の上に着た。やっと自由な人間に戻れた感動がMの全身を満たす。たとえ一年続いたとしても、他人に裸体を強制されることに慣れることはできない。黒いトレーナーに身を固めた二人は両手を握り合って目を見交わした。うなずき合ってきつく抱き合う。それぞれの責任と人格で抱き合っている実感が込み上げてきた。

「武装しましょう。Mにも付き合って欲しい」

弥生が身体を離し、まっすぐMの目を見て言った。

「付き合うわ」

短く答えたMに迷いはなかった。弥生が武器を持つことを決断したのだ。善悪の彼岸を越えた答えが求められていた。Mの責任と人格が付き合うか否かを決定するだけだった。

友愛という言葉がまた脳裏を掠めた。弥生が窓を開けて大きく雨戸を開け放す。目の前に一面の雪景色が拡がっていた。湿気を含んだ重い雪で松の枝が大きくたわんでいる。やっと咲き始めたハンノキの花にも雪が凍り付いている。音の途絶えた静寂の光景が白く一面に拡がっていた。

「試射にちょうどいいわ」

短く言って、弥生は食堂に向かった。Mが横にぴったりと並ぶ。昨夜、飛鳥が向かっていたテーブルの上には、大型のアタッシュケースが二つ置き去りになっていた。銃器を置き去りにして気に病まない、なんとも不用心な組織の不安定さが目立った。しょせん子供の遊びなのかも知れない。だが、弥生が新しい地平に子供たちを引き上げるのだ。弥生は二つのケースを開き、黒々としたベレッタと茶色のショルダー・フォルスターをMに手渡す。Mの右手でずっしりと重いベレッタが鈍く輝いている。弥生が十五発の実弾を装填したマガジンを銃把の底に滑り込ませた。Mも見まねでそれに従う。カチッと乾いた音がして装弾が完了した。二人は黒いトレーナーの左肩にベレッタと予備のマガジンを入れたショルダー・フォルスターを吊った。よく引き締まった大柄な姿態に大型拳銃がよく似合う。しばし互いの姿に見入って楽しそうに笑った。どこから見ても映画の画面から抜け出して来たような精悍な戦士に見えた。二人は胸を張って広間の窓辺へと向かった。歩みに連れて、ただ一か所拘束が残った陰部が違和感を訴える。だが、ほどよい緊張がリングで繋ぎ合わされた陰唇から全身に発信され、身が引き締まる思いさえした。リングを外す必要はなかった。かえって戦士の自負心を高めている。窓辺に立った弥生が窓ガラスを開き、フォルスターからベレッタを引き抜く。安全装置を親指で押し上げて外し、スライドを引いた。ガシッと力強い音がして弾丸が薬室に装填された。ベレッタを握った右手を伸ばし、左手を銃把に添える。両足を広げて腰を少し落とし、重心を下げる。五メートル先に垂れ下がった太い松の枝に狙いを定め、右手を握るようにして引き金を引いた。

ズガガガッーン

連続して銃声が轟き、雪景色に吸い込まれていった。瞬く間に十五発を連射した銃口から青い煙が薄く立ち上っている。何発の銃弾が当たったか分からなかったが、五センチメートルほどの太さがあった松の枝が無惨に折れて垂れ下がっている。頬を紅潮させた弥生が横に退き、場所を空けた。銃声を聞きつけて駆け付ける大勢の足音が背中に聞こえる。Mは騒音を無視して無造作にベレッタを構えた。弥生が狙った太い枝の根元に照準をつける。

広間に駆け付けてきた十人の耳を銃声が圧した。パニックになった耳の代わりに、大きく見開かれた二十の目に一切の情報を伝える。Mの両手に握られた大型拳銃の銃口から断続して小さな炎が躍った。銀世界の中にぶら下がった松の枝の根元に的確に銃弾が吸い込まれる。十五発の連射が終わると同時に、太い根元を撃ち砕かれた松の枝が地上に落ちた。

「戦争が始まるのよ」

うっすらと煙の上がる銃口を下げ、広間を振り返ってMが告げた。

「そう、Mの言うとおりよ。シュータに集結したすべての者が、各人の滅びを彩るために信仰をかけた戦争を始めるの。もう遊びは終わったわ。新しいステージがこれから始まる」

弥生の透き通った声が静かに雪原を流れていく。厳粛な寒さが空間を圧していった。

「よしっ、やろう」

ピアニストの決断の声が広間に響いた。

「それぞれが目的意識を持って、ともに戦えばいい。結果は努力の質と量に比例してついてくるだけだ。二十億円に賭けてみよう」

ピアニストが言葉を続けた。初めて手を汚す決心をしたのだ。マラソンの他にも先頭を切れることを証そうとしている。横に立つ弥生の身体が微かに震えた。感動の震えに違いないとMは思った。

「やっとピアニストが決断をしてくれた。私も来たかいがあったよ」

喜びを押さえた低い声が流れた。スーツをきっちり身に着けた飛鳥が、青年たちの後ろから歩み出た。ピアニストの前に立って言葉を続ける。

「今のところはインターネットを使った攪乱が功を奏しているようだ。マークされていない幹部が都会で発信を続けているため、警察の目は都会を向いている。でも暖かくなれば山に人が入る。これだけのアジトが見付からないはずがない。必ず警察が来る。投降するか、撃ち合いになるしかない。もうピアニストたちに行き場所はないんだ。私の提案だけが未来に希望を繋ぐ。理解してもらって本当にうれしいよ」

もったいを付けた飛鳥の話を、睦月のかん高い声が遮る。

「オシショウ。シュータが強盗を働いてもいいのですか。二十億円も強奪するんです。悪いことに決まってる。オシショウ、私たちは善を選ぶべきでしょう。教えてください」

睦月の横に立った修太が大きく首を縦に振った。シュータの青年たちも一様にうなずく。

「オシショウ、教えてください」

黙ったままピアニストの横に立つオシショウに、修太が悲痛な声で尋ねた。オシショウが腕組みを解き、長い髭で縁取られた口を開く。

「私は常々教えておいたはずだ。信仰に善悪はない、ひたすら滅びを惜しまれる道を進めとな。信仰の薄い者だけがいまわの際で迷い、戸惑うのだ。ひたすら自分を鍛え、社会を鍛えるのだ。盗人のどこが悪い。人殺しのどこが救われない。善悪の彼岸から見れば、すべてが逆立ちして見えることがある。それが信仰なのだ。それが滅びだ。惜しまれる努力だけに希望がある」

Mは詐欺師の臭いをまた嗅いだと思った。空しい説法で消極的にピアニストを支持したに過ぎなかった。どんな思惑がオシショウの長い髭の下に隠されているか分からなかった。隣にいる弥生はオシショウの演説に耳を傾けようともしない。まなじりを決した目で、じっとピアニストを見つめている。弥生の信仰は、師を越えた時空に昇華してしまったようだ。黙り込んでしまった修太たちに追い打ちを掛けるように飛鳥が口を開く。

「これで決まった。私のプロジェクトを進める以外に未来はない。だが、詳しい計画を教える前に、一つ条件がある。プロジェクト・リーダーがピアニストでなければ、私は下りる。子供とは一緒に組めない」

修太の顔が真っ赤に染まった。シュータに全責任を負わせるといった飛鳥の要求がエスカレートしたのだ。手を汚すことのなかったピアニストが追い詰められていく。テロリストの顧問が、一挙に強盗団の首領にならなければならない。

「僕がやろう」

簡単に答えたピアニストの声は明るかった。

「弥生。僕にも銃を持ってきてくれ」

声にはじかれたように、弥生が食堂に駆け込んで行った。頬を上気させて戻り、ベレッタを入れたフォルスターをピアニストの肩に吊した。Mはこれまで、愛が信仰に変わる姿も信仰が愛に変わる姿も見たことはない。確かな官能の揺らめきだけを信じてきた。しかし弥生の生き方は、まったく新しいステージにMを立たせようとしている。胸の底が妙に波立ってならなかった。

ズガガガッーン

ピアニストがベレッタを連射する轟音が響き渡る。真っ白な雪原に銃弾が吸い込まれていった。

昼になって溶けだした雪道を極月と文月がパジェロで下っていった。後ろの座席には一

週間後の再訪を約した飛鳥とオシショウが収まっている。飛鳥の満足しきった笑顔が卑猥に見えるほど印象的だった。残った者は皆、精力的に簡易水道の修復に熱中した。翌日、皐月と水無月の二人がアジトに加わった。途端に作業がはかどる。目標が決まった組織は現金なものだ。四日後の夜明け前、卯月と霜月が仕掛けた爆薬が最後に残った巨岩をものの見事に破砕した。砕け散った破片を二日掛かって運び出し、水道が復旧した。蛇口から溢れる水に歓喜して六日振りの風呂を全員が堪能した。

三月になると、急に暖かな日が続いた。ハコヤナギの裸の枝で綿毛のようにふさふさした花が咲き始めている。飛鳥の計画に基づく現金強奪訓練も、全員で模擬演習に力を入れるまでになっていた。

「ダメッ、五秒も遅れている。やり直しだ」

ピアニストの叱声が草原に響いた。走ってスタート地点に戻ってきた霜月の巨体が肩で息をしている。新たにアジトに加わった水無月が荒い息づかいで戻ってくる。背中に背負ったザックが重そうだった。百三十メートルの全力疾走をもう三回も繰り返している。

「生還したかったら、もっと早く走れ。今のままでは二人とも爆風で死ぬ。ここで二人死んでも計画に支障はない。だが、生き残ろうという執念が何よりも大切なんだ」

ピアニストが二人を前にして苛立った声を出した。首から下げたストップウォッチが不規則に揺れる。まるで陸上競技のコーチのようだ。見守っている全員に心地よい緊張が伝わっていく。

二十億円の現金を強奪するための訓練が始まって一週間が経っていた。本番までもう十日もない。基本計画は飛鳥が持ってきたパソコンのシミュレーションどおりだ。全員が何回となく画面を見て、計画の流れを頭にたたき込んであった。シミュレーションの画面では、コンピューター・グラフィックで描かれた競艇場の縮尺図に沿って、時間を追って計画が進んでいく。さすがにハイテク・ゲーム機メーカーの逸材飛鳥が作ったシミュレーションだった。ゲームをしているのとまったく同じ感覚で強奪計画が頭に入る。テレビゲームで育ったシュータのメンバーにはぴったりの教え方だった。哲学的に善悪を考える必要もない。必要がないというより、ゲームの面白さが思考を越えていた。後はゲームで展開するシーンを実際に人がやってみるだけだった。

「弥生、M。最初の爆破シーンを二人に代わってやってみてくれ。霜月と水無月はよく見てスピードと要領を覚えるんだ」

ピアニストに命じられたMと弥生がスタート位置についた。二人の目の前の枯れ草に覆われた荒れ地が、スタートの合図とともに競艇場のコンクリート通路に変わる。Mはコンピューター・グラフィックで展開されたシナリオを脳裏に再現してみた。

突入班の霜月と水無月は、五秒間で地下通路に侵入するドアの錠を開ける。続いて二人で全力疾走を始める。七十メートルを走って直角に左に曲がり、三十メートル走る。すぐ立ち止まってエレベーターの横に爆弾をセットする。所要時間は三十秒間。また三十メートルの直線を全力疾走し、直角に曲がる。大きな爆発音が響き、すんでの所で二人は爆風をかわす。走りながらフォルスターからベレッタを抜き取り、侵入ドアの前に待機した三人と合流して警備陣を切り抜けるのだ。よくできたシナリオだったが、空しさが募る。何よりも生活感がなかった。エレベーターの速度を基準に作られた、ただのゲームに過ぎない。突入班には爆弾を破裂させる権限が与えられていないのだ。爆破は遠く離れた場所で、強奪班がリモートコントロールで操作する。突入班が首尾よく通路を直角に曲がることができずに爆風に巻き込まれたら、彼らにとってはゲーム・オーバーということだ。再スタートをするかエントリー・キャラクターを変えるしかない。だが、実際のゲームでは再スタートもメンバーチェンジもない。死者は見捨てられ、ゲームは続くのだ。柔軟性のない冷酷な計画と言えた。常に移り変わる現実に目をつむっているのだ。

Mは空しさを抱えて冬枯れの荒れ地を駆けた。ただ弥生に遅れないことだけを考えていた。爆発物をセットする演技で荒れ地にしゃがみ込むと、足元にタンポポの蕾が膨らんでいた。五センチメートルほど伸びた貧弱な茎を支えるために、大きな葉が円形に並んで地面に張り付いている。もうじき黄色の花が咲く。確実に時が流れ、春は近いのだ。Mと弥生がゴールすると全員が拍手で迎えた。霜月と水無月も手を叩いている。明るすぎる雰囲気がMを不安にさせる。慎重居士のピアニストまでやけに明るかった。

「さすがは弥生、余裕でセーフだ。見たとおり、爆弾のセットまでのスピードとセット後のダッシュが決め手だ。実際に爆弾をセットするときは緊張しきっているはずだ。繰り返し練習して慣れるしかない。エレベーターの動きには多少の余裕がある。でも最短時間に備えておく方がより確実だ」

ピアニストの説明が終わると霜月と水無月がスタート位置についた。四回目の演技が始まるのだ。

まるで映画のシーン撮りのリハーサルのような訓練が毎日続いた。皆楽しそうに出番を待ちかねているように見える。演出家のピアニストも張り切って指導を続けている。修太

と睦月だけが、日を追うごとに暗くなっていった。すべての実権がピアニストに集中してしまったのだ。おもしろかろうはずがない。頼みの綱のオシショウは、気まぐれを言って飛鳥と一緒に街に下りてしまっていた。煙たいオシショウが山を下りることにピアニストは異存がなかった。かえって飛鳥に責任を分担させられることを喜んだほどだ。修太と睦月の孤立が一層深まっていった。出撃を三日後に控えた日の訓練で、二人はピアニストと衝突した。

修太と睦月は、強奪した二十億円を競艇本部ビルの四階から高所作業車を使って地上に運び降ろす役だった。クレーンの先に取り付けたゴンドラに乗った睦月が四階の非常階段の手すりを切り取る。続いて非常ドアから出てくる強奪班と協力して、現金の積み込みと撤収を行うのだ。強奪班はピアニストと卯月、弥生、Mの四人の予定だ。撤収までには二回のクレーン操作が必要になる。大切な仕事だが地味な役回りだった。アジトのリハーサルでは機材がない。重機の運転ができる修太だが、実際にない機械を操作する真似は苦痛に違いなかった。しかし、ピアニストは容赦をしない。繰り返し練習を命じて時間の短縮を図った。確かに、現金の運び出しと人員の収容を行う最も重要なポイントと言えた。

「修太、最初のクレーン操作の時間が掛かりすぎだ。もっと手順を整理して三十秒短縮しろ」

想定した車両の停車位置に一人で立ち、クレーンの操作をシミュレーションしていた修太の顔が真っ赤になった。

「クレーンもないのに、時間の短縮などできるはずがない。こんな訓練は無駄だ。俺はもうやめる」

怒りに満ちた修太の声が広場に響いた。肩を怒らせ、まっすぐログハウスに引き上げていく。

「ピアニストは横暴よ」

睦月が大声で叫んで修太の後に続いた。

「二人とも戻って、訓練を続けるんだ。敵前逃亡は懲罰だ。もう三日しかないんだぞ」

ピアニストの怒声を無視して二人はログハウスに向かう。蒼白になったピアニストがベレッタを抜き、二人に向けて二発撃った。銃声が谷にこだまし、修太と睦月の足元で土煙が上がった。二人の足がすくんだ。

「水無月、皐月、二人を素っ裸にして後ろ手に手錠をかけろ。二十四時間の懲罰を命じる」

ピアニストの興奮した声に驚き、指名された水無月と皐月が走り出した。二人ともピアニストが権力を掌握してからアジトに来たため、迷うことなく指示に従う。長身の水無月が小柄な修太と睦月の前に立った。皐月はそのままログハウスに向かい、懲罰に使う拘束具を入れたアタッシュケースを下げて戻って来た。まさか発砲されるとは思っていなかった修太と睦月は、銃声を聞いて初めて重大な過失に気付いた。確かに想定の場面では敵前逃亡だった。懲罰は免れないことと観念した修太が下を向いてうなだれる。睦月は鋭い視線でピアニストをにらみ付けた。

「二人とも服を脱いで裸になりなさい。ピアニストの命により二十四時間の懲罰を執行する」

威厳を持った低い声で皐月が命じた。組織担当の皐月には極月に代わる司法権があった。修太が命じられるまま服を脱ぎ、全裸になる。後ろを向いて背中に回した両手首で手錠が鳴った。

「睦月も脱ぐのよ」

再び命じられた睦月が、頬を赤く染めて口を開く。

「そこにいる弥生とMは反省の懲罰中よ。その二人が服を着ている。私たちだけ裸になるのは不公平よ。司法の権威が問われるわ」

引き合いに出されたMの背筋を冷たさが走った。忘れかけていた肛門栓の恐怖がまた甦る。

「それが事実なら、反省用の拘束具の鍵を司法担当が持っているはず。私は極月から何も引継いでいないわ。懲罰を命じられたのは睦月よ。早く脱ぎなさい」

事実関係を追求しない皐月の態度に、睦月は唇を噛みしめる。ピアニストの権威だけがアジトを支配していることに気付き、改めて愕然とした。睦月は悔し涙を流して服を脱ぎ、素っ裸になった。皐月が両手を取って背中に回し、冷たい手錠をかけた。

「二人とも縄で縛り上げて木の下に立たせるんだ。二十四時間晒し者にする。夜も広間で晒す」

ピアニストが残酷に命じて訓練の再開を告げた。水無月と皐月はそれぞれ縄を持って、修太と睦月の後ろ手を高々と縛り上げる。二人を松の木の下に追い立て、首に巻いた縄を枝に掛けて吊した。皐月がテラスから洗濯用の竹竿を持ってきて二人の足元に置く。睦月を広場に向け、修太をログハウスに向けて立たせ、両足を大きく広げさせて足首を竹竿に縛り付けてしまう。余った縄をナイフで切り、口に噛ませて猿轡にする。凄惨な二十四時

間の懲罰スタイルが完成した。素っ裸で両足を開かされた二つの裸身が、裏表になって人型に縛られて晒されている。睦月の目から悔し涙が流れた。ふっくらと盛り上がった乳房の上下に厳しく縄が走り、乳房の谷間で無惨にも一つに結ばれている。縄目から飛び出した乳房を涙が濡らす。涙は突き立った乳首の先にも落ちた。後ろ手に高々と掲げられた手首に手錠が食い込み、耐えられぬ痛みが襲う。裸の尻が止めどなく寒さに震えた。睦月の後ろで修太の逞しい尻も震え続けている。暖かいとはいってもまだ三月に入ったばかりだ。このまま数時間も放置されれば全身が凍り付いてしまう。素っ裸で縛られたまま凍死する恐怖が二人に襲い掛かった。

午後八時四十五分に、Mは食堂の隅で起き上がった。弥生が見つけだしてきてくれたタイメックスの燐光時計で時刻を確認する。これまで一緒に寝てきた弥生の姿はない。今夜はMと弥生も屋根裏部屋の見張りに参加することになっていた。修太と睦月が二十四時間の懲罰を受けているため人手が足りないのだ。弥生はすでに、七時から九時の見張りについている。九時から十一時までがMの担当だった。

昼と同様、穏やかな夜だった。天窓から明るい月の光が落ちている。Mは黒いトレーナーを着て、ベレッタを入れたフォルスターを左肩に吊る。イギリスにいるという祐子の織ったスカーフを首に結んで大きく伸びをした。二か月近く続いた毎日の鍛錬のお陰で体が軽い。テーブルの上のマグライトを取り、光を絞って左肩の上で構える。足元を照らしながら素早い身のこなしで壁際まで進み、静かにドアを開けて廊下に出た。フォルスターからベレッタを抜き、右手で構えて玄関に向かう。屋内をチェックするのも見張り交替の時の職務だった。玄関ドアに異常のないことを確かめてから、Uターンして広間に向かう。廊下に当てた光が反射して、突き当たりの広間がぼんやりと明るくなった。鉄棒に繋がれた二つの裸身が闇の中に浮かび上がる。後ろ手に縛られ、立ったまま晒された修太と睦月の悲惨な姿だ。互いの肌の温かさで寒さを耐えさせるため、鉄棒に吊った縄には余裕がある。足も縛られていない。絶え間なく足踏みをし、素肌を擦り合わせて暖をとっている姿が不憫でならなかった。Mは二人の縄目を確かめる職務を放棄して右手の狭い階段を上った。畳三畳ほどの狭い屋根裏部屋では、中央に置いた肘掛け椅子に弥生が座っていた。

「交替に来たわ」

声を掛けると弥生が白い歯を見せて笑った。南を向いた窓が開けられ、月の光が差し込んでいる。

「早いわね。退屈な仕事よ。夜は暗くて外の様子が見えないの。こうして窓を開けて聞き耳を立てていればいい。異常な音がしたら窓辺に行って双眼鏡でチェックするの。でも暗視装置が付いていないからほとんど見えないわ」

確かに開け放した窓の前にアルミの脚立が置かれている。Mは窓に近寄って脚立に上ってみた。外に身を乗り出してみても、向かいの山の稜線と月の光に輝く谷川の流れしか見分けることができない。確かに耳だけが頼りの退屈する仕事のようだった。二時間の手持ち無沙汰を思いやるとうんざりしてしまう。申し訳なさそうに弥生が声を掛ける。

「それでは交替をお願いするわ。椅子とテーブルは自由に使ってね。それから毛布もね」

「お休み、弥生」

「Mが帰ってきたとき私が眠てしまっていても、きっと起こしてね」

はにかんだ声で言って弥生が立ち上がった。静かに階段を下りていく。Mはテーブルの上にマグライトとベレッタを置き、椅子に深く座って毛布を身体に捲いた。五分も経たないうちに静寂に慣れた聴覚が麻痺して睡魔が襲ってくる。椅子から立ち上がって東側の窓へ行き、手を伸ばして窓を開けた。脚立を運んでいって高い窓からのぞくと広場が見渡せた。眼下には広間の前に張り出したテラスが見える。風のない穏やかな夜だが、南と東の窓を開け放したため外気が流れ込む。肩から毛布をかぶっても眠り込まない程度の寒さになった。再び椅子に座って十五分ほど経ったとき、裏口のドアが開く音を聞いたと思った。だが、厚い鉄製のドアが、たやすく外から破られるはずはない。耳に全神経を集めて様子をうかがうことにした。二分ほどして東の窓から小さな乾いた音が聞こえた。続けてまた同じ音が響いた。荒れ地に落ちた小さな小枝を踏み折る音だ。何者かが広場を歩いているに違いなかった。Mは立ち上がってテーブルの上のベレッタを握り、物音をたてないように脚立に上った。見渡した広場に人影はない。視線を落として真下を見ると、テラスの横の松の枝越しに二つの人影が見えた。青い月の光に浮き上がった二人は黒い服を着ている。人影は弥生とピアニストだった。口元まで上がってきた声を慌てて呑み込む。見てはいけないものを見たような、後ろめたい気持ちが込み上げてきた。脚立を下りて知らない振りをしようと思ったが、すんでの所で思い直す。下腹に力を入れてじっと二人を見下ろした。

「ピアニストはトイレに起きたんじゃなかったの」

「弥生を待っていただけさ」

テラスの前の闇の中で二人の小さな声が響いた。ピアニストと弥生は並んで立っている。

二つの肩がちょうど同じ高さにある。弥生の肩先が微かに震えた。ぽっと赤くなっていく頬を月の光が照らしだした。うれしさを照れくささが追う。間近にあるピアニストの横顔を痛いほど意識した。もう一度言わせたいと思った。

「ピアニストの見張り時間はMの後よね。時間を間違えたのかも知れないわね」

闇に埋もれた広場を見つめたまま、意地悪な言葉が口を突いた。言ってからうろたえた弥生の頬が、また熱く火照った。

「そう、Mと交替する。でも弥生が先だ」

はっきりとした答えが聞こえ、冷たい指先にピアニストの手が触れた。伝わる温もりが全身にスパークしたときには手を握られていた。もう片方の手が肩に回され、きつく身体を抱き締められた。首筋に熱い息がかかる。がっしりした胸に抱かれた両乳房がピアニストの動きに伴ってしなやかに形を変えていく。徐々に乳首が固くなっていくのが分かる。張り詰めた緊張の隙間を心地よさが這う。ピアニストの舌がうなじから耳の下へと何度も行き来した。固く構えていた弥生の身体が少しずつ柔らかくなる。身体の奥で小さな火が点った。うなじに埋めたピアニストの顔が離れ、燃える目で弥生を見つめた。弥生の視界にはピアニストの瞳しか映らない。弥生の瞳も燃えている。すかさずピアニストが口を奪った。きつく閉ざした唇を舌が這う。弥生がそっと口を開けると長い舌が侵入してきた。縮めた舌を探しだし上手に舌を絡ませる。甘い香りが口中に満ちた。突然下腹に固いしこりが触れた。ぎょっとして腰を引くと、すぐにピアニストが引き戻す。胸の鼓動が高まり全身が熱く火照った。はち切れるほど勃起したペニスが下腹をなぶる。股間が熱く火照ってきてリングで閉ざした陰門が濡れた。前に垂らした両手で、弥生は思い切ってペニスを握った。トレーナーの厚手の生地をとおして、屹立した硬い肉の柱が力強く脈打っているのが分かる。ピアニストの喜びを両手で実感したと思った。急に頭の中が真っ白になる。たまらなく素肌が恋しかった。トレーナーの中に両手を差し込み、熱く燃えるペニスを直接握った。猛々しい肉の柱が手の中にある。ピアニストを手中にしたとの思いが湧いた。込み上げてきた喜びに性器が疼き、陰門に愛液が溢れた。

弥生の背中に回わされていたピアニストの両手が腰に下りた。引き締まったウエストをまさぐってからトレーナーを一気に膝まで脱がす。白い尻が剥き出しになり月の光に輝く。続いて上着も脱がす。女の匂いが闇に流れ、上気した裸身が揺らめいている。ピアニストは弥生の前にひざまずき、何度も何度も股間を舐めた。二枚の陰唇を繋いだリングがもどかしくてならない。指先でリングの繋ぎ目を捜し出し、力を入れて輪を外す。微かな呻き

が耳を打った。そっとリングを抜き取って闇に投げた。ピアニストもトレーナーを脱ぎ去る。美しい二つの裸身が月の光の中で抱き合い、もつれ合った。しばらくの間、激しく素肌を合わせあっていた二人が誘い合うようにテラスに上がった。手を取り合った二つの裸身が優美に舞い、選ばれた肉体を誇示するかのように官能の舞台に上がる。

弥生は冷え切ったテラスの床に横たわった。冷気が背と尻を襲うが気にならない。かえって火照った裸身が気持ちよいくらいだ。心持ち両膝を立て、股間を大きく開いてピアニストを迎える。逞しい裸身が弥生の裸身を覆った。リングの外れた陰門を、猛々しく勃起したペニスが意地悪くなぶる。両の乳房がもみしごかれ、舌が吸われた。ピアニストの愛撫は執拗に繰り返される。じれったさと官能の高まりに弥生は身悶えする。押し殺した喘ぎが絶え間なく口から洩れた。弥生は両手を股間に伸ばし、陰部をなぶるペニスをつかんだ。べっとりと愛液で濡れた肉の棒が抗って手をすり抜け、肛門を狙う。ヒッと悲鳴を上げ、首を左右に振って目を開いた。闇の中で笑ったピアニストの白い歯が見えたような気がした。ペニスの狙いが変わり、ピアニストが腰に体重をかけた。陰門を割って巨大なペニスが体内に入ってきた。弥生がきつく目を閉じる。ピアニストが慎重に腰を使った。下半身を占有したペニスが複雑に運動する。高く低く、喜びの呻きと喘ぎが口をついた。何回となく官能が高まり、極まりに向けて駆け上がる。その度にピアニストが意地悪く腰を引いて弥生をかわす。弥生の腰も官能を追って淫らに動く。裸の尻が悩ましく床を這った。

「ウゥー」

長く尾を引いた呻きが口から漏れ、弥生の裸身が弓なりになった。初めて知った官能の喜びだった。ゆっくり潮が引いていくような高まりの名残を楽しみながら、弥生は目を開いた。松の梢越しに妙に青白い月が輝いている。視界の隅に、開け放された屋根裏部屋の窓が見えた。人影がたたずみ、見下ろしている。

「Mっ」

弥生は声に出さずに叫び、見下ろすMの視線を全身で受け止めた。引いていく官能が寄せ帰す波のように再び高まる。

「Mっ」

もう一度心の中で叫び、弥生は二度目の高まりを迎えた。月の光を浴びたMの顔が微笑んでいるように見えた。

屋根裏部屋の椅子にMは座っている。弥生とピアニストの性の営みを最後まで見届けて

から十五分経った。今も興奮が残っている。美しく感動的な性だったとMは思う。Mが知ることのなかった昔ながらの官能を、弥生とピアニストが演じきったと思った。だが、滑稽なほど長い時間が流れたのだ。私なら退屈するなと思い。口元に苦い笑いが浮かんだ。素っ裸になって走り出したい衝動を必死にこらえる。ピアニストが見張りの交替に来るはずだった。階下の広間から物音が聞こえ、階段を上ってくる足音が響いた。ピアニストは五分の遅刻だ。

「M、遅れて悪かった。修太と睦月を縛り直すのに手間取ってしまったんだ。修太には手を焼かされる。懲罰中なのに睦月と楽しもうとしているんだ。もっとも二人とも後ろ手に縛られ、立たされているのだから惨めなもんさ。滑稽な情景だったよ。睦月が修太に背を向けて足を開き、腰を曲げて尻を突き出す。中腰になった修太が小さなペニスを尻の割れ目に沿わせて陰門を狙うんだ。思い通りにならずに肛門に挿入する。睦月は痛みに耐えきれず、泣きながら尻を振っている。それでも二人ともやめようとしない。あきれてしまったよ。これ以上変な気を起こさないように、睦月の股間を縄で縛ってやった」

Mを見下ろして、ピアニストがおもしろそうに遅刻の弁解をした。黙って聞いていたMの肩が落ちる。修太の話題に反応しないMをいぶかり、ピアニストが先を続ける。

「不思議だよな。二人とも縄を二重にして猿轡を噛ませてあるだろう。その縄の間から舌を出して、互いに舌を絡め合うんだ。股間を縛った腹いせなんだろうか。まったく理解できない。明日の訓練が心配だよ」

「私には二人の気持ちがよく分かる」

鋭く断言した声がピアニストの全身を打った。驚いたピアニストがMを見つめる。Mは毛布をはいで、ゆっくり立ち上がった。大きく胸を張ってピアニストの視線を受け止める。

「修太も睦月も、辛く、切なく、寒いから、お互いに寄り添う。寄り添った二人が官能を求め合うのに何の不思議もないわ。たとえ後ろ手に縛られ、猿轡を噛まされようが、めげずに性に挑む姿は立派よ。官能の高まりにとって、定められた舞台など存在しない。自分に引き比べて判断するのはやめたがいいわ」

Mの目が燃えていた。ピアニストの背を寒い風が掠める。後ろめたさを隠そうとして視線を外す。寒そうに肩をすくめ、風の行方を振り返ってみた。風は南の窓から東の窓へと抜けていく。大きく開け放された東の窓の前に脚立が置き去りになっていた。ピアニストの表情がこわばる。

「おめでとう、ピアニスト。素敵な官能の世界を見せてもらったわ。あれがピアニストが

待ち望んでいた性なのね」

背中でMの声が響いた。

「弥生ではなく、僕はMを抱きたい」

背を向けたままピアニストが言った。背筋がまっすぐに伸び、緊張した肩が上がる。真剣な声だった。静寂の中を風が渡る。

「機会があればね。でも私の趣味ではないわ」

Mがぽつんと答え、階段に向かった。ピアニストは肩を怒らせたまま、去っていく足音を聞いた。

Mはゆっくり階段を下りる。マグライトの光は足元を照らしている。ピアニストの求めを拒絶したのは、これで二度目だった。苦悩に歪む十八歳のピアニストの顔が闇の中に浮かび上がる。求められれば応えるのがMの生き方のはずだった。なぜ二度もピアニストを拒絶したのか分からない。甘酸っぱい味が口の中に拡がる。人を頼らず、自分の責任と人格で生きることを、Mが頑ななまでピアニストに望んだのかも知れなかった。まるで自分自身を見つめるように十八歳と三十歳のピアニストを見たのだと思い、闇の中でMは戸惑う。

階段を下りきると、右手の広間から苦しそうな呻きが聞こえた。修太と睦月を縛り直したと言ったピアニストの言葉が甦り、声のする方へライトを向けた。白い光の輪が二つの裸身を照らしだす。後ろ手に縛られた素っ裸の修太と睦月が首をねじ曲げて、互いの口を吸っている。二条の縄で口を割った猿轡の間から苦しい呻きが洩れた。二人の首に巻いた縄はまっすぐ上に伸び、鉄棒に縛り付けてあった。つま先立ちにならないと喉を絞められてしまうほどの過酷な吊りだ。睦月のふっくらした尻が苦しさに震えている。

Mは黙ったまま二人に近寄り、首を吊った縄を緩めた。ほっとした二人が一様に膝を曲げ、硬直した関節をほぐす。修太の股間で固く勃起したペニスがかわいかった。睦月の尻の割れ目には二条の縄がのぞいている。ほっそりしたウエストを縛った縄が臍の下で結び目を作り、まっすぐ引き下ろされて股間に食い込んでいた。Mは睦月の足元に屈み込んで無惨な股縄を解いてやる。縄の途中には大小二つの結び目がつくってあった。それぞれの結び目が陰門と肛門を割って体内に挿入されていたのだ。痛みに耐えかね、尻を振って身悶えしていた睦月の気持ちを考えると切なくなる。陰門に挿入されていた結び目はじっとりと濡れていた。温もりが残る縄がMの手に痛い。性を憎悪するピアニストの執念が悲し

かった。立ち上がって修太の尻を手で打った。ピシッという小気味よい音が広間に響いた。冷え切った素肌の感触が哀れでならない。しかし、ピアニストが下りて来るまでの二時間は、凍えた身体と心を性で癒すには十分な時間だった。猿轡を噛まされた修太の口から低い呻き声が洩れた。熱く燃える目でMを見た後、修太は睦月の裸身に身体を寄せた。素っ裸で後ろ手に縛られた不自由な身体で二人一緒に官能の舞台に立つのだ。一人立ち去るMの後ろ姿を悩ましい喘ぎ声が追った。

１０　現金強奪

山を下りる日の朝、空は穏やかに晴れ上がっていた。春の匂いが山々に立ちこめている。木々は芽吹きを迎え、白梅の香りが漂ってくる。ハコヤナギの花が天を突いて燃え上がっていた。

午前十一時にログハウスの玄関ドアが開いた。Ｍと弥生、ピアニスト、修太、睦月、卯月の六人が白いパジェロに乗り込む。十分間の間隔を開け、二台のパジェロに分乗して全員が山を下る。車両後部の荷台には今朝摘んだばかりの山菜が山積みにしてある。早春の山菜採りの帰りを装って市街に乗り込むのだ。全員が入浴を済ませ、さっぱりした目立たない服装をしている。外見からは日曜日の朝を山菜採りで過ごしてきた仲良しグループとしか見えはしない。白いパジェロのハンドルはＭが握った。Ｍを除いた全員が指名手配されている。危険すぎる人員構成だったが、出撃のグループごとに行動するためにはやむを得ない配車だった。何事もなく県境を越えて林道に入る。行き交う車もないまま市道へ出た。後は山地を通り抜けて市街に入るだけだ。全員が黙り込み、車内に緊張がみなぎる。助手席の卯月が黒いバッグを握り締めた。工学部に残る支持者たちが作った閃光弾を入れた大事なバッグだ。

左手に工学部の校舎が見えた。車両の数が増え、天満宮の前の信号が混雑している。水道工事で車両を誘導するガードマンの服装が警官に見え、ハンドルを握るＭの手が汗ばむ。コートの下に吊ったショルダー・フォルスターのベレッタがやけに重い。機屋通りへ左折してしばらく走ると、見慣れた鋸屋根工場が見えた。社会変革を夢見たコスモス事業団の理事長がハイテクを駆使して作戦本部に改造した工場だった。チハルの生家で、現在は祐子のアトリエだ。二人が渡航してしまった今、工場を使う者はいない。それを承知で飛鳥が出撃の集結場所に選んだのだ。時刻はとうに正午を回っていた。決行時刻の六時まで、もう六時間を切っている。枯れた蔦の絡まった鋸屋根工場の前の広い車寄せにパジェロを止めた。ここから競艇場まで、車で三十分の距離だ。世界選手権の優勝戦に大勢のファンが詰めかけ、今ごろ場内は喚声で沸き返っているはずだった。

六人が車を降りるのと同時に鋸屋根工場のシャッターが上がった。ガラスの自動ドア越しに、ダークスーツを着た飛鳥の顔が見えた。幾分緊張した表情で一行に笑い掛ける。亡くなった理事長の自慢だったセキュリティー装置も、飛鳥のパソコン操作の前には無力だ

った。かえって古めかしい南京錠の方が役立ったかも知れない。飛鳥に案内されて、六人は奥のアトリエに向かった。アトリエは大小の織機とコンピューターだけを置いた殺風景な景観だった。この質素な部屋で祐子が機を織るのかと思うとMの目頭が熱くなる。思わず首に巻いたスカーフに手を伸ばして艶やかな質感を確かめた。

「さあ早く着替えてくれ。後続が着きしだい、最後のチェックをしよう」

ピアニストの合図で、飛鳥が用意した衣装を床に広げた。先にアジトを出ていた極月と文月、市庁舎爆破以来ずっと市と都会で攪乱工作を続けた葉月と長月の四人がシナリオに合わせて買い揃えた品だ。全員が裸になり、名前の貼ってある服に着替える。何回となく繰り返した練習の成果が、もうじき問われるのだ。Mと弥生、ピアニスト、卯月の強奪班四人は競艇場のガードマンと同じ制服に着替えた。修太と睦月の収容班は電気工事の技師の服装になった。遅れて到着した突入班の水無月と霜月、サポートの如月と神無月、皐月の五人もガードマンの服に着替える。全員が着替え終わって集合するとキッチンのドアが開いた。簡単な食事を載せたワゴンを押して極月と文月がアトリエに入って来る。二人は消防本部の救急隊員の格好をしていた。救急車を使った離脱班が役回りだ。しばらくぶりの再会にメンバーの表情がなごむ。ワゴンの後から入ってきたオシショウが右手に持ったワイングラスを掲げる。

「さあ滅びの時は近い。赤い血潮を、惜しまれるほどに沸き立たせるのだ」

酔いの回った声で言って、なみなみと注いだ赤ワインを一気に飲み干した。シュータのメンバーが喜んで拍手する。ピアニストが眉間に皺を寄せて飛鳥をにらみ付けた。足早にオシショウに駆け寄った飛鳥が、首を左右に振るオシショウの肩を抱いて無理やりキッチンに連れ戻す。

「最後のチェックをしよう。葉月と長月の遊撃班は、もう現場で待機している。残された時間は少ない。食べながら役割を再確認してくれ」

ピアニストが周りを見回して緊張した声で言った。手元のパソコンのキーを叩くと、何回となく見慣れた強奪計画のシミュレーションが画面に現れた。リラックスした声を装ってピアニストが配置を確認する。

「十二番目に行われる最終レースの優勝戦は、午後四時半にスタートする。突入班と強奪班の九人は、四時十五分を目標に二人ずつに別れて西側ゲートから場内に入ってくれ。場外の警備が終わり、帰り客の誘導に備えて戻ってきた振りをするんだ。専従の警備員は五十人だが、今日は臨時の警備員が百人もいる。優勝戦直前の興奮で怪しまれはしない。さ

り気なく場内を観察してくれ。客が帰り終わる五時半までに配置につけ。収容班の高所作業車は優勝戦の出走直前に正面ゲートから入れ。飛鳥が前もって門衛に電話を入れておく。まず怪しまれることはない。競艇ビルの北の照明灯は実際に四本も故障しているんだ。そうだな飛鳥」

呼び掛けられた飛鳥が前に出る。

「照明灯は四本とも昨夜故障させた。修理を頼まれた電気会社も確認済みだ。ただし修理予定は明日の月曜日。いつもの慣例なんだ。だが、一日早くなる修理に困る者はいない。電気工事とそっくりな大型クレーン車を用意して、鋸屋根工場の裏に止めてある」

ピアニストがうなずいて話しを続ける。

「離脱班の侵入は爆発の五分後だ。実際に駆け付けるパトカー、消防車、救急車の車列に紛れればいい。競艇場は隣町にある。巨大施設の競艇場で事故のあったときは、三市町の緊急車両が同時に駆け付けるんだ。互いに干渉している暇はないはずだ。疑われる恐れはない」

「救急車も白いワゴンを偽装して裏に用意してある。車体カバーを外せば出動できるようになっているよ。機材の調達はすべて、行き掛けの駄賃にコスモスの信用を使わせてもらった。日曜日の今日はコスモスも休みだ。問い合わせが来る心配はない。ついでにここで、全員に報告したいことがある。海外脱出用のクルーザーの手配が終わった。明日中に五億円を振り込めば、船員込みでいつでも出航できる。集結地点への到着は、夜中の零時までにしてくれ」

飛鳥が口を挟んで時計を見た。いつの間にか二時近くなっている。ピアニストが急いで先を続けた。最終チェックが終えた三時半にピアニストの携帯電話が鳴った。全員が耳を澄まして電話に注目する。

「オール、クリーン」

短いが、確かな女性の声が流れただけで電話は切れた。

「葉月からの最終報告だ。オール、クリーン、異常はない。二十億円が僕たちを待っている。出撃しよう」

ガードマンの制服に身を固めたピアニストが興奮を抑え切れずに高い声で言い切った。全員の目が輝き、室内に熱気が満ちる。携帯電話から流れる時報サービスに合わせて全員が腕時計を調整した。まず突入班の五人が出発する。後発の者たちと握手を交わし合い、全員で再会を誓う。

「生きて、またMに会いたいな」

霜月が大きな手でMの右手を握り締め、似つかわしくない真剣な声を出した。

「きっと会えるわ」

Mがうなずいて手を握り返す。

「うん、素っ裸でウサギ飛びをするMを、海外でもう一度見てやる」

「それは無理ね。今の私は足が速い」

苦笑して答えると、やっと霜月が笑った。緊張しきった巨体がやっと落ち着きを取り戻して出ていく。二十分後に、Mたち強奪班の四人も出発した。

Mは慎重にパジェロを運転した。四人もガードマンの乗った車が不審に思われないかと不安だったが、日曜日の街路は渋滞もない。あっという間に水瀬川を渡ってバイパスに入った。十五分ほど走ると、西に下った平地の真ん中に午後の日を浴びて輝く湖面が見えた。不死熊沼の湖面だった。かつて熊が落ちても死なないほど小さかったか、水深が浅いためかは知れないが、不可解な名の沼の半分を競艇場が使用していた。今や湖面面積は約二十万平方メートルとも豪語している。水深は最長で十メートルしかない。沼の中心部を幅八十メートルのコンクリートで直線に埋め立て、一部七階建ての巨大な競艇ビルが建っていた。床面積一万平方メートルの三階建ての観覧席は長さ四百メートルに渡って沼に面している。なんとも巨大で威圧的な建造物だった。

Mは正面ゲートの前でパジェロを止めた。ここまで来る間に満車の駐車場を五つも通り越した。どこにも駐車できるスペースはなかった。仕方なくピアニストと弥生をゲート前で降ろす。現場での再会を約して更に先に進んだ。さしもの巨大施設が小さく見える所まで来てから、満車を承知で無料の駐車場に進入した。広大な駐車場は車で埋まっているが人の気配はない。黒塗りのベンツの前に堂々とパジェロを停めて地上に降り立つ。黒いバッグを肩から下げた卯月が横に並んだ。日は大きく西に傾いている。夕暮れ間近な赤い空が二人しかいない人間を照らしだした。Mはベレッタで膨らんだ胸ポケットからレイバンのサングラスを出してかけた。

競艇場の方角から風に乗って喚声が聞こえてくる。今日十一番目のレースが始まり、六艇のボートが出走したらしかった。一周六百メートルのコースを左回りに三周するのが競艇のルールだ。一分五十秒前後で勝敗が決まる。時速八十キロメートルの水上の勝負だった。何億円という金が、もうじき水底に消える。次は最終レースの優勝戦が待っているの

だ。いやが上にも興奮が募るのだろう。四万五千人の大観衆がどよめき、怒濤のような喚声が轟く。続いて、ひときわ高い声で場内アナウンスがレースの着順を告げた。声に煽られるようにMと卯月の足も早まる。優勝戦の発券を締め切る時刻を告げるアナウンスのバックに、急にオーケストラの調べが重なる。ワグナーの楽劇、ニーベルングの指環の第一夜、第三幕の前奏曲「ワルキューレの騎行」が遠く近く響き渡った。荘重で重々しく、それでいて全身を高揚させる生き生きとしたリズムと旋律を兼ね備えた楽曲が人々の心を煽る。血沸き肉躍るレースの前に相応しい音楽だった。いましも茜色の雲の浮いた西の空から八人の軍神の乙女が天馬を駆って舞い降りてきそうだ。そして今、Mは戦場に向かっている。敗者に選別されるわけにはいかなかった。

西側ゲートの巨大なアーチが二人の目の前に迫った。ゲートの向こうからざわついた雰囲気と興奮した熱気が伝わってくる。行き交う人の数が急に増えた。二人の横を数人の男がゲートに向かって走っていく。場内アナウンスが発券締め切り十分前を告げ「ワルキューレの騎行」がフォルテッシモで鳴り響いた。Mと卯月はゲートの横の通用口から、門衛に敬礼しながら場内に入った。門衛は二人を見ようともしない。

ゆっくりした歩みで二人は競艇ビルに向かった。都会の高層ビルが横たわったような巨大な建造物の一番奥に七階建ての本部ビルがそびえている。ごった返す観覧席を避けて建物の裏へ回った。途端に深閑とした風景が拡がる。随所に設けられた監視カメラを意識して、二人は任務を帯びて部署に急ぐかのように足早に歩く。巨大な建物の向こうからまた歓声が上がった。優勝戦を戦う六艇のボートが湖面に姿を見せたらしかった。目前の本部ビルの非常階段の下に人影が見えた。二人が近付くと人影は頭上を指差してからビルの陰に消えた。仕草からピアニストと知れたが、素知らぬ顔で非常階段と四階の踊り場を確認する。ついでに水銀灯が打ち砕かれた四本の照明塔も確認した。ビルの東側から低いエンジン音が聞こえ、修太が運転する高所作業車が姿を見せた。すべて計画どおり、時間どおりに運んでいた。

Mと卯月は本部ビルの前に回った。巨大な観覧席に人が鈴なりになり、熱い眼差しでスタートの瞬間を見守っている。圧倒的な興奮が頂点まで上り詰め、六艇が発進すると同時に悲鳴と怒号、歓喜と悲哀、一切の感情が混じり合った喚声が場内を圧した。二分間にも満たない手に汗握る時間は瞬く間に消え失せ、場内が一瞬静まり返る。勝敗が決してレースは終わったのだ。紙吹雪のように外れ舟券が宙に舞う。先ほどまでとは打って変わり、冷たいくらい落ち着いた声で着順のアナウンスが流れた。だが聴く者は誰もいない。潮が

引くように興奮した人の波が出口へと向かう。賭事に名残を惜しむ者などいるはずもない。今日一日で二十億円が水底に消えていったのだ。

三十分間ほど目の前を人並みが行き過ぎると、場内の人混みはもう疎らになっていた。五時半になると薄闇が辺りを包み始めた。行き交う者も制服姿のガードマンが多くなった。Mは卯月と連れだって非常階段の下に向かった。ピアニストと弥生はすでに到着していた。ピアニストが時計を見てから卯月にうなずく。Mと卯月は胸を張って非常階段を上っていく。同じ歩調で四階の踊り場まで上り、卯月がドアの前にうずくまって錠に鍵を差し込む。機械工学科の支持者が技術の粋を集めて作った万能のマスターキーだ。時間さえかければどんなドアでも開けることができるのは実験済みだった。しかし今日、卯月には錠のサイズしかデーターがない。十五秒ほどたってから錠が反応し、やっとドアが開いた。奥に長い廊下が見える。予想していたとおり、鍵を使っての侵入では警報は鳴らない。地上のピアニストと弥生に合図をしてから中に入り、ドアを細く開けて手で支えた。ドアが閉まると自動的に錠がロックされてしまうのだ。ピアニストと弥生が滑り込んでドアを閉めると、卯月がバッグから爆薬を出して錠の回りにセットする。素早く三人が背で卯月の作業を隠した。

本部の四階はシミュレーションの画面のとおり、廊下を挟んで大小の会議室が並んでいる。数個の非常灯だけが灯され、フロアは薄暗く、ひっそりと静まり返っていた。十年に一度有るか無いかのビックレースの最終日に開かれる会議などある道理がない。八十メートル続く長い廊下の果てに目的のエレベーターがある。ピアニストを先頭に、四人は堂々と廊下の中央を歩いて奥に向かった。大型の業務用エレベーターと小型の乗務用エレベーターの扉が並んでいる。見上げた表示では、二台とも一階で止まっている。時計を見ると五時四十五分だった。地階のエレベーターから銀行員が七階の会計室に上って来るまで、まだ十五分もある。四人はエレベーターの横の階段を上がって、踊り場で待機することにした。同じように地階で待つ突入班のことを思うと、強い連帯感が沸いてくる。

明るく照明された地階中央の身障者用トイレの中で、突入班の霜月と水無月、サポートの如月と神無月、皐月の五人が待機していた。客がいなくなり人影も途絶えた広い地階では、身を隠す場所はトイレしかない。五人の潜んだトイレは本部ビルへ続く通路のドアの前に位置していた。身障者用トイレは広いが、大人五人では身動きもままならない。四人

は立っていたが、霜月一人が尻を剥き出しにして便器に座っている。しくしくとした痛みが下腹部を襲い、醜い音を立てて下痢便を排泄する。異臭が狭い個室を覆った。苦しさに眉をしかめた霜月が神無月を見上げ、か細い声を出す。

「このままでは、俺が足を引っ張りそうだ。分担を代わってくれ。作業は水無月ができる。ただ走ればいいんだ。頼む」

便器に座り込んだ巨体が、消え入ってしまいそうなほど縮んで見えた。

「もちろん俺が代わる。サポートだけは糞を垂れ流してもやれよ」

神無月が冷たく言って、霜月が抱えていた爆弾を乱暴な手つきで取り上げる。

「丁寧に扱え。爆発したらどうする」

霜月が苦痛を堪えて叱責した。

「この爆弾はピアニストが爆破スイッチを押さない限り破裂しないさ。俺の運命はあいつに握られるんだ。霜月は運がいいよ」

皮肉に答えた声が震えていた。霜月の背筋を冷たい汗が伝う。確かに神無月の言うとおりだった。

「六時ジャストだ」

気分を変えるように、爆弾を抱えた神無月が言ってドアを開けた。廊下の向かいに本部ビルに繋がる地下通路の鉄のドアが見える。突入をサポートする如月が上着の下からベレッタを抜き、ドアから半身を出して左右を見渡す。そのまま一気に地下通路のドアの前まで走り、壁に背を向けて屈み込んで拳銃を構えた。皐月が後に続いた。水無月と神無月もドアへ走り、用意してきたマスターキーを水無月が錠に差し込む。

「遅い、まだか」

遅れてきた霜月が片手を下腹に当てて苦しそうな声を出した。水無月の胸ポケットで携帯電話が一回振動してやんだ。急いで時計を見る。

「葉月からサインがあった。銀行員が到着した。二分遅れだ。次のサインでゴーだ」

水無月が低い声で言ってマスターキーを回す。確かな手応えがして、錠が外れた。後は四階にいるピアニストのサインがありしだい、百三十メートルを疾走するだけだ。

携帯電話で葉月のサインを受信した強奪班もエレベーターの前に急いだ。見上げる表示板が点灯し、一階で止まっていた業務用エレベーターが地階に下りる。正面ゲートから入ってきた現金輸送車が地下ゲートに到着したに違いない。シミュレーションどおりだった。

ゲートで車を降りた銀行員が地階の警備員と合流し、二十億円を運ぶリヤカーほどもある台車を押してエレベーターに乗り込み、七階の会計室に向かうのだ。エレベーターの赤い表示ランプが地階に点いたことを四人が確認した。

「来るぞ」

ピアニストが低い声で言ってエレベーターの正面に立った。弥生が卯月とともに扉の左端に退く。Mは右端に寄り、卯月から渡された閃光弾を握り締めた。携帯電話を握ったピアニストが一心に表示ランプを見つめる。電話は地階の水無月と繋がれている。赤い表示ランプが三階に灯る。低いモーターの音が扉越しに聞こえ、七階までノンストップの直通にしたエレベーターが四人の目の前を上がっていった。すかさず、ピアニストが携帯電話のコールボタンを押した。

地階の通路ドアの前で待機した水無月の胸ポケットで、携帯電話が振動した。本部ビルへと続くドアが開かれ、無人の通路を二人が疾走する。通路を七十メートル走り、直角に曲がる。また三十メートル走った左手に二つのエレベーターがある。小型の乗務用エレベーターの扉の両側にリモートコントロールで作動する爆薬を三十秒でセットする。後は爆風が届かないように祈りながら全力で走り、角を曲がりきるのだ。

「速い」

四階の廊下にピアニストの驚愕した声が響いた。全員が表示ランプを見上げて戦慄した。七階に着いたばかりなのに、もうエレベーターが下り始めている。二十億円の現金はすでに台車に乗せて、会計室に用意されていたに違いなかった。計画は狂った。もはや突入班が時間どおりに脱出できることを祈るだけだ。生還の可能性はある。リハーサルは最短時間で何回となくこなしてきたのだ。きっとできるとピアニストは思い定めた。胸ポケットからリモートコントロールの起爆装置を取り出してから、ゆっくり床に伏せた。青ざめた表情の三人がピアニストに倣う。

表示ランプが五階に点灯した。容赦なくピアニストが爆破スイッチを押した。床に伏せた四人の身体を衝撃が突き上げる。低い爆発音が腹に響いた。四人とも目を大きく見開き、表示ランプを見上げて耳を澄ます。ビル中にけたたましく鳴り響く警報音に混じって低いモーターの音が響き、目の前の扉の向こうでエレベーターが止まった。爆発の衝撃を関知したセンサーが作動して直通エレベーターを最寄りの四階で止めたのだ。地震を想定した震災マニュアル対応のエレベーターはありがたいものだった。爆発の衝撃を地震と勘違いして、この階で止まってしまう。もうすぐ扉が開く。

開き始めた扉の隙間から、Mと弥生が閃光弾を投げ込む。爆発の轟音とともに白い閃光が薄暗い廊下にきらめいた。四人は床に寝ころんで両手で目を覆う。狭いエレベーターの中ではひとたまりもない。薄く目を開くとエレベーターの扉が大きく開き、四人の男がよろばい出てきた。Mと弥生が立ち上がり、瞬間的に盲目になってしまった男たちの背後に回った。用意した手錠を男たちの後ろ手にかける。抵抗できる者は一人もいなかった。エレベーターの中に飛び込んだピアニストと卯月は、畳ほどの大きさがある台車を廊下に運び出した。大きなジュラルミンのコンテナが山になってぎっしり積んである。Mと弥生が銀行員とガードマンをエレベーターの中に追い立て、扉の閉鎖ボタンを押した。振り返ると、台車はもう長い廊下の中程を進んでいた。二人は走って台車を追い越す。非常階段のドアまで行き、仕掛けた爆弾の安全ピンを抜いて爆破させた。大きな爆発音の割に衝撃も爆風もない。錠のあった部分にだけ穴が開いた。ドアを大きく開け放つと暗闇の中に睦月の顔が浮かんでいた。踊り場の手すりがすっかり切り取られ、睦月の乗った作業用のゴンドラが床と並行して接していた。コンテナを満載した台車を突き出し。五人掛かりでゴンドラにコンテナを積み込む。計画と違って作業ははかどらない。予定よりコンテナが多すぎて、ゴンドラに積みきれないのだ。金種別に別れたコンテナを、額面の高い順に表示を選んで乗せるしかなかった。台車のバランスを考えて、重い小銭が下に積んであったことだけがうれしかった。

広大な場内に鳴り響く警報音が季節外れの蝉時雨のように耳に障る。遠くからもサイレンの音が響いてきた。緊急車両が競艇場に殺到してくる。最初の爆発からもう五分が経過していた。正面ゲートの方角から前照灯と赤色灯を闇に輝かせ、救急車が飛び込んで来た。高所作業車の前に急停止し、すぐ明かりとサイレンを消す。極月と文月の離脱班が到着したのだ。二人が救急車を降りて後部ドアを大きく開けた。

「よし、離脱だ。残りは放棄する」

台車に残った十個のコンテナを見下ろしてピアニストが決断した。卯月が睦月の横に飛び乗ると同時に、ゴンドラが大きく揺れて宙に浮いた。修太が高所作業車のヘッドライトを灯して慎重にクレーンを操る。やっとゴンドラが救急車の床に並んだ。素早くコンテナの積み込みが始まる。四階に残った三人はベレッタを抜いて、背後の廊下と眼下の闇に身構える。

「犯人がいたぞっ。おとなしく投降しろ」

廊下の奥から怒声が響き、数人の警官が走ってきた。ピアニストが天井の非常灯に向け

て発砲した。十五発の銃弾が連続して手前から奥に向かって非常灯を撃ち壊していく。警官は床にぴったり伏せ、銃声が途絶えると同時に階段の陰に逃げ帰った。階段の陰から拳銃を抜いて応射してくる。積み残したコンテナで銃弾が跳ねた。ピアニストの横で弥生がベレッタで撃ち返す。廊下の奥からの発砲も増えてきた。パトカーが裏に回って来るのも、もう時間の問題だ。

「援護するから、非常階段を下りて救急車に乗り込め」

マガジンを入れ替えたベレッタを構えて、ピアニストがコンテナの陰から叫んだ。Mは躊躇する弥生の手を取って、一緒に階段を駆け下りる。目の下の闇で、ようやくコンテナの積み込みが終わった救急車が赤色灯を回転させている。高所作業車から飛び降りた修太が救急車の後部ドアに走った。飛び乗りざまドアを閉める。途端に救急車が発進した。

「待ってっ」

やっと非常階段を下りきったMと弥生の叫びをサイレンがかき消す。救急車は西側ゲートに向けて疾走して行った。取り残された二人の頭上で連続して銃声が響いた。全弾を撃ち尽くしたピアニストにマガジンの予備はもうない。スライドが開ききったベレッタを握って、転げるように二階の踊り場まで下りて来た。四階の踊り場から警官が身体を乗り出して発砲した。二階で釘付けになってしまったピアニストを援護して、Mと弥生が交互に射撃する。正面ゲートの方角から無数のサイレン音が聞こえる。通報を受けたパトカーが非常階段に向かって来るに違いなかった。

「ピアニスト、飛び降りるのよ」

Mが上を向いて叫び、ベレッタを連続して発射した。警官がドアの陰に隠れた隙を突いてピアニストが二階の踊り場から身を躍らす。コンクリートの地上に着地した足がよろけて、地面に倒れた。Mと弥生が走り寄って抱き起こし、三人で闇の中へ向かった。ピアニストが左足を引きずる。飛び降りたときに捻挫したようだ。背中で銃声が響き、三人の後ろの路上で銃弾が跳ねた。弥生が振り返ってベレッタを構え、四階の踊り場に向けて残った全弾を発射した。物陰に伏せた警官が再び発砲するまで、しばらく間があるはずだ。三人はフェンスを乗り越え、沼の畔にしゃがみ込んだ。飛鳥が壊した照明塔が望外の闇を提供していた。Mと弥生がベレッタに予備のマガジンを装填する。競艇ビルを回り込んで三台のパトカーが非常階段の下に止まった。三人から五十メートルと離れていない。

「出口無しね。沼に入るしかないわ。運がよければ対岸に上がれる。まさかこの寒さの中を水に入るとは思わないでしょう」

Ｍが提案すると、弥生もピアニストもそろってうなずく。ベレッタをフォルスターに入れて三人でコンクリートの護岸にうずくまった。沼に背を向け、音を立てないように足から水に入った。冷たい水に首まで浸かったが、足は底に着かない。できるだけ静かに立ち泳ぎを続ける。二百メートル先の対岸に行き交う車のライトが見えた。護岸に手を掛けて立ち泳ぎを続けながら非常階段から遠ざかる。服が泳ぎの邪魔をし、水の冷たさが全身を覆った。

「時間がかかりすぎる。沼を疑われて湖面を照らされる前に対岸に泳ぎ着くしかない。靴も服も脱いで裸になろう。泳げば身体も火照ってくる」

ピアニストが押し殺した声で提案した。三人は水の中で服を脱ぎ、靴を脱ぎ捨てた。脱いだ物を両手で持って大きく息を吸って水中に潜る。服と靴が浮き上がって来ないように護岸の底の隙間に厳重に押し込む。湖面の浮遊物を目撃されれば、警官が沼に集まってくるに違いなかった。再び浮き上がった三人は対岸を目指して泳ぎ始めた。できるだけ水を攪乱しないように細心の注意を払って泳ぐ。水面から競艇ビルを振り返ると、非常階段付近が投光車に照らし出されて昼のように輝いていた。場内の明かりも全部灯っている。三人のあぶり出しが始まったようだった。

ようやく岸に泳ぎ着いた三人は、急いでアシ原に踏み込んでいく。腰を曲げ、膝を折った低い姿勢で低いアシをかき分けて奥に進んだ。競艇ビルから差し込む明かりが三つの裸の尻を照らし出す。全身が寒さに震えた。踏み出す素足が泥田にはまり込んで沈み込む。底なし沼に呑み込まれるような恐怖が掠めた。やっと丈高いアシの間に入り込み、乾いた草地を見付けてしゃがみ込んだ。ピアニストを中心にして三人で抱き合い、素肌を擦り合って暖をとる。Ｍの左手首でタイメックスの燐光時計が光った。ピアニストが時計をのぞき込む。時刻は午後七時だった。

「参ったな。ここから市街地まで歩くと二時間はかかる。おまけに三人とも素っ裸だ。夜が更けるまで待って車を奪うべきかな。武器はあるんだ」

震える声でピアニストがつぶやいた。

「私はすぐ行動すべきだと思う。歩けば直距離で行ける。車だと夜は検問が厳しいわ。非常線が張られていると思った方がいい。まさか素っ裸で、てくてく歩いて市街に入るとは警察も思わないわ。足をくじいたピアニストにはかわいそうだけど、警察の裏をかける」

外していたフォルスターを左肩に吊りながら弥生が言った。白い乳房の横に並んだ黒い銃把が凶々しい。

「弥生の説が正論みたいね。脱出地域を限定できない警察が、畑や路地裏にまで目を光らせる余裕はないわ。歩きが一番安全で行動の自由が得られる。車を奪うのは発見されてからでも遅くない」

Mが弥生の説に賛同した。ピアニストがしばらく目をつむり、じっと考えてから口を開く。

「二人に迷惑をかけるかも知れないが、歩こう。一人は僕に肩を貸してくれ、もう一人が十メートル先を進む。最短距離で集結地を目指そう」

ピアニストの声で三人は行動を開始する。Mが白い尻を振ってアシ原を上り、一車線の路上をうかがう。道の向かいは低くなった畑が二十メートルほど続き、小さな林が遮っている。左右を見回し、車の途絶えたことを確認したMが道路を横断した。弥生に肩を預けたピアニストも後に続く。三つの裸身が畑を横切って林の中に消えた。一時間前の大事件が嘘のように、林の中は静まり返っている。時たま渡る冷たい風が、頭上で裸の梢を鳴らすだけだ。Mは急に首筋に寒さを感じた。手でうなじを探ると愛用のスカーフが無くなっていた。靴や衣服と一緒に沼底に沈めたことに思い当たる。途端に悔いが募った。連れ添ってきた祐子がいなくなり、一人で取り残された気がした。だが、同じ道を歩く者はいない。幾つかの交わらぬ道が並行して、ひとすじに続いているだけだと思い直す。

１１　集結地

極月の運転する偽救急車は闇の中を西側ゲート目指して突っ走った。長さ四百メートルの競艇ビルの裏を走り抜けると、広場の先にゲートが見えた。大きく開け放した門から続々と緊急車両が入ってくる。前照灯と赤色灯の光が交錯し、高く低く響き渡るサイレンとエンジン音に場内の警報音が混じり合った。極月は救急車の速度を落として競艇場を脱出するタイミングを計る。三台のパトカーが続けてゲートに進入し、消防隊の梯子車とポンプ車が地響きをたてて競艇ビルに向かった間隙を縫ってゲートに入った。わずかな差で後続のパトカーとすれ違わずにゲートを飛び出す。ちらっと横目で見た門衛の詰め所に人影はなかった。ゲートは開放されている。爆発後の十分間は競艇場をパニックが支配していた。

ゲート前のアプローチを抜ける交通信号は赤だったが、サイレンのボリュームをいっぱいに上げて県道に左折した。左手に七階建ての競艇本部ビルが見える。南側の屋上に突き出たエレベーター棟から赤い炎が吹き出ている。黒い闇の中で二本の銀色の梯子が炎に赤々と照らし出された。やっと梯子車の放水が始まったのだ。火が消えて負傷者が収容されれば本格的な捜査が始まる。

「霜月たちは無事だったかしら」

助手席に座る文月が幾分緊張の解けた声で話し掛けた。極月は黙ったまま救急車を走らせ、大きく弧を描いてコンクリートの高架の下を潜り抜けた。バイパスの東側を通る旧道に出る。もう振り返っても、バイパスの高架が邪魔になって競艇場は見えない。後続車と対向車のないことを確認してから赤色灯とサイレンを消した。幸い旧道は空いていた。昔ながらの田園風景が広がっているが、競艇場からは歩いて十五分の距離だ。四車線のバイパスに隔てられただけで反対側の風景はまるで違う。しかし、所々にアスファルトで整地した広々とした駐車場があった。競艇場が農地を買い取って整備した無料駐車場だ。競艇場からは少々遠いが、五百円の駐車料を払うより舟券を買った方がよいという熱心なファンには好評だった。偽救急車はさり気なく右折してカーブ際の目立たない無料駐車場に進入した。ヘッドライトを消して、まっすぐ奥に向かって徐行する。ライトを消す寸前に極月は右手奥に駐車した大型トレーラーを確認した。

農地の北の防風林に沿って二台の大型トレーラーが後ろ向きに止まっている。駐車場に

入る道路からは死角に当たる場所だ。頭上を走るバイパスからは見下ろせたが、バイパスを歩く者はいない。一台のトレーラーの右側で小さな光が地面に向けて振られた。合図を確認した極月が車の向きを変え、光が振られた方角に徐行して走る。バイパスに並ぶ水銀灯の光を微かに浴び、防風林と見まがいそうな黒い影となったトレーラーに近寄っていく。三メートル四方もある荷台の扉が大きく開け放され、二本のスロープが地上に延びていた。葉月と長月が扉の左右に分かれて懐中電灯でスロープを照らし出している。極月はできる限りスピードを落とし、慎重に前輪をスロープに乗り上げた。

「オーライ、そのままでオーライ」

車の後ろから響く低い男の声にうなずき、極月がアクセルを踏み込む。一段高くエンジンが吼え、偽救急車は車体を揺すってスロープを越えた。見る間にトレーラーの中に吸い込まれる。即座に長月と葉月がスロープを収納して扉を閉めた。偽救急車の収容は一分とかからなかった。

「なぜピアニストと弥生がいないの」

トレーラーの車内に極月の叫び声が反響した。偽救急車の後部ドアを開けて降り立った修太と睦月、卯月の顔が曇る。ドアの前で三人を迎えた極月の頬が震えている。横に立つ文月の顔も青くなっていた。トレーラーの天井から落ちる小さな明かりが五人の姿をわびしく照らし出している。救急車の中に山積みになったジュラルミンのコンテナが怪しく光った。乗っているはずのピアニストと弥生、Mの姿はない。

「私は全員そろったと言う修太の声で車を発進させた。なぜ嘘をついて三人を見殺しにしたの」

極月が一歩を踏み出して修太に迫った。人員を確認しなかったことを極月は悔やんだが、あの場で点呼をとることはできない。外から車内が見えないように、運転席の後部を黒い板で仕切ったことが裏目に出たのだ。

「計画が狂った」

ぽつりと修太が答えた。続いて胸を張って言い募る。

「ピアニストたちを待てば必ずパトカーに追われた。待たずに発進したお陰で、救急車は誰にも見られなかった。使用した車を警察は特定できない。絶妙のタイミングで俺たちが優位に立てたんだ」

「犠牲になった三人はどうなるのよ」

極月の勢いが弱まっていた。修太は断固とした声で答える。
「ピアニストはプロジェクト・リーダーなんだ。自分の責任と指導力できっと生還する。そうでなければリーダーとは言えない」
「そうよ」
修太の横で睦月が同意した。
「あの状況では、ピアニストも同じ決断をしたと思う」
卯月の乾いた声が、その場の意見をまとめ上げた。
「ピアニストが生還するまでは俺が指揮を執る。さあ車をワイヤーで固定するんだ」
極月が黙って退く。何も言わない文月の顔を横目でにらんだが、文月は下を向いて黙々と作業を始める。強奪した二十億円を偽救急車ごと収容したトレーラーの中に不協和音が満ちた。

トレーラーの中で修太と睦月は運送会社の作業服に着替えた。極月と文月は偽救急車の運転席に戻り、卯月が二十億円と一緒に後部席に乗った。修太と睦月がトレーラーの扉をそっと開けて地上に降り立つ。長月と葉月が近寄ってきた。四人でトレーラーの扉に錠を下ろした。
「何の異常もない。静かな春の宵だよ」
長月が掠れた声で言った。
「悪いニュースがあるわ」
葉月が暗い声を出した。
「さっきラジオで聴いたけど、突入班の五人が全滅したわ。一人が胸を打たれて重傷を負った他は全員死亡。二人は爆風に巻き込まれ、二人は射殺された」
葉月の沈痛な声が響いた。修太の足が細かく震える。
「突入班は難しいポジションだったわ。男四人が中心になって受け持ってもだめだったのね。皐月がかわいそう」
睦月が意外に冷静な声で言った。
「一人は逮捕された。この先も計画通りでいいのだろうか」
四人の心をよぎった不安を長月が言葉にした。
「シミュレーションでも誰かが逮捕されることを織り込み済みだ。誰が生き残ったとしても、計画を漏らす者はいない。俺たちは強盗団ではないんだ。心配は要らない。仲間を奪

還する楽しみも増えた」

修太が力強く答えた。奪還という言葉が三人を力付けた。トレーラーの中には二十億円の軍資金があるのだ。

「もうじき七時だ。劇団の公演が始まる。五分間アイドリングして、エンジンが暖まったら市街地に戻ろう。長月と葉月が先頭だ」

明るい声で言った修太が睦月と一緒に運転席に回る。長月と葉月ももう一台のトレーラーに向かった。太いエンジン音を轟かせて二台の大型トレーラーが発進した。トレーラーは駐車場を抜け出し、旧道を競艇場の方角に左折した。大きく弧を描いた道路の分岐点で右折してバイパスに乗り入れる。

「検問は大丈夫かしら」

運転する修太の横で、睦月が心配そうな声で言った。

「検問はない。あったとしても反対車線。市と競艇場を出ていく車だけが対象だ。市に戻ってくる車を慌てて検問する必要はない。網は広げるものではなく絞り込むんだ。警察は無駄なことをしない」

修太が断言したとおり、二台のトレーラーは順調に走り水瀬川を渡って市街地に入った。産業道路から官庁街に向けて左折し、市役所の新館に向かう。中央に分離帯のある四車線の道を二台の大型トレーラーがゆっくり走る。後続の乗用車がミズスマシのように追い越していった。

トレーラーのフロントガラス越しに異様な建物が見えてきた。巨大な楕円形の半球を屋根にした奇怪なフォルムが闇の中に浮かび上がっている。広いドームを逆さまにして屋根にしたような建築だ。市が五年の歳月をかけて造り上げた文化の殿堂、繭玉会館の威容だった。大きく張り出した屋根は織物で栄えてきた市の歴史をイメージした繭型屋根と呼ばれていた。屋根の高さは手前に建つ七階建ての市役所新館より高い。二千人を収容できる大ホールが自慢だった。昨年末のオープンから、まだ三か月と経っていない。

「あの会館が、コスモス事業団の文化部門の拠点になるはずだったんだ」

フロントガラスの視界に入りきれなくなった巨大な会館を見つめて、修太がしんみりした声で言った。

「私たちの集結地にふさわしいわ」

睦月の明るい声が響いた。

「まったくだ」

修太も明るく答えた。二人の小さな笑い声が運転席に満ちた。長月の運転するトレーラーが左折して市役所新館の構内に入っていく。広い駐車場の奥まで進み、隅に寄せてトレーラーを駐車させた。午後七時半になるのに駐車している車が多い。隣の繭玉会館で今夜公演している、劇団文学界の芝居を見に来た観客の車のようだった。オープン記念のこけら落としシリーズは演劇部門でも好調のようだ。きっと会館の駐車場は満車なのだろう。終演まで市役所の駐車場で待つことになる。二台のトレーラーはエンジンを切り、静まり返った駐車場の闇に溶け込んでいった。右手後方には、二か月前にエレベーターを爆破されたばかりの市庁舎本館が小さく見渡せた。

午後九時のニュースがカー・ラジオから流れてきた。修太と睦月が耳を澄ませる。

「今日午後六時過ぎに競艇場で強奪された現金の総額が判明しました。強奪されたのは十五億二千五百六十八万七千円です。犯人たちは一万円札の入ったコンテナのすべてと、五千円札、千円札の入ったコンテナの一部を強奪しました。強奪現場の競艇ビルでは、爆発物によりエレベーター一基が爆破されました。この爆発と警察官との銃撃戦の結果、犯人四人の死亡が確認され、一人が重傷を負っています。重傷者の意識ははっきりしているようですが、シモツキという言葉以外は一言も話しません。捜査当局では、爆発物や銃器を使用した手口から見て、大がかりな組織的犯行との見方をしています。いまだ犯行声明はしていませんが、二か月前に市庁舎本館を爆破した、テロリストグループのシュータの犯行である可能性も残されています。現金が強奪された競艇本部ビルの四階で、警察官と銃撃戦を演じた三人の男女はまだ逃走中です。警察では三人はまだ競艇場内に潜んでいると見て、徹底した捜索を続けています。なお奪われた十五億円の搬出経路と搬出方法もまだ判明していません。犯行前後に不振な車両の目撃者がいないことから、パトカーや救急車などの緊急車両に紛れて現金を搬出した可能性もあります。警察では競艇場内の捜索と合わせ、逃走に使用された車両の発見に全力を注いでいます。また今回の現金強奪事件では、エレベーターの爆破と銃撃戦により、犯人以外にも負傷者が出ています。警察官と警備員、合わせて二十九人が重軽傷を負っています。負傷者全員が近くの病院に収容されていますが、いずれも生命に別状はありません」

「十五億か、凄い」

修太が溜息とともにつぶやいた。

「ピアニストたちは戻ってくるかも知れないわね」

助手席の睦月が不安そうに言った。二人は横を向いて見つめ合う。駐車場の外灯の光が緊張した二人の顔をぼんやりと照らし出した。睦月を見つめる修太の顔が徐々に興奮してくる。

「とにかく大成功だ。ピアニストが戻ってもいいし、戻らなくても、海外で大使館でも占拠して霜月と一緒に奪還することだってできる。十五億円もあるんだ」

修太の差し出す右手を睦月が握り返した。二人の顔が輝き、握り合った手に力がこもった。

午後九時半に繭玉会館の芝居がはねた。今夜の演目「クレオパトラ」に感動した面持ちの観客が市役所の駐車場にも帰って来る。修太たちは運転席で寝ころんだまま十時半まで待った。会館は十時で閉館だった。劇団文学界のスタッフは全員、市が用意したホテルのパーティに出席したはずだった。会館にはもう二人の警備員しか残っていない。大道具の搬出に来たトレーラーを疑うはずがなかった。たとえ実際の搬出の予定が明朝であっても、運送会社からの予定変更の電話と劇団幹部を装った飛鳥を前にしては警備員も納得するしかない。現金強奪計画を持ち掛けてきたときから続く飛鳥の役者振りには、ピアニストが舌を巻いていた。修太にも異存はない。

二台のトレーラーはゆっくり市役所の駐車場を出て繭玉会館の裏手に回る。先ほどとは違い、修太の運転するトレーラーが先頭になった。巨大な繭型屋根が張り出した広いスロープをバックで下り、半地下になった大道具搬入口のシャッターの前にトレーラーの後部をつけた。隣りに長月の運転するトレーラーが並ぶ。エンジンを切ると同時に、搬入口の巨大なシャッターが上がっていく。長さが十メートルもある軽合金のシャッターは、三メートル上がったところで止まった。修太と睦月が運転席から飛び降り、搬入口によじ上ってトレーラーの扉を開け放した。中からエンジン音が響き、極月の運転する偽救急車がゆっくりバックして出て来る。奈落に空いた窓のような搬入口から闇の伽藍に見える舞台奥へと、両手に懐中電灯を持った飛鳥が極月を誘導する。

緞帳の上がった大ホールの舞台にはエジプトの神殿をかたどった大道具が置かれたままだった。つい一時間前、この舞台の上でアントニウスがクレオパトラに抱きかかえられて息を引き取ったばかりだ。まだ熱気の残る二千席の椅子に見守られ、非常灯にぼんやりと照らされた神殿の中に上手からゆっくりと救急車が入ってくる。余りにもアンバランスな取り合わせに、幻の観客が息を呑む音が聞こえてきそうだった。観客の中にはきっと、ア

ントニウスを収容に来た救急車が繰り広げる現代劇の展開を予感して、身を乗り出す者がいたかも知れない。だが、偽救急車は舞台の上でハンドルを三回切り替えして向きを変え、そのまま舞台下手奥へ退場してしまった。

極月は小道具搬入口の扉の前まで偽救急車を前進させてから停車した。扉を開ければそのまま、小ホールの陰になった東側の中庭から産業道路に出られるのだ。エンジンを切って、極月と文月、卯月の三人が舞台に戻ってきた。大道具搬入口のシャッターを閉めた修太と睦月、長月と葉月の四人も合流した。

「これで全員かい。犠牲者は出たが、とにかくおめでとう。さすがはシュータだ。計画を立てた甲斐があったよ」

相変わらずダークスーツを着込んだ飛鳥が頬を上気させて全員を見回す。

「ピアニストたち三人が遅れているが、今後も計画どおりでいいね。残念ながら人数が減ってしまい、一台のトレーラーは邪魔になった」

飛鳥が修太の顔を見つめて念を押した。

「変わりはない。計画どおり午前零時まで待つ。三人が来られなかったら予定どおり出発だ」

修太が飛鳥の目を見てきっぱりと言った。

「リーダーの代理がしっかりしていてくれてうれしいよ。警備員の巡回はちょうど午前零時だ。時報に合わせて爆破しよう。後は救急車とトレーラーに分乗し、騒ぎに紛れてここを脱出する。まさか半日足らずの間に二回も爆発騒ぎがあるなんて、誰も想像していない。県境を越えるのは簡単だ。救急車は大活躍だよ。まあ、お祝いに一杯やってくれ。オシショウがビールをおごるそうだ。もうじき来るだろう」

飛鳥の声に全員が喉の渇きを意識した。だが、修太が踏みとどまる。

「いや、爆破の準備が先だ。見張りも置かなくてはならない。睦月はトレーラーに戻ってくれ。極月は正面玄関を見張れ。俺と卯月はエレベーターに爆薬をセットする。他の者はここで待機」

すっかりリーダーが板に付いた修太が命じた。

「ちっ、オシショウは遅すぎる」

小さくつぶやいて飛鳥が舌打ちをした。黒いバッグを抱えた卯月と一緒に舞台を下りた修太が訝しそうに振り返った。素知らぬ顔で笑い掛けた飛鳥が二人に続いて舞台を下りる。広い客席の間の通路を一列になって抜け、三人はホールの出口に向かった。二重になった

扉を開けると、二階まで吹き抜けになった広いエントランスホールの先に四基のエレベーターが並んでいた。ガラス張りの透明なエレベーターが繭型屋根の上に載った四階の大会議室まで利用者を運ぶのだ。修太と卯月は左端のエレベーターの前にひざまづいて扉の左右に爆弾をセットした。修太がリモートコントロールの起爆装置を取り出し、受信機に向けて同調させる。

「爆破の時は、どこを操作するんだい」

二人の後ろから作業をのぞき込んでいた飛鳥が真剣な声で聞いた。戻ってこない返事に苛立った声でまた尋ねる。

「その赤いボタンを押すと爆発するのかい」

「どこで押すかによるさ。爆弾の前で押せば時限装置が作動する。五分後に爆発するようになっているんだ」

なに食わぬ顔で修太が答えた。横で聞いていた卯月が驚いた顔で修太を見た。修太は小さく首を振って立ち上がり、大ホールへ戻ろうとする。

「準備完了だな。もうオシショウが待っているはずだ。ステージで乾杯しよう」

飛鳥が陽気な声で言って先頭に回り、大ホールのドアを両手で開けた。神殿の舞台の下手エプロンに小さなテーブルが置かれ、二本のビール瓶とグラスが用意してあった。

「みんな良くやった。惜しまれて戻ってきた者たちは光り輝いているぞ。さあ早く、その渇ききった喉を癒すがいい」

オシショウが舞台に戻ってきた修太たちに声を掛けた。舞台に残っていた長月と葉月、文月の三人はもうグラスを手に持たされている。飛鳥が素早くグラスをとって卯月に渡す。ビール瓶を持ってなみなみと注いで回った。

「修太はすっかり、リーダーらしくなった」

オシショウが修太にビールを勧める。もう拒否することはできなかった。持たされたグラスにビールが注がれる。思わず修太の喉が鳴った。オシショウが自分と飛鳥のグラスにもビールを満たした。飛鳥がさり気なく周りを見回してビールが行き渡ったことを確かめる。小さくうなずくと、オシショウが背筋を正して口を開いた。

「神ながらの道も、いよいよ海外に雄飛することになった。誉れ高く逝ってしまった者たちを惜しみ、喉を刺す美酒を飲み干そう。乾杯」

オシショウの短い挨拶の間にも、修太たち実行グループの乾いた喉が鳴った。乾杯の合図とともに、一斉に冷えたビールを飲んだ。

「ウウッー」

修太が一息にビールを飲み干すと同時に、両隣から呻き声が上がった。四つのグラスがステージに落ち、四人の身体が床に倒れた。卯月と長月、葉月、文月の四人が喉を掻きむしって苦痛に悶え、大きく全身を痙攣させてから急に静かになった。一瞬のできごとだった。素早く飛鳥が修太の背後に回った。相次いで倒れ伏した仲間を見下ろしたまま戦慄する修太の両手が、背中にねじ曲げられる。音を立ててグラスが床に落ちた。ぼう然として立ちつくす修太の後ろ手に飛鳥が乱暴に手錠をかけた。冷たい手錠の感触で我に返った修太が、大きく目を見開いてオシショウを見た。飛鳥の乾ききった声が耳元に落ちる。

「青酸カリというのは効きが速い。あっけないほどだ。思い悩む時間の余裕さえない。だが、まだ役目が残っている修太には青酸カリはやれない。事件の責任を取ってから滅びるんだ」

言い終わった飛鳥が修太の背を乱暴に突いた。力の抜けきった足がよろめき、修太は舞台に倒れ伏してしまう。急降下する視界の隅に、にこやかに微笑んでいるオシショウの顔が映った。オシショウは修太を見ようともしない。面倒くさそうに卯月の死体の前に屈み込んだ。フォルスターごとベレッタを外して立ち上がり、テーブルの上のビールの横に置いた。修太の前に屈み込んだ飛鳥が、口にきつく猿轡を噛ませた。エジプトの神殿が冷ややかに一連の出来事を見下ろしている。時刻はとうに、午後十一時を回っていた。

１２　ひとすじの道

Ｍと弥生、ピアニストの三人はやっとの思いで市街地に入り、官庁街に足を踏み入れた。左足を負傷したピアニストを庇って進む道のりは、潜んでは歩き、歩いては潜みの繰り返しだった。幸い見咎められることはなかったが、競艇場から六キロメートルを歩くのに四時間もかかってしまった。三人とも素っ裸のままだ。ここまで来る間に農家や住宅の物陰に何度も身を潜めたが、仕舞い忘れの洗濯物に出会うことはなかった。さすがに寒さが身に滲みる。

「銀行の角まで二十メートルはあるわ。見通しがよすぎるから走るしかない」

Ｍが小声で言って、駐車場の看板の陰から左右を見渡す。人影はなかった。慎重に耳を澄まして車のエンジン音を聞き取る。

「行くわ」

背後にうずくまる弥生とピアニストに短く言って、歩道に駆け出していった。銀行の玄関まで走って裸身が振り向く。踏み出した足を伸ばし、腰を低く落とした。尻の割れ目が大きく開き、踏ん張った両足の筋肉が力強く引き締まっている。一瞬静止した裸身が、まるで彫刻を置いたように美しく見えた。鍛え上げた肉体が次の行動に備えて身構えている。続いてピアニストの腕を肩に回した弥生が歩道に現れた。大きく見開いた目に外灯の明かりが反射する。揺れる乳房の横に吊ったベレッタの銃把も黒く光った。銀行の角で待つＭの所まで走った二人が前方を見つめて驚愕する。広々とした四車線の道路を挟んで繭玉会館の威容がそびえ立っていたが、会館から突きだした小ホールまで視界を遮る物がない。会館の広場を含めた二百メートルを遮蔽物に隠れることなく走り抜けなくてはならなかった。今いる所さえ道路から丸見えなのだ。逡巡する余裕もない。弥生が切迫した声を出す。

「Ｍ、肩を貸して。二人でピアニストを持ち上げましょう」

声にうなずき、Ｍが右肩をピアニストの脇の下に入れた。二人で腰を落とし、タイミングをとって立ち上がる。そのまま四車線の道路を横断する。ピアニストも懸命に片足で路面を蹴った。三つの裸の尻が一線に並んで三人五脚でゴールの小ホールを目指した。やっとの事で三人は巨大な杯を伏せたような小ホールの陰に回り込めた。途端にヘッドライトの光が道路に交錯してエンジン音が響いた。すんでの所で目撃されずに済んだのだ。冷たくなった肌に冷や汗が滲み出す。鍛え上げた三つの裸身が、しばらくの間肩で息をついた。

ピアニストの呼吸が苦しそうだ。左足首が無惨に腫れ上がっている。曲面を描く小ホールの壁に沿ってゆっくり進んでいくと、見通しの利かない場所に小さな窪みがあった。ホースや進入指示の柵を格納しておく収納庫になっている。三人がやっと入れるほどのスペースだったが、かろうじて寒風がしのげた。

「私が中の様子を見てくるわ。Mはピアニストとここにいて」

ピアニストの腕を肩から外して、弥生がMに提案した。

「いいえ、私がいく。弥生はピアニストを温めて上げなさい」

言ってしまってから、Mは意地悪な言葉を後悔する。

「いいよ、二人で行ってくれ。僕は子供じゃない。一人で大丈夫だ。館内に異常がなかったら、すぐ呼びに来てくれ」

ピアニストが痛みをこらえて二人に命じた。股間で縮こまったペニスが貧相に揺れている。じれったさが全身に溢れていた。

睦月はトレーラーの運転席から外の見張りを続けていた。配置について五分で退屈してしまったほど、周囲には異常がない。楽屋口に入って来る人影はおろか行き交う車両の気配さえ疎らだった。見上げる位置にある道路から半地下になった楽屋口まで、弧を描いて下るスロープの奥に二台のトレーラーは止まっている。頭上から落ちる外灯の光を浴びて周囲は明るい。運転席だけが陰になっていた。不意にスロープの曲がり鼻に人影が現れた。睦月はぎょっとして助手席に置いた拳銃に左手を伸ばす。重い手作りの拳銃を右手に持ち替え、じっと前方を見つめた。人影はスロープの壁に背中をつけて三十メートル離れたトレーラーをうかがっている。水銀灯の青い光と、ナトリウム灯のオレンジ色の光が混じり合って侵入者を余さず照らし出す。眠そうだった睦月の目が大きく見開かれた。侵入者は素っ裸だった。それも女だ。続いてもう一人、素っ裸の女が現れた。互いに五メートルの間隔を開けて近寄ってくる。睦月の口元に笑みがこぼれた。弥生とMに間違いなかった。無防備に股間を開き、尻を壁につけて進んでくる姿が滑稽でならない。閉め切った運転席に笑い声が満ちた。人の気配を察したらしく、二人が前後してしゃがみ込んだ。乳房の横に吊ったフォルスターに手を伸ばして前方をうかがう。路面に片膝を突いた股間が大きく割れ、外灯の光が黒々とした陰毛を照らし出した。睦月は笑いをこらえて運転席の窓を開け、二人に手招きした。

「とうに懲罰期間は終わっているわ。よっぽど裸が好きなのね」

運転席の下に近寄ってきた二人の頭上に、睦月が冷やかしの言葉を落とした。
「みんな無事なの。異常はないのね」
冷やかしを無視して、弥生が切迫した口調で問い掛けた。答えの代わりに問いが戻ってくる。
「ピアニストはどこにいるの」
仕方なく弥生がうなずく。いらだちが込み上げてきたが、何としても欲しい情報は睦月が握っていた。妥協するのは弥生の方だ。
「ピアニストは小ホールの横にいるわ。足を負傷したのよ。みんなはどうしたの、無事でいるの」
再び弥生が問い掛けると、睦月が眉をしかめた。
「無事といえば無事ね。弥生たちが帰ってきたから強奪班も全員生還したわ。収容班と離脱班は言うまでもない。突入班の戦果は大ホールにいる修太に聞くといいわ。そこの通用口から中に入れる」
答えに結論はなかった。だが、計画の大部分が成功したことは二人にも知れた。睦月は口をつぐんで背後の通用口を指し示している。もうとりつく島もない。思わせぶりな言葉が、小さな喜びと大きな不安を二人に残した。Mと弥生は心急くまま、示された通用口に急いだ。玄関ドアほどの鉄扉を開けると温かな空気が二人の裸身を包んだ。寒風に晒されてきた素肌が喜びに震える。広い舞台ふところは暗い。非常灯のぼんやりした明かりだけが足元を照らしている。高さ三メートルの大道具の向こう側から光が洩れている。Mと弥生は舞台の上手に回り込んでいった。静まり返った大ホールの下手エプロンに小さなテーブルが置かれていた。テーブルの上ではランタンが輝いている。明るい光が白い髭もじゃの顔を照らし出していた。Mと弥生が一斉に叫ぶ。
「オシショウ」
呼び掛けにうなずき、折り畳み式のパイプ椅子に座っていたオシショウが立ち上がった。
「やっと来たか。ずいぶん遅れたが、見事な裸身が舞台に映える。みんなも待ちかねているぞ。さあ、こっちに来なさい」
ステージ奥に目をやってからオシショウが二人を招いた。Mと弥生の位置からはステージの奥が見えない。だが、言葉を聞いてほっとした二人の目が輝きだす。修太や極月、霜月たちに早く会いたいと思い、足が早まる。
「そこまでででよい」

突然、オシショウの険しい声が響いた。ベレッタを握った右手を挙げ、二人の顔に向けて順番に照準をつける。

ズガーン

いきなり銃声が響いた。二人の足元の床に銃弾がめり込む。驚いて立ちすくんだ二人の手首に、背後から飛鳥が手錠をはめた。再び静寂が戻る。舞台に集まっているはずのメンバーたちの反応はなかった。

「おとなしくした方がいい。オシショウは本気で撃つ。ついさっき悲劇の第一幕が終わったばかりだ」

耳元で飛鳥の低い声が響いた。Mと弥生を背中合わせにして互いの手首を二本の手錠で繋ぎ合わせた。

「ほらそこで、一足先に旅立った者たちが集い合っている」

オシショウの冷ややかな声が流れた。声に打たれたように二人がステージ奥を見た。エジプトの神殿をかたどった大道具の前に四つの死体が転がっている。死体の前に後ろ手錠をかけられた修太が正座している。膝が崩れないように縄で厳重に縛られ、猿轡をきつく噛まされていた。鼻から低い呻きが漏れ続けている。Mと弥生の裸身が硬直し、心臓が凍り付いた。触れ合った尻の筋肉が緊張する。恐怖と怒りが、鳥肌立った二人の素肌を交流した。

「裏切ったのね」

Mが悲痛な声を出した。やり場のない恥辱が全身を駆け巡る。

「いや、希望をかなえてやっただけだ。道を説くだけでは空しさが残る。実践してみせることが功徳なのだ。この者たちはもう、滅びを惜しむ必要もない」

オシショウの詭弁が客席に流れた。飛鳥が楽しそうにMと弥生の裸身を見回し、乳房の横のフォルスターからベレッタを抜き取る。

「オシショウの希望では、全員に滅びをプレゼントしたいらしい。だが強奪事件の責任を負ってもらう役が必要だ。修太かピアニストのどちらかは滅びるわけにはいかない。裁判の結果を待ってから滅びてもらうことになるね」

飛鳥が解説者気取りで説明した。Mの正面に回って言葉を続ける。

「ピアニストがいないようだけど、どうせMと同じで素っ裸なのだろう。パンツでも捜しているのかい。でも約束は約束だ。午前零時までは待つよ。ちょうど後三十分だ」

弥生の尻の震えが素肌に伝わる。弥生も飛鳥の言葉を理解したのだ。確かに、全員を殺

してしまっては飛鳥とオシショウが逃亡した後の追及が厳しい。地の果てまで捜索の手が伸びるだろう。警察と世間が納得できる逮捕者が要るのだ。首謀者と呼べる者はオシショウとピアニスト、修太の三人しかいない。そして、生け贄に選ばれた修太が目の前で縛られている。他のメンバーの運命は、すでに決まっているのだ。

「Mには手錠は似合わないね。やはり縄がいい。自分でもそう思わないか」

突然、飛鳥が場違いなことを言った。ロンジンの腕時計から上げた目がMの胸を見つめている。粘り着くような視線だった。時間を持て余しているに違いないとMは思った。計画どおりの進行しかできない飛鳥は、待ち時間が不安でならないのだ。官能で不安を紛らわせようとしている。せっかくの才能に応用力と決断力が伴っていなかった。そうだとすれば、舞台に転がった四つの死体の仲間入りをするまでには三十分が残されている。まだ生き残る道はある。時間を稼げばピアニストか睦月がやってくるに違いなかった。チャンスが開けるかも知れない。今は飛鳥の欲望に応え、虐殺の決断をそらさせるしかない。

「飛鳥に縛られてみたいわ」

陰湿に燃える飛鳥の目を見つめてMが言った。唾を呑んでうなずいた飛鳥が大道具の裏へ消えた。荷物の梱包に使った麻縄の束を持って戻ってくる。オシショウはなんの興味も示さず、黙ってビールを飲み、飛鳥の行動をながめている。だが、右手はベレッタを握ったままだった。飛鳥が用心深くMと弥生を背中合わせに繋いだ手錠を外し、フォルスターを取り去る。弥生の後ろ手を改めて手錠で拘束した。オシショウの拳銃を意識した二人に反撃のチャンスはない。飛鳥はMの裸身をオシショウの正面に向けて晒した。麻縄を持って背後に回り、剥き出しの尻を指先で突く。縛りやすいように後ろ手になれという合図だ。Mは屈辱に奥歯を噛みしめ、黙々とビールを飲むオシショウをにらみ付けた。

背中で高々と交差したMの両手を飛鳥が厳重に縛り上げる。後ろ手を縛った縄尻を高く引き上げ、首の両側を通して胸元で結び目を作った。荷造り用の太い麻縄が素肌を責める。二本の縄が左右に分かれ、豊かな乳房を菱形に囲んで緊縛する。臍の回りにも菱形の縄目ができた。長く延びた縄尻を持って、飛鳥が股間に屈み込む。

「この縄で股間を縛る。陰唇に吊したかわいいリングに縄を通してやろう」

Mの顔を見上げて飛鳥が言った。口元に嫌らしい笑いを浮かべている。目の前には切れ上がった股間がある。黒々とした陰毛の間に金色のリングがぶら下がっている。飛鳥の長い指が二枚の陰唇を繋いだリングを摘んだ。臍の前の結び目から下ろした縄を慎重に輪に通してから、再び背後に回った。

「股縄がずれないように、結び目を尻の穴に入れてやるよ」

背中に陰惨な声が落ちた。飛鳥が楽しそうに縄の長さを測って大きな結び目を作った。

「さあ、足を開いて尻を突き出せ」

淫らな興奮を隠そうともせず、飛鳥が震え声で命じた。Mは痛みが少なくて済むように両足を大きく広げた。腰を曲げて高々と尻を突き出す。陰門に食い込んだ縄が乱暴に引かれた。固い結び目が肛門に分け入る。つらい呻きが口を突いた。

「何度見ても、本当に色っぽい尻だ」

腰縄に縄尻を縛り付けた飛鳥がつぶやき、平手で尻を叩いた。小気味よい音が舞台に響き渡る。冷え切った尻が飛び上がるほど痛んだ。飛鳥は数歩下がり、まぶしそうな目で舐めるように裸身に見入る。抑えのきかないかん高い声がMの耳を打った。

「足を開いたまま、ゆっくり回るんだ」

命じられたとおりMが回転する。動く度に陰門に食い込んだ縄が股間を責める。ザラザラした麻縄の結び目が肛門を泣かせる。引き締まった尻が切なそうに揺れた。

「飛鳥、何をしているんだ」

不意に舞台の袖口から大声が響いた。よろけながら回転するMの目に、足を引きずって近付いてくるピアニストが見えた。素っ裸の肩に吊ったフォルスターが歩みに連れて揺れている。緊縛に泣くMは情けなさに身を震わせた。思わず頬が赤くなり、目をつむりたくなる。事情を知らないピアニストが飛鳥を叱責したくなるのは分かるが、余りにも場違いだった。滑稽にさえ見える。おまけに睦月までついて来てしまっていた。最悪の展開だった。

「ピアニスト、戻って」

後ろ手錠で縛られた弥生が身体を揺すって悲鳴を上げた。全身に悔しさが満ち溢れている。だがもう遅かった。ピアニストは背後に睦月を従え、舞台上手から登場してしまっていた。睦月がピアニストの背中越しに、いち早くステージ奥を見た。転がっている四つの死体と縛られた修太の姿が一瞬に全神経を沸騰させた。はじかれたようにピアニストを押し退け、睦月は舞台正面で仁王立ちになった。震える手で拳銃を引き抜く。

「裏切り者は死ね」

大声で叫んでオシショウに銃口を向けた。まっすぐ伸ばした右手の先で、銀色に光る拳銃が激しく揺れた。オシショウは動じる気配もない。ビールのグラスをゆっくりテーブルに置き、代わりにベレッタを握った。素早く銃口を上げて引き金を引く。ベレッタが火を

噴き、残響が響き渡った。右肩を打ち抜かれた睦月がステージに投げ出される。銃創から吹き出す血を引きずって、睦月は呻きながら修太の方に這い進んで行く。猿轡を噛まされた修太が目を大きく見開き、這い寄って来る睦月を見た。憎しみと恐怖と愛が混じり合った真っ白な目だった。

悲劇の第二幕が幕を開けた。舞台中央を境に左右に役者が揃った。下手エプロンには全裸で縛られたMと飛鳥が立ち、小さなテーブルを前にしてオシショウが椅子に座っている。センターよりの場所に後ろ手錠で戒められた弥生の裸身がピアニストを向いて立っている。上手には素っ裸のピアニストが仁王立ちしていた。美しい弥生の裸身を挟んで、二人の裏切り者と遅れてきたヒーローが対峙している。エジプトの神殿のセットが舞台を彩り、四つの死体が物語の展開を暗示する。観客がいれば喜ばないはずがなかった。啜り上げる睦月の泣き声だけが静けさを破っている。

ピアニストが胸のフォルスターからベレッタを抜いた。見つめる弥生の顔が曇った。縛られたMも全身が緊張する。ピアニストは競艇場で弾丸を撃ち尽くしてしまい、ベレッタの弾倉は空なのだ。だが、もう幕は上がっている。今更弾がないことを気付かせても事態が好転するはずもない。

「ピアニスト、滅びを急ぐことはない。拳銃を捨てろ。弥生まで道ずれになるぞ。こちらにはベレッタが二丁ある」

オシショウがあざける声で言って、テーブルの上のベレッタを飛鳥に渡した。飛鳥がMの裸身を盾にして銃口をピアニストに向ける。

「弥生、ピアニストは殺さない。そこを離れてこっちに来い」

オシショウが弥生の背中に鋭い声で命じた。後ろ手錠の下で、高く引き締まった美しい尻が僅かに震えた。弥生はじっとピアニストの目を見つめ続けている。背中の銃口は少しも気にならなかった。一心にピアニストのことだけを思いやった。警察への生け贄には修太がいる。ピアニストのベレッタは発射されることはない。滅びの近いことを弥生は確信した。ピアニストも自分もここで死ぬのだと思った。惜しまれる滅びを選ぼう。そう決心した。弥生の全身から急に緊張が去った。後ろ手に縛られた両手を強く握り締める。

「弥生、早く退け」

オシショウの怒声が、また背中を打った。

「私は、私の信仰を生きる」

澄み切った声がホール中に響き渡った。弥生がピアニストに向かって歩き出す。背筋をまっすぐに正し、後ろ手に縛られた胸を張って、全身でピアニストを覆い隠すために堂々と歩く。ピアニストと弥生の距離が急速につまっていく。ベレッタを構えたピアニストの顔が動揺し、苦悩に歪んだ。弥生はピアニストの目だけを見つめて歩き続ける。瞳の奥まで歩いていこうと決心した。ひとすじの道が遠くまで続いている。弥生が一メートル前まで迫ったとき、ピアニストの身体が左に跳んだ。目で動きを読んだ弥生の身体も、一瞬遅れて横に跳んだ。弥生の耳元でピアニストの銃が空を撃ち、カチッと貧相に鳴った。

ズガーンッ

同時にオシショウの銃声が響き、弥生の白い背中から真っ赤な血が吹き上がった。後ろ手の手錠を鳴らして弥生はピアニストの胸に倒れ込む。銃弾は背中から心臓を貫いていた。即死だった。オシショウが銃を構え直す。銃口から青い煙の上がるベレッタの照準を慎重にピアニストに合わせ、引き金を絞る。

「ウワアー」

唸りに似た叫びを上げて、緊縛されたMの裸身が飛鳥に突進した。飛鳥の身体がもんどり打ってテーブルごとオシショウを突き倒す。その拍子に照準の狂った銃口から連続して三弾が発射された。

「ヒッー」

布を引き裂くようなかん高い悲鳴が睦月の口を突いた。揺らめく足を踏ん張ってMはステージ奥を見た。睦月が縋り付いている修太の額にぽっかりと黒い穴が開いている。照準の狂った一弾が眉間を打ち抜いたのだ。修太も即死だったに違いない。Mは迷わず弥生の死体に駆け寄る。修太には睦月がいる。弥生の亡骸を抱くピアニストは、なぜか視野に入らなかった。弥生の身体をピアニストがMに差し向けた。血まみれになった裸身が哀れで、愛おしくてならない。Mは後ろ手に緊縛された不自由な裸身を弥生の身体に密着させた。全身を素肌に擦り付け、溢れ出る血を舌で舐め、口に啜った。温かな肌と血の温もりがMを悲しみの淵に突き落とす。Mと睦月の号泣する声がホール中にこだました。しかし、すべてが大ホールの舞台で起こったことだ。銃声も、悲鳴も、号泣も、ホールの外に漏れることはなかった。

ベレッタを手にしたオシショウがゆっくりと立ち上がった。憎々しい表情で両手で拳銃を構える。腰を落として再度慎重にピアニストに狙いを付けた。

「オシショウ、もういいですよ。修太の代わりがいなくなってしまう。ピアニストの始末は警察がします。最終幕のセットをして引き上げましょう」

飛鳥がうんざりした声でオシショウを制し、素っ裸で抱き合っている三人の背後に回った。右手に新しい麻縄の束を下げている。

「一切が終わったんだ。最後の舞台は私が演出する。Mとピアニストの肉体を素材にして、踏み込んできた警官があっと驚くようなアートを作ってやるよ。私にだって遊び心はある」

進行する狂気に侵されたように飛鳥が宣告した。唇の端に垂れた涎を麻縄で拭って、ピアニストの背後に屈み込んだ。弥生を抱いてぼう然とうずくまるピアニストの両手を背中にねじ曲げ、両手首をきつく緊縛する。弥生の死体は空しく舞台の上に転がってしまった。続いて飛鳥は、血まみれになったMを乱暴に立ち上がらせた。緊縛された裸身が直立し、全身を揺すって啜り泣いている。飛鳥の震える手がMの両脇から縄を通した。二本の縄で両乳房の上を縛ってから、厳重に腰縄を補強する。最後に左右の足首を別々の縄できつく縛った。

「オシショウ、T字型のバトンを下ろしてください。うつ伏せの開脚姿勢でMを舞台の上に吊します」

飛鳥が大声で舞台下手のオシショウに声を掛けた。オシショウが黙って舞台袖に消えた。やがて低いモーターの音とともに、十メートル上の天井から二本のワイヤーで吊り下げられたT字型のスチールパイプが下りてきた。パイプは床から二・五メートルほどの高さで止まった。飛鳥が背中に打った胸縄の縄尻を曳いてパイプの下にMを追いやる。直立した裸身の背中から延びた縄尻を、たるませたまま長いパイプに縛り付けた。次に、腰縄をとって同じパイプを潜らせた。右手でMのウエストを抱え、飛鳥が全身に力を入れてMを抱え上げた。左手で腰縄を引き絞ってからMの身体を離す。胸縄と腰縄の二本の縄がピンと張ってMの体重を支えた。うつ伏せた裸身が斜めに吊り下げられている。下を向いた顔の下三十センチメートルの所に舞台があった。長い髪が床に垂れ下がっている。腰は床から一メートルの高さで吊られている。不安定な姿勢に尻が震える。尻の割れ目を縦に縛った縄が無惨だった。自由になる両足が無様に空を蹴る。飛鳥が右足首を縛った縄を横に走るパイプの端に高々と吊した。続いて左足も吊り上げられた。胸縄と腰縄、そして両足首を縛った縄の四本でうつ伏せに吊り下げられた裸身が大きく両足を開き、弓なりになって宙に浮かんだ。体重を支える縄目が素肌を噛み、縄がきしむ。たまらない痛みと苦しさで、

頼りなく全身が揺れた。
「広げきった股間が寒くないように、衝立を用意してやるよ」
　吊り下がった裸身を見下ろして、飛鳥が楽しそうにつぶやいた。今までしたことがない肉体労働にも飛鳥は疲れを見せない。身体を翻してピアニストに近寄っていく。縄尻を持って曳き立ててきたピアニストを小突いて、Mの股間に無理矢理正座させた。膝が崩れぬように麻縄で厳重に縛り付ける。ピアニストは弓なりに吊り下げられた股間に顔を押し込んだ姿勢で拘束されてしまった。目の前に大きく開いた股間がある。陰門を封鎖したリングに通した縄がざらついた感触をピアニストに伝えた。
「悲劇のヒロインとヒーローがこれで揃った。踏み込んでくる警官も動転して、捜査が遅れるかも知れない。かわいそうだけど股縄は外さないよ。これは悲劇だからね、官能劇になっては困る」
　肩で大きく息をついた飛鳥が、芸術作品を眺めるような陶酔した声で言った。
「あなたたちこそ喜劇役者よ。逃げおおせるわけがない」
　Mの怒声がホールに響いた。弓なりに吊り下げられた裸身が宙で揺れる。
「相変わらず、Mは往生際が悪い。ピアニストは何か言うことがあるかな」
　愉快そうに飛鳥が矛先を変えた。
「僕の負けだ。したいようにするがいい。だが、こんなに多くの死をオシショウが望むとは思わなかった。最大の誤算だ。責任を痛感する」
「ハハハハハ」
　下手から近寄ってきたオシショウが高らかに笑った。
「官能を求めたMと、変革を求めたピアニストにぴったりの構図だ。他の者は滅びの道を求めただけだ。そして今夜、見事に本懐を遂げた。信仰のない者だけが無様に生き延びるのだ。誰からも惜しまれることがない。恥辱にまみれてほろびの時を待つがいい。飛鳥、そろそろ時間だろう」
　オシショウが促し、飛鳥が腕時計を見た。もうすぐ午前零時だった。
「午前零時には魔法が解ける。Mとピアニストの夢もそれまでだ。オシショウ、爆弾をセットしてきます。救急車に乗り込んでいてください。ボタンを押せば五分後に爆発する」
　飛鳥がこれ見よがしに、修太から取り上げたリモートコントロールの起爆装置をピアニストに見せて舞台を下りた。オシショウは下手奥の偽救急車に向かう。静まり返ったホールに、飛鳥の足音と修太の亡骸を抱いて啜り上げる睦月の泣き声だけが響いた。Mも弥生

の亡骸を抱いて友のためにさめざめと泣きたいと思う。これ以上はない恥ずかしい格好で晒し者になった姿が情けなくて仕方がない。うなだれた顔を上げると、五メートル先の床に血まみれになった遺体がねじ曲がって転がっている。ちょうどMの目の高さだった。無機物になってしまった裸の遺体は、それでも美しく見えた。白々とした尻がMに向けられている。尻の割れ目から流れ出た汚物が無惨だ。死に顔が見えないことが無性に悲しく、うれしかった。

「頑張るのよ。Mには私がついているわ」

亡骸がMに語りかけた。見えない死に顔が幻聴をもたらす。勇気が出そうになった。しかし、もう弥生はMについていてはくれない。殉教者は一人で死ぬのだ。逆さ吊りになったMの目から、また涙がこぼれ落ちた。

「M、すぐに爆弾が破裂する。ホールのドアから爆風が吹き込むかも知れない。身体を固くして衝撃に備えろ」

突然、ピアニストの声が耳を打った。頭で鳴っていた弥生の声がスッと消え去る。現実がMの裸身を覆いつくした。全身が緊張する。

「どうして」

反射的に聞き返した。

「きっと修太が飛鳥をだましたんだ。リモコンのボタンを押せば、どこで押してもすぐ爆発する」

ピアニストの言葉が終わらないうちに鋭い衝撃が舞台を震わせた。轟音が響き渡り、大ホールの二重ドアから熱風が吹き込んできた。

正面玄関の横に並んだカウンターの陰で、極月は見張りを続けていた。配置についてからもう一時間半になる。何の異常もなかった。だが、集結最終時刻の午前零時が間もないというのに何の連絡もない。極月のいらだちは募っていった。何度もエントランスホールの奥のドアを振り返った。何回目かに振り返った視界に大きく開くドアが入った。立ち上がって見つめると、黒い人影がエレベーターホールに向かっていく。警備員の巡回かと思って、慌ててカウンターの陰に伏せた。同時に足元から衝撃が突き上げてきた。驚いて見上げたエントランスホールのガラス屋根越しに、夜空に吹き上げる真っ赤な火柱が見えた。火柱は透明なガラス張りのエレベーター通路を駆け上がって、打ち上げ花火のように夜空に散った。ライトアップされた白い繭型屋根が真っ赤に染まる。爆発音に痺れきった耳に

太い叫び声が飛び込んできた。
「爆発だ。警察と消防に通報しろ」
巡回を始めた警備員の悲鳴が、崩れ落ちて割れるガラスの音に混ざった。ちょうど午前零時だった。極月は右手のベレッタを握り締めて、大ホールに向かって走った。ホールのドアの前に、見る影もなく焼け爛れた飛鳥の死体が吹き飛ばされていた。かろうじて焼け残ったスーツの背中が身元を告げている。大ホールの客席を駆けながら極月が大声で叫ぶ。
「トラブル発生、飛鳥が死んだわ」
興奮した叫びに答える声はない。客席を走り抜けて、異様な裸体が吊り下がった舞台に迫る。しなやかな身体が一気にジャンプして舞台に上がった。血塗られた床に横たわった六つの死体と、Mとピアニストの悲惨な姿が一切の出来事を極月に告げていた。
「極月、早く救急車を出せ」
偽救急車の助手席から降りてきたオシショウが鋭い声で命じた。
「卑怯者、私は裏切りは許さない。師といえども懲罰する」
高らかに叫んだ極月がオシショウの言い訳も聞かずにベレッタを構えた。迷うことなく連続して五発撃った。全弾を腹部に受けたオシショウが舞うように床に倒れた。しばらく腰を曲げて全身を痙攣させていたが、すぐにぐったりする。ほとんど即死だった。極月の手から重いベレッタが床に落ちた。乾いた音が合図のようにピアニストが口を開く。
「極月一人なら今からでも脱出できる。救急車に乗っていってくれ」
広げられた股間の前で後ろ手に縛られ、素っ裸で正座したピアニストを極月が不思議そうな目で見た。
「十五億円を一人で使い切る自信はないわ。私は残る」
ピアニストが肩を落とした。黙って股間に顔を寄せる。逆さ吊りになったMが苦しそうに首を曲げて極月を見上げた。
「極月、お願いがあるの。ここに残るのなら、股間を縛った縄を解いて欲しい。ピアニストに舐めさせたいの」
Mの願いに応えて極月がククッと笑う。笑い声が言葉に代わった。
「本当にMは強い。弥生が憧れたのも無理ないわね」
しんみりと言った極月が溜息を付き、尻の割れ目に食い込んだ縄を外した。ピアニストが待っていたように肛門を舐め、リングで封鎖された陰門に舌を這わせた。忘れていた官能の喜びが下腹部に込み上げてくる。パトカーのサイレンが聞こえ、ピアニストの喘ぎが

耳を打った。痛いほど股間が吸われる。ピアニストが弥生の肉体を思い出して吸ってくれることだけを、Mは痛切に願った。

完